

水沢夢
[イラスト]春日歩
俺, ツインテールになります。6
GAGAGA

小学館ｅＢｏｏｋｓ

俺、ツインテールになります。６

水沢　夢

イラスト　春日　歩


水沢夢
[イラスト]春日歩
俺、ツインテールになります。6

CONTENTS

デザイン／新井隼也＋ベイブリッジ・スタジオ


津辺愛香
トゥアール
桜川 尊
観束総二
津辺恋香
観束未春
神堂慧理那



目次

水沢夢

[イラスト]春日歩

俺、ツインテールになります。6

人物紹介

観束総二（みつかそうじ）
主人公。
ツインテールを愛する高校一年生。
テイルレッドに変身。

トゥアール
異世界から来た美少女。

津辺愛香（つべあいか）
総二の幼馴染。
テイルブルーに変身。

神堂慧理那（しんどうえりな）
総二たちの通う高校の生徒会長。
テイルイエローに変身。

桜川 尊（さくらがわ みこと）
神堂家のメイド兼
ボディーガード。

ダークグラスパー
眼鏡を愛する
アルティメギル首領直属戦士。

プロローグ　憧れたツインテール。

　怪物に自分の住む世界が侵略されても、わらわは別にどうでもよかった。

　後に様々な世界を巡ってわかったことじゃが、わらわの世界は確かに、他の世界に比べ科学は大きく発展していた。けれどその分、そこに生きる人々に情熱や活気が少なかったのじゃ。

　成人と認められる年齢が早く、速やかに社会の一員として組み込まれる世界。

　正直に言えば、退屈じゃった。世界の誰だれしもが、大なり小なりそう思っていたじゃろう。

　他者の趣味や嗜し好こうへの理解に乏しく、合理性の追求に特化したつまらない人間社会。

　だからこその発展であろう。だからこその繁栄であろう。

　社会の成熟からは、いつの時代も、どの世界も、功罪両方がもたらされる。

　早く大人になるよう急せかされる世界には、ツインテールの居場所はなく。

　発展を遂げた科学と医学の前では、視力矯正具である眼め鏡がねは、過去の遺物でしかなかった。

　わらわの愛するものはことごとく、生きていく上で不要と断じられたのじゃ。

　こんな世界に、何の未練があろう。ありもせぬ心の輝きを、怪物たちはどうして奪えよう。

　しかし、幼いながらに斜に構えていたわらわのちっぽけな価値観を、一人の戦士が吹き払ってくれた。本当は誰の心にも、輝きがあるのだということを教えてくれた。

　世界と社会に否定されても、自分自身の愛は偽れないと、気づかせてくれたのじゃ──。

　白銀に煌きらめくツインテールを凜りんとたなびかせ、異形の怪物を容易たやすく蹴散らす、無敵の美少女───トゥアール。
　怪物の侵略に、たった一人で敢然と立ち上がった……わらわたちの世界の、守り神。
　わらわは、あの人のようになりたいと思った。
　世界中の人が彼女のツインテールに憧あこがれ、導かれるようにこぞって同じ髪型にしだした時。
　わらわは、髪型の美しさだけでなく、彼女の強さそのものに惹ひかれ、そして同じように強くなりたいと願っていた。
　何なん人ぴとの意見にも左右されず、流行をなぞらず、確固として自分の信念を貫く。
　その果てに、世界中を己が信念の虜とりこにしてしまう。
　何と痛快なことか。子供っぽいと揶や揄ゆされたツインテールこそが、世界を救う救世主だったのじゃぞ。
　彼女こそ、世界の支配者に相応ふさわしい。侵略者を駆逐し、全ての人を導いて欲しい。
　彼女のようになりたい。彼女の隣に並びたい。彼女と同じ世界ツインテールを見ていたい。
　常に陰から見つめ、こっそり写真を撮った。住まいを突き止めようと、あとを尾つけた。部屋中に彼女の写真を貼はり、盗撮写真から抱き枕を作った。下着に彼女の顔をプリントした。
　子供のわらわにできるのはそんな他た愛わいのないままごとだけじゃったが、彼女に憧あこがれる気持ちは、誰だれにも負けるつもりはなかった。
　だからじゃろうか……いつしか、わらわの眼め鏡がねが、愛に応こたえ

た。願いは形となったのじゃ。
　わらわがその大いなる力を手にした時――全ては終わっていた。
　わらわとトゥアールの世界はアルティメギルに征服され、人々の心から色彩が消えた。
　人々の心から、ツインテールが消え――人々の心から、眼鏡が消えた。
　わらわの手に残されたのは、心の力を宿したたった一つの眼鏡だけじゃった。
　わらわが戦士になれるのが、もう少し早ければ。
　トゥアールと二人肩を並べ、戦うことができたなら……世界は、守れていたのではないか。
　もう少し粘り強くあとを尾けていれば。もう少し執念深く隠し撮りをしていれば。女々(めめ)しいもしも話じゃが、今でもそう悔やみ、嘆く。あと一歩、彼女に歩み寄れていたらと。
　いつでも結べるはずのツインテールが、盆に戻らぬ覆水となってしまった世界を見て、わらわは誓った。
　トゥアールのようにただ戦うだけでは、足りなかった。アルティメギルから人間の属性力(エレメーラ)は守れなかった。無尽蔵に湧(わ)いて出るエレメリアンを滅ぼすことなど、人間には不可能じゃ。その事実を受け入れたからこそ、できる戦いがある。
　悪逆の誹(そし)りを受けようとも、エレメリアンを内から支配し、制御すればよい――とな。
　全能の首領は別として、わらわに楯(たて)突(つ)くエレメリアンはもはや一体もいない。総てのエレメリアンを統率するわらわは、如(い)何(か)なる戦士にも負けぬ最強の支配者(グラスパー)なのじゃ。

　世界の喪失を見届けたわらわじゃからこそ、世界を守れなかった痛みを心に抱えたトゥアールを癒(いや)すことができる。そう信じておった。

その思いを支えに幾多の世界を超え、ようやく巡り逢った彼女は──贖しょく罪ざいのためにか、残された自らのツインテールを、別の戦士に託していた。

積もり積もった思いが憎しみに変わり、行き場のない怒りと共にわらわが戦いを挑んだその少女は、真っ向からわらわの思いを受け止めた。

確かに、果たせなかった願いを、希望を託すのに相応ふさわしい器量を、その少女は持っていた。

好敵手であり、わらわが二度目に愛を捧げた相手となった。

──その戦士が……トゥアールの魂を受け継いだツインテールの少女、テイルレッドが。

よもや男であるなどと、信じられるはずがあるまい!?

わらわの思いは……願いは、いったいいつまで流る転てんすればよいというのじゃ──。

第一章　ハッピーバースデーツインテール。

　最終闘体。弛たゆまぬ鍛錬と成長の果てにエレメリアンが辿たどり着く、文字通り闘いのため獲得した最後の肉体。奥の手であり、切り札である。
　しかしそんな武骨の粋すいとは対極に位置する──遥はるか天上の女神として崇あがめられるべき、隔世の麗しさをその手にしたエレメリアンがいた。
　反逆者、フェニックスギルディ。
　アルティメギルという組織に弓引いた裏切り者が、皮肉にも組織のどんな大幹部すらも到達しえなかった……いや、おそらくは識しりもしないであろう、真の頂いただきへと至ったのだ。
　すなわち───彼らの生みの親とも言える、人間そのものへの変身へと。

　戦いが終わり、ツインテイルズが去った、ロエル・リルナの双子姫の世界。
　そこにはまだ、三人の戦士が留とどまったままだった。
　アルティメギル闇やみの処刑人・ダークグラスパーとその相棒、メガ・ネプチューンＭｋ．II。
　そして、ポニーテールの少女の姿へと新生した、フェニックスギルディが。
　眩まばゆい肢体を、自慢の髪と同じ真紅の炎を薄布ドレスと変えて覆った少女は、そのポニーテールをたなびかせてダークグラスパーを見据えている。
「テイルレッドが……男じゃと!?　馬ば鹿かな、そんな世迷い言を信じられるか！」
　女性の身体からだへの変身だけでも驚きょう愕がくだったというのに、重ねて

告げられた事実はそれに輪をかけた衝撃であり。さしものダークグラスパーも、冷静さを失い目の前の少女に食ってかかった。
「そうじゃ、ブルーの方と勘違いをしておらぬか!?　奴やつが男だというのなら、納得するのも吝やぶさかではない!!」
　かつてそのように勘違いし、散っていった男の娘属性ガールズボーイの戦士がいた。あるいはそれと同じく、願望が先行しただけの虚言ではないのか。ダークグラスパーはフェニックスギルディを睨にらみつけるも、飄ひょう々ひょうとした態度に躱かわされる。
「逆に何で信じられねえんだ!?　ガスとマグマだけだった大地に生物の御先祖様が生まれたのもよ、随分と奇跡的な偶然だったと思うぜ？　属性力エレメーラだって同じさ。この膨大な平行世界の中、とんでもねえイレギュラーが生まれたって何の不思議もねえぜ!!」
　だが、進化の系譜にはルールがある。属性力エレメーラにも条理はある。そしてどんなイレギュラーだろうと、際さい涯がいはある。それを超えるなど、あってはならないことだ。
「貴様ほど強大な属性力エレメーラを持つならばなおのこと、不条理の中の条理は弁わきまえていよう！　ツインテールの戦士になれるほど強大な属性力エレメーラを持つ男など、存在するはずがない！」
　ダークグラスパーは、浮かんだ恐ろしい想像を払うように、拳こぶしを袈け裟さ懸がけに振り下ろした。
「もしいたとしたら、それはもはや……！」
「……ああ！　最っ高じゃねえか！　だから俺様は、あいつに惚ほれた!!」
　告白というにはあまりにも爽快な宣言に、ダークグラスパーは毒気を抜かれかける。
　少年さながらの快活な瞳ひとみと、対称的な白磁の素肌が、実に蠱こ惑わく的な美のコントラストを生み出している。健康的な妖よう艶えんさ。清廉の

中に垣間見える淫靡さ。何と悩ましい姿なのか。
　そのことが、ダークグラスパーを決定的に苛立たせた。
　彼女は……フェニックスギルディは、あまりにも美しい。眩い至高の肢体を満天下に晒しながら、それすらも添え物に過ぎないと言わんばかりの、ポニーテールの圧倒的な存在感。
　たまたま好きになった相手が、トゥアールやテイルレッドだっただけで、別段女性趣味を自覚しているわけではない。だがそんな彼女でも、瞠目の果てに魂を奪われてしまいそうなほど、フェニックスギルディは美しい。自身の口癖の如く、〝色眼鏡〟抜きに、だ。
　そしてフェニックスギルディがあらためてテイルレッドへの思いを告白したことで、ダークグラスパーにある事実を思い出させてしまったのだろう。頬が紅潮している。
「も、もし仮にじゃ！　奴が本当に男だとすれば……わらわは、裸を見られてしまったことになるのじゃぞ……！　キスまでしてしもうた……あ、あああ……‼」



　フェニックスギルディは、エレメリアンの姿の時と変わらぬ大おお仰ぎょうなアクションで、苦悩する少女に指を突きつけた。
「ダークグラスパー！　あんたもテイルレッドに惚ほれたんだろう!?　その正体が男だからって、それが何だってんだ!?」
「いや、後出しでそんなん知って変わらず惚れ続けろって、難易度高すぎるで!?」
　黙って二人の話を聞いていたメガ・ネも、ついに伝家の宝刀たるツッコミを抜いた。
「それともよ、男が怖いのか!?　お子様だな!!」
　からかわれるように煽あおられ、ダークグラスパーはあっさりと乗っかった。
「何じゃと!?　口を慎つつしめ、焼き鳥めが！　わ、わらわとて、将来を約束するような男が現れたならどういうことをするかぐらい、エロゲーで予習しておったわ！　怖くなどない!!」
「いいか！　あんたはテイルレッドに惚れた！　テイルレッドに裸も見せたしキスもした！　テイルレッドの正体は男だったが、あんたは将来を約束する男にならそーいうのも許せる！　いたって順調にことが進んでいるってだけの話だぜ!!」
「……おお、その通りじゃ！　よかった、何の問題もないではないか!!」
　そして、あっさりと説得されてしまうダークグラスパー。
「その信じ込みやすさは長ええ所とこなんや、けどな……ウチ心配やで、イースナちゃん」
　メガ・ネはがしょんがしょんと駆動音を響かせ、目眩めまいを起こしたようにたたらを踏んだ。
　フェニックスギルディは、ほっとしているダークグラスパーへと気さくに申し出る。

「まあ、そんなことより場所を変えようぜ。この世界は陸地が小さすぎる。今の俺様たちの戦闘場バトルフィールドには、ちと狭いだろ⁉」

　受けて立つとばかりに、ダークグラスパーは周囲の空間を湾曲させた。カオシックインフィニットの応用だろう。

　鈍にび色いろに歪ゆがむ大気。属性力エレメーラの深しん淵えんを潜り抜け、三人は空間転移されてゆく。

「ほおう、便利な技だな。例の異空間を使って、自前でテレポートもできるのか！」

「イースナちゃん！　この使い方は危険やで‼」

　フェニックスギルディもメガ・ネも驚いているが、危険は術者の彼女が一番承知していよう。無茶な使用法での反動でか、苦く悶もんに顔を歪めている。

「わらわはテイルレッドに、あの世界からは手を引くと約束したのじゃ。エレメリアンを一体たりとも残しておくわけにはいかぬ。むろん、貴様のようなヒトモドキであろうともな‼」

「それは、あんたが惚れた女のテイルレッドと交わした約束だろ？　男だって知ってさんざっぱら慌ててたが、変わらずちゃんと守るってことかい？」

　先ほどとは、逆の問いかけ。試すような視線を、真っ向から受け止めるダークグラスパー。

「わらわにとって、この眼め鏡がねを通して見たものだけが真実じゃ！　真実を確かめるまで、テイルレッドはわらわの嫁となる娘！　彼女と交わした約束は、断じて守ろうぞ‼」

「フッ……やっぱあんたは嫌いになれねえな、ダークグラスパーさんよ。そういう不器用な仁義、熱くて心ここ地ちいいぜ‼」

　現れたのは地平の果てまで岩と砂で覆われた、月面のごとき死世界。決戦の舞台は整った。

「ゆくぞ、メガ・ネ!!」
「ＯＫや、全開でいくでイースナちゃん!!」

　処刑人と反逆者の真の戦いの火ひ蓋ぶたが、今切って落とされた。

　　　◇

　俺の実家である喫茶店「アドレシェンツァ」の店内は、華やかな飾りつけが成されていた。
「……そーじの家の喫茶店で祝ってくれるのはいいんだけど……」
　その店内の中心に移動させた丸テーブルに着いている本日の主賓・愛あい香かは、ぐるりと周りを見渡し──
「何で常連客このひとたちまでいるのよお!!」
　クラッカーを持ったりトンガリ帽子をかぶったりしているお店の常連さんたちに向け、遠慮のないツッコミをした。
「強しいて言うなら、導かれた、とでも言っておこうかな……」
　ニヒルに微笑ほほえむのは常連の一人で、魔王の生まれ変わりらしい長身のおじさんだ。
「誰だれよあなたは!?」
「……誰？　フッ、そうだな……。それは私の方が聞きたいくらいさ……」
　めっちゃ情感がこもっている。みんな、役者と見み紛まがうほど演技力が高いんだよなあ……素だから演技力がいらないのかもしれないが。
　どんどん増えていくな、こういうお客さん。

　俺たちの世界は、相変わらずうだるような暑さが続く。
　強化合宿で訪れた、穏やかな風吹く異世界での激闘から、数日。

今日は八月八日——愛香の誕生日だ。

アルティメギルが停戦を提案した期日は八月六日だったが、身構えていた俺たちを余(よ)所(そ)にこうしてそれから二日経(た)った今も、奴(やつ)らが現れる気配はない。

それならそうで残りの夏休みを満喫することにした俺たちは、その一環として今日、愛香の誕生パーティーを開いた。

例年は愛香の家での誕生会に俺がお邪魔していたのだが、今年は愛香の両親が海外出張でいない。そこで俺は、どうせなら今回はツインテール部の面々も一緒になってうちでパーッとやらないか、と提案。みんなの賛同を得た。

当初はうちの居間でやろうと思っていたのだが、それを聞いた母さんが誕生会の仕切りを買って出た結果、何(な)故(ぜ)か常連さんも一緒になって喫茶店でのお祝いになってしまったのだ。

店は昼過ぎで閉め、夕方からは〝本日貸し切り〟の札がドアの表にかけられている。でも、店内の顔ぶれを見ると営業時と何ら変わりはない。

窓に天井、テーブルにカウンターもと、これでもかと装飾され、輪っか飾りや垂れ幕、果てはくす玉まである。手の込んだ店内の飾り付けは、常連さんたちが手伝ってくれたそうだ。

盛大な拍手を受けて愛(あい)香(か)は多少バツが悪そうに苦笑しているが、俺にはわかる。

愛香のツインテールが、この状況をしっかりと喜んでいるのを。

二つの丸テーブルを寄せて作った主賓席には、俺と愛香、トゥアール、慧(え)理(り)那(な)、桜(さくら)川(がわ)先生、そして愛香のお姉さんの恋(れん)香(か)さんが座っている。その周りの席にいるのは常連さんたちだ。

恋香さんが場に馴(な)染(じ)めずにいないか気になっていたが、そんな俺の視線を感じ取ったのか、恋香さんが肩を竦(すく)めて言った。

「ごめんね、私まで来ちゃって。よかったかな？」
「何言ってるんですか。お姉さんなんだから、当然じゃないですか。それに恋香さん、最近またここの常連になってくれたみたいだし」
「ありがとう、総(そう)くん」
　他(た)愛(わい)のない俺の返しに、天使のような微笑(ほほえ)みで応(こた)えてくれる恋香さん。お客さんたちもその笑顔に癒(いや)されている。
　母さんが、主賓席にケーキを運んできた。
「それじゃ、火を点(つ)けましょう！　総ちゃん、お願いね」
「え、俺が？」
　そのまま母さんがローソクに火を点けるものだと思っていた俺は、つい聞き返した。
「だって総ちゃん、炎の使い手じゃない！」
「バッ……!!」
　慌てて母さんの口に手を当てようとしたが、周りの人たちはにこにこ笑っている。その中の一人、タキシードの似合いそうなロマンスグレーのおじさんがうんうんと頷(うなず)いて言った。
「ほほう、総(そう)二(じ)君も炎を使うのか。おじさんもそうなんだよ。昔は光とかの方が強いって認識されててそっちが人気だったけど、今はテイルレッドの影響で炎使いが人気だからね」
　流(は)行(や)っちゃってるのかよ。火遊びは駄目だよって啓(けい)蒙(もう)も、世間で徹底して欲しいな。
　さらにその隣に座っていた天然パーマのおじさんが、俺に向かって何かを放り投げてきた。
　慌ててキャッチすると、それは見るからに高級感のあるオイルライターだった。
「君にあげるよ、炎使い君。僕は妻に『禁煙しないとあなたの天パでキャンプファイヤーするわよ』と脅されていてね。炎使いは卒業したの

さ」
「あ、ありがとうございます。でも俺、大人になってもタバコは吸わないつもりなんです。周りの人のツインテール……髪の毛に、煙の匂いつけちゃうのは申し訳ないですし」
　別に大人の人の喫煙を否定するわけじゃないけど、副流煙は身体（からだ）にもツインテールにもあまりよくないから、俺自身は気をつけるべきだ。
「……！」
　突然愛（あい）香（か）が身体を硬直させ、湯気が出るかというほど顔を真（ま）っ赤（か）にさせた。
「そーじ……そ、それって、大人になってもずっとあた……」
「トゥアールファイヤー!!」
　トゥアールが愛香の言葉を遮（さえぎ）るように身を乗り出し、ケーキのローソク全てを一瞬で灯（とも）してみせた。突然のイリュージョンに、お客さんが一斉に拍手をする。
　俺の隣に座っている慧（え）理（り）那（な）も、それに合わせて笑顔で拍手をしていた。
「そういえば、慧理那の誕生日っていつ？」
　ふと気になったことを尋ねる。慧理那は俺に向き直り、楚（そ）々（そ）と微笑（ほほえ）んだ。
「わたくしは一二月ですので、まだまだ先ですわ」
「そっか。それじゃあその時は、こんな風にみんなでお祝いしよう。……あ、でも……慧理那の誕生日だと、やっぱ盛大なパーティーがあるよな」
　俺の勝手なイメージだが、富豪の令嬢って高級ホテルのフロアを丸々貸し切って、関連会社の人や偉い人をものすごい数を集めて、ドレスパーティーをするような気がする。無理に誘うのは迷惑かもしれない。

「もちろんお父様とお母様たちと一緒にお祝いするのも大事ですけれど、わたくし、今年は皆さんにお祝いして欲しいですわ。そして……」
　母さんが店内の電気を消す。日も沈んで頃ころ合あいもよく、店内は仄ほのかな闇やみに包まれた。
　常連のおじさまたちがこれまた、達者なテノールでバースデーソングを歌いなさるのだ。
　薄うす暗くら闇やみの中、ローソクの淡い炎に照らされた慧理那の顔は、赤らんで見えた。バースデーソングが終盤に差し掛かった時──
「……そして……来年も、再来年も、その先も……わたくしの誕生日は、観み束つか君と……」

「ほふううううううううううううううううううううう!!」

　愛香が、ケーキのロウソクをわずか一吹きで残らず吹き消した。
　先ほどのトゥアールファイヤーへの、アンサーソングならぬアンサーイリュージョンとして、アイカタイフーンを放ったのだろう。雄々しき女子力という、相反する二つを兼ね備えた豪快な息吹に、先ほどの点火の時以上の拍手が店内を席巻した。
　何て肺活量だ。変身前でこれなら、変身したら口からレーザーでも出せるんじゃないのか、愛あい香か。
「うふふ～そうですね～総そう二じ様」
　まるで俺の心を読み取ったように、暗くら闇やみに紛れトゥアールが意味ありげな笑いを浮かべる。
　やがて明かりがつけられ、みんなで「お誕生日おめでとう」と唱和する。
　慧え理り那なが涙目で笑顔になっているが……そういえば、さっき何を言いかけたんだろう。

　席に着かず母さんの手伝いをしていた桜さくら川がわ先生は、油断のない観察眼で常連さんたちをサーチしている。今日は妙におとなしいと思っていたが、沈黙の婚活中だったようだ。
「そういえば……尊みことの誕生日も来月にありますから、みんなでお祝いできますわね！」
　しばらく立ちっぱなしの桜川先生に話題を振って、席でくつろいでもらおうという慧理那の心遣いだったのかも知れないが、それは逆効果だった。
「たん……じょうび……？　わた、しの……」
　桜川先生が突然膝ひざから崩れ落ちたので、気でも失ったのかと肝を冷やす。
「いやだ……いやだああああああああああああああああああああああ!!」
「落ち着いて、桜川先生!!」
　慌てて駆け寄った俺の肩を掴つかみ、涙目で叫ぶ桜川先生。
「わ、わた……私は……来月独身のまま二九になってしまう……！　終わりだ！　何もかも終わりだ!!」
　来月地球に巨大隕いん石せきが落ちて滅亡します、と政府公式で発表された日の国民がこうなるだろう、というような取り乱し具合で、桜川先生は頭を抱えて蹲うずくまった。
「私の命も……あと四〇日足らずか……」
　光の消えた瞳ひとみで自じちょう嘲するメイドさん。
「お嬢様……最後までお嬢様をお守りできずに逝ゆく尊を、どうかお許しください……」
　冗談で言っているようには全く見えない。
　三〇歳までに結婚しないと魂を刈り取られると、死神と契約でもしたのだろうか。

　抱き起こそうと差し出した俺の手を、トラバサミのような勢いで桜川先生が握り締める。
「……観み束つか……結婚してくれ」
「なっ！」
　いつも通りの台詞せりふなのだが、半泣きで上目遣いに言われると、思わずドキッとしてしまう。
「やばいですよ、恐怖で潜在能力が解放されて、年とし増まが覚醒してます！　今まで三〇年近く使いそびれてきた女としてのパワーを全開しているんです!!」
　トゥアールの言葉を自らのツインテールの曲面を活いかして容易たやすくやり過ごし、桜川先生はさらに俺へ顔を近づけてきた。
「観束、お前は地球の平和を守る戦士だろう！　目の前の女の婚期も守れずに、地球の平和が守れるのか!!」
「声！　声!!」
　俺は血相を変えて店内を見渡す。母さんといい、バックアップメンバーの口が軽すぎる!!
　幸い、周りの人たちは聞こえていなかったようで、ニコニコ穏やかな笑顔のままだった。
　もっとも、聞こえていたとしても、ここのお客さんたちならすんなりと誤ご魔ま化かせそうだが。
　俺は耳元で囁ささやくような小声で、桜さくら川がわ先生にだけ聞こえるよう返答した。
「俺は、地球のツインテールを守るために戦ってるだけなんで……」
「なら、私のツインテールを守れ！　独身のまま次の誕生日を迎えれば、私のツインテールは悲しみで解ほどけてしまうぞ!!」
「そんなッ!?」
　人質ならぬ、ツインテール質だ。俺にとって、もっとも苦しい交換条

件を要求してきた。
　さすがに見かねたのか、慧え理り那なが窘たしなめる。
「尊みこと、今日は津つ辺べさんのお誕生日ですわ。今日は笑顔で。婚活は明日から頑張りましょう！」
　桜川先生ははっと我に返ってまず慧理那に謝ると、愛あい香かにも頭を下げた。
「いや、すまないな津辺。せっかくの誕生日を湿っぽくしてしまって」
「湿っぽいっていうか、いつも通りって感じですけど……」
　その通り、赤の他人の目の前でもこんな感じだもんな。
「うむ、ポジティブに考えよう。あと一か月以上あるんだ。何とかなるさ！」
　桜川先生も思い直してくれて、ツインテール質も無事解放された。事件は解決したのだ。
　と、思ったのだが、この二時間ドラマにはエンドロール後のどんでん返しがあった。
「だが誕生日フィナーレまで残り七日間になったら、私は何をするかわからん。その時は頼むぞ、観み束つか」
　一瞬だけ光の消えた瞳ひとみを垣かい間ま見せ、桜川先生は俺の肩を叩たたいた。
　怖いよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!
　来月地球に巨大隕いん石せきが落ちて滅亡します、と政府公式で発表された日の国民がこうなるだろう、というような取り乱し具合で、俺は頭を抱えて蹲うずくまった。
「大丈夫よそーじ、あたしが守ってあげるから！」
「未来ある一六の小娘が、未来などとうに見失ったアラサーに勝てると思うな!!」
　もうその口上、桜川先生の決め台詞ぜりふになってしまっていやしない

か。
　愛香と桜川先生がそれぞれ構えを取って対たい峙じし、予期せぬバースデーマッチのゴングが鳴ろうとする中、挨あい拶さつのタイミングを窺うかがっていたらしい慧理那が、今とばかりに立ち上がって三つ隣の恋れん香かさんの席へと歩いて行った。
「ご挨拶が遅れましてすみません、津辺さんのお姉様。初めまして、わたくし陽よう月げつ学園高等部で生徒会長をしておりますす、神しん堂どう慧理那と申しますわ」
「初めまして、神堂さん。姉の津辺恋香、陽月の大学部の二年です」
　恋香さんと慧理那が、互いの両手で包み合うような優しい握手を交わす。
　俺の知り合いの中でも、特に礼儀正しい二人だ。絵になるなあ。
「神しん堂どうさん。愛あい香かは少しお転てん婆ばなところがあるから、心配で……。学校で苦労をおかけしていませんか？」
　……少し……お転婆……。
　この姉妹愛って名前のフィルター、高性能すぎて重油を真水に濾ろ過かするレベルじゃないか。
「とんでもありませんわ、いつもわたくしが愛香さんに助けられているぐらいで」
「そうですか。よかったわ、いいお友達ばかりで」
　嬉うれしそうに微笑ほほえむ恋れん香かさん。
　確かに戦いでは助けられてるけど、普段は逆だよなあ……。俺は両方で助けられてるけど。
　恋香さんのお茶目な質問に、横で聞いていた愛香が頰ほおを膨ふくらませる。
「もう、お姉ちゃん！」
　当然、一番異議がありそうなトゥアールが、そんな社交辞令を見過ご

すはずがなかった。
「慧ぇ理ゥ那なさんはそうかもしれませんけど、私はそのお転婆にもう三〇〇回以上致命傷くらってるんですよ！　お姉さんからきつく叱しかってやってください!!」
「大おお袈げ裟さだろトゥアール……四か月で三〇〇回って、毎日三回ずつは致命傷負わされてる計算になるじゃすまん、その通りだった!!」
　頭で簡単な割り算をしているうちに真実にたどり着き、俺は言葉半ばに訂正し謝罪する。
「トゥアールさんは、総そうくんの親しん戚せきなんですよね？」
　物騒な告白も友情の一環と難なく受け止め、恋香さんはトゥアールに質問を始めた。
「その〝親戚〟という言葉の裏に隠されたニュアンスを探っていただければ！　今は、総そう二じ様と一つ屋根の下で暮らさせていただいています!!」
　一つ屋根の下って、地下一〇〇〇メートルにまでも適用される日本語なのかなあ……。
「総二、様……？」
　トゥアールの呼び方に戸惑っているのか、恋香さんが復唱して目をしばたかせている。
「あら、やっぱりその呼び方気になっちゃいます!?　うふふ、出会ったその日から──」
　妙に身体からだをくねらせて恋香さんに近付くトゥアール。その言葉も半ばに、慧理那がツインテールをはためかせて身体を割り込ませた。
「お、お伝えし忘れていましたが、わたくし、観み束つか君のことはご主人様とも呼びますわ!!」
　おおおおおお……と、常連さんたちが総立ちでどよめきを上げる。
「……そうなんですか」

あれ、恋香さんの表情が暗い……というか、冷たい、ような……気のせいだと思うけど。

「でも、ちょっと不思議だな。総くんも愛香も、ついこの前までこんなに小さかったのに」

恋香さんは突然別の話題を切り出し、手を腰のあたりで振って子供の頃ころの背丈を例えた。

「懐かしいわよね、総くん。子供の頃のこと、覚えてる？　愛香ったらね、総くんのいない時私に向かって『お姉ちゃん、ツインテールにしな』……」

「お姉ちゃん！　言っちゃ駄目!!」

戯たわむれる姉妹を横目に、俺はそっと目を閉じて記憶をたどった。

「覚えてますよ。愛あい香かが初めてツインテールにした日から、毎日」

愛香のツインテールの記憶おもいでは、いつまで経たっても色いろ褪あせない。

「観み束つか君……覚えてるって、以前津つ辺べさんのツインテールはずっと同じだったと仰っていませんでした!?」

慧え理り那ながおろおろしながら俺のシャツの袖そでを引っ張ってくる。

「そりゃ同じだけど、少し伸びてる時とか、前髪だけちょっと切りすぎた時とか、色々あるから、記憶には残るよ。愛香のツインテールは全部覚えてる」

「あ、あ、うううううううう～～～～っ」

何な故ぜか愛香は顔を真まっ赤かにして、隣の席で空いていた椅い子すに摑つかみかかった。

「愛香ちゃん、スチール製の椅子の脚を粘土みたいに捻ねじっちゃうのはどうかな!?」

中二大好きな常連さんたちだが、リアルな規格外の腕力に対しては驚きが勝ってしまうらしい。愛香を必死になだめようとしている。

「相変わらずツインテール大好きね、総くん。愛香とは特別仲良しさんだものね」

　頬ほおに手を当て、嬉うれしそうに微笑ほほえむ恋れん香かさん。妹のことを幼おさな馴な染じみの俺がしっかり覚えているのを、喜んでくれているんだろう。俺まで嬉しくなる。

「いえいえ私も総そう二じ様の全てを記憶していますよ！　脳だけでなく、この身体からだで!!」

　トゥアールが恋香さんの目の前で胸をアピールするような体勢を取る。

「……でも、総くんは女の子をツインテールで記憶するみたいですから、きっと愛香の方をよく覚えているんだと思いますよ、トゥアールさん」

　恋香さんは薄く目を細め、何かいつもと違う、大人っぽい笑顔を見せた。

「もちろん愛香だけじゃなく私も、総くんのことは小さい頃からずうっと見てますから。どんな風に愛香のツインテールを見ていたかとか、他にはどんなツインテールに目を奪われたかとか、ぜぇんぶ覚えてますよ」

　店内の談笑が一瞬止まり、お客さんたちも含め皆の視線が一斉に恋香さんに集まった。

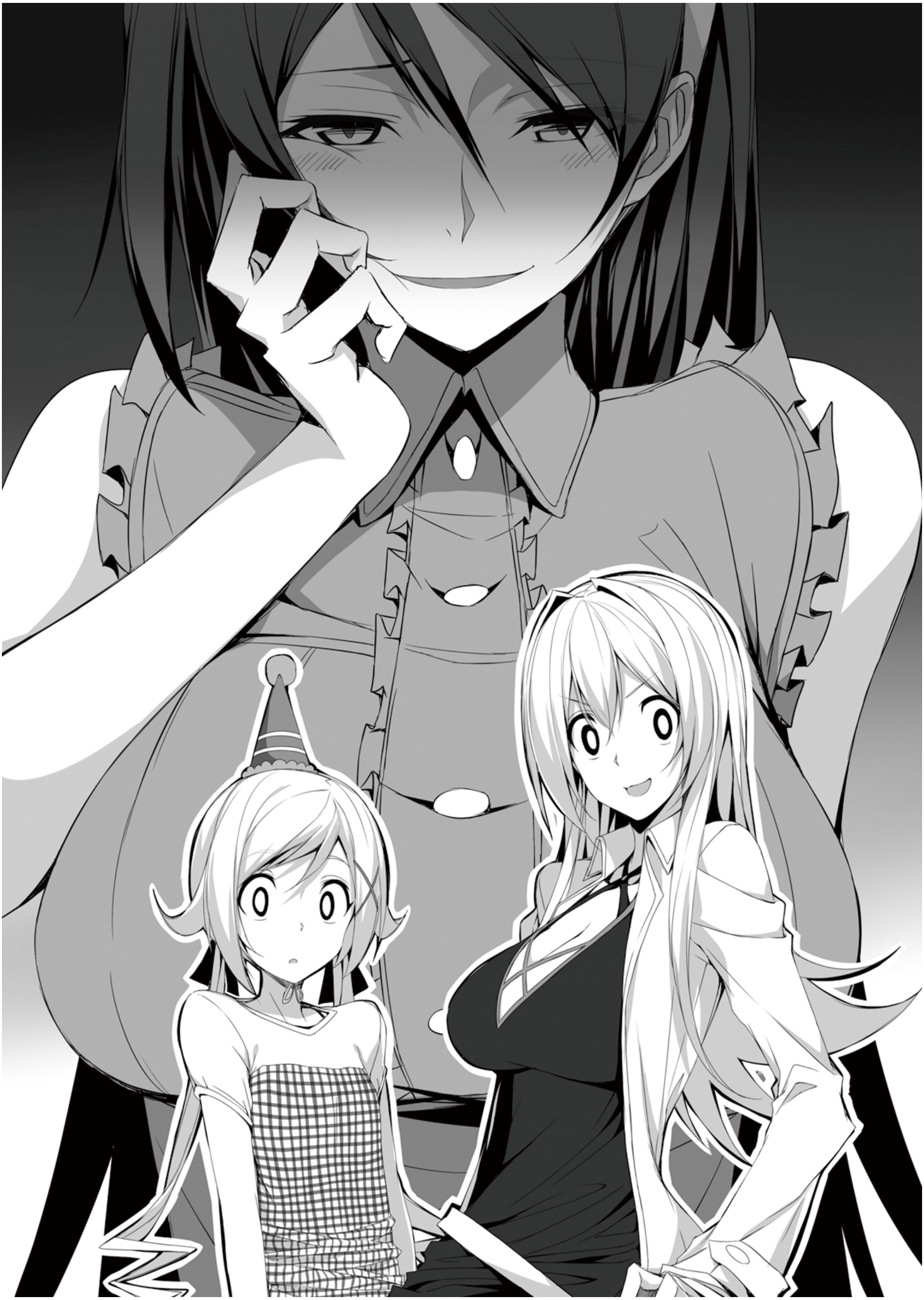
　特にトゥアールと慧理那と桜さくら川がわ先生は、恋香さんを見て瞬またたき一つせずに硬直している。

　まあ俺も、家族同然のお姉さんにあんなくすぐったいことを言われて、ちょっと照れくさかったしな。

　他の人がさっきみたいな思い出話を聞いても、反応に困るのかもしれない。愛香を見ると、俺と同じように不思議そうにしている。やっぱりそういうことなんだろう。

　トゥアールは爪つま先さき立だちでつつつ……と小刻みなステップで恋香さんから離れ、愛香に近付くと、耳元で何か囁ささやいていた。
「愛あい香かさん愛香さん、お姉さんなんですけど……」
「トゥアール、お姉ちゃんには変なちょっかい出さないでよ!?　あたしたちのいつものノリには絶対ついていけないから!!」
「……愛香さんって身内には洞察力が働かな━獅し子し身しん中ちゅうの虫って言葉、知ってますよね？」
　トゥアールが何な故ぜか、珍しく表情に影を落としている。
「あれ？　どうした慧え理り那な、具合でも悪いのか？」
「む～……何でもありませんわっ！」
　こちらも、慧理那にしては珍しい口調で返され、俺は思わずそうか、と頷うなずいてしまった。
「素晴らしい！　素晴らしいですよ店長マスター！　現実でこんな光景が見れるなんて!!」
「そうでしょうそうでしょう、この素敵なラブコメ桃源郷を、みんなにも見せたくて……!!」
　常連さんたちがほろほろと涙を流しながら、母さんと次々に握手をしている。
　こんな光景って……普通だよなあ。椅い子すの脚を捻ねじる女学生は確かに希け有うな光景だろうけど。

　誕生会はその後も盛り上がり、俺は母さんや常連さんに感謝するのだった。
　久しぶりだな、こんな穏やかな日常は。こうなったらもう、夏休みの間中休戦が続いて欲しいもんだ。
　それにしてもアルティメギルのやつら、一体何をしてるのやら━━。



◇

「24Ｐ(ページ)、ペン入れ終わり申した！　ベタ塗りをお願い致す!!」
「よし、任せよ!!」
「至急確認したい！　三コマ目の集中線は、どのように仕上げれば!?」
「バヒューンでシュババーンという感じで如(い)何(か)がかッ!!」
「委細承知!!」

　鋼(はがね)の筋肉から応酬される、繊(せん)細(さい)無比なクリエイティビティ——。

　総(そう)二(じ)たちの世界へ侵攻しているアルティメギル部隊の母艦……その大ホールは今、漢(おとこ)たちの熱き吐息と汗に噎(む)せ返っていた。
　そして、怒号の如き業務伝達がホール内を弾雨と駆け巡っている。
　屈強な怪物たちが液晶タブレットの画面にかじりつき、節くれ立った巨大な指で握り締めたペンを走らせ、絵画に励む姿——異様ながらも、篤(とっ)厚(こう)な美しさを感じずにはいられない。
　打倒テイルブルーの御(み)旗(はた)を掲げ、美の四心(ビー・テイフル・ハート)隊長・ビートルギルディの指示の元、侵攻を停止してまで修行に勤(いそ)しんできた一同。
　そう——ツインテイルズが異世界で貴の三葉(ノー・ブル・クラブ)と最大の死闘を繰り広げている間、休戦を申し出た彼らとて、ただ遊んでいたわけではない。
　漫画を描(か)いていたのだ。

　テイルブルーのイラストを無心で描き続けよ——そんな心身砕く荒行を超えた先に待っていたのは、「向上した画力を活(い)かし、漫画を描こ

う」という、さらなる修しゅ羅ら行ぎょうであった。

　もはや誰だれかが「いや、何やってるんですか」と真顔で止めて然しかるべき局面だったが、さすがは首領直属一部隊の隊長、ビートルギルディ。洗脳……もとい、あめと鞭むちの緩急を、しかと心得ている。

　腕が砕けるほどの苦痛に耐えてテイルブルーのイラストを描き続けた先に、〝次は漫画を描け。そのかわりテイルレッドでよい〟と優しく言われれば、むしろそれはご褒ほう美びではないか。

　今日は奇くしくもそのテイルブルー・津つ辺べ愛あい香かの誕生日、八月八日。

　そして、コミックマーケットを目前に控え、デス・ウィークとさえ呼ばれる、創作者たちの死闘の一週の最さ中なかである。どんなに割増し料金になっても、このあたりまでに原稿を印刷所に入稿しないともうアウトＤＥＡＴＨデスよ、のデスだ。

「皆の者、よくここまで耐えた」

　己の右腕たるスタッグギルディと共に並び、ビートルギルディが一皮向けた部下たちを頼もしげに見つめながら、労ねぎらいの言葉をかける。

　自らの厳いかつい一本角以上に厳しき面も部下に対しては見せる彼ではあるが、今日ばかりはその目の鋭さはなりをひそめ、優しさに包まれていた。

〝数名ずつに分かれて班はんを作り、40Ｐページ・Ｂ５サイズの同人誌を作り上げよ〟

　部下たちがビートルギルディにこう命じられたのは、実に八月の一日。何とかテイルブルーのイラストに慣れた頃ころ合あいのこと。

　それから締め切りである今日まで、まさに息つく暇ひまもない過酷な日々だった。

　そして今、ようやく全班の分の原稿が完成を迎えたのだ。
「無事、原稿のデータは入稿を終えた。後はイベントを待つばかりだ」
「完成品は会場に直接搬入されるから、出来上がりは見てのお楽しみだね」
　ビートルギルディ、それに続いてスタッグギルディが作業の完了を宣言する。
　ホールのデスクに着席する面々は今度こそ安(あんど)の表情を浮かべ、各(おの)々(おの)、隣に座る同志たちと固い握手を交わし始めた。
　ビートルギルディは机の上に置かれた厚い本をホール中に見えるよう持ち上げ、言った。
「当日会場に直接足を運ぶのは選抜された二名だが、無論、我々は皆が参加者だ。今日はイベントに向け、皆でイベントカタログのチェックを行おうと思う」
　すでに彼らの座る机には、同じ分厚い冊子が人数分配られている。
　冊子についての補足が、スタッグギルディの口からなされた。
「今は電子カタログも普及しているけれど、僕たち美の四心(ビー・テイフル・ハート)以外、ここに元いた部隊のみんなはイベントが初めてだと聞いたから、冊子版にしたんだ。その方が思い出に残ると思って」
　少年のような甘い照れ笑いを浮かべるスタッグギルディ。
　上官の心遣いが胸に染み渡る。口々に礼を述べ、戦士たちはカタログをめくってゆく。
「おお、これは⁉」
　程なく驚きの声が上がり、それは連鎖していった。
　同人イベントのカタログは、場所(アクセス)、タイムスケジュール、注意書き……様々な要項が記載されているが、当日に参加するサークルがそれぞれ描いた一枚のカット絵の掲載が、ページの多くを占める。
　そのカットは、自分が出す予定の本のキャラクターなどであることが

多い。
　そしてその時の流行や普遍の人気を誇るアニメやゲーム、漫画などが一作で一大勢力を築き、何ページにもわたって掲載されるのも珍しくはない。同じ作品、ジャンルは固まって配置されるため、掲載されるページも当然連続するからだ。
　だがしかし……今回のイベントでは、かつてない激変が起こっていた。
　数十ページにわたり、テイルレッドの絵が連なっていたのだ。サークル数に直せば、実に四桁けたにも届く。
　これは異常事態とすら言える。
　テイルレッドは漫画やアニメやゲームのキャラクターではない。浮き世離れしたスーツとプロテクターに身を包んでいるとはいえ、この世界に存在する生身の人間だ。
　それが最大ジャンルにまで膨ふくれ上がっているのだから、前代未聞の出来事だろう。
　しかも、ツインテイルズがこの世界に現れたのは、とっくに参加申し込みが終わり、申込時のサークルカット・その他の登録情報をネット上で何とか変更が可能な、ギリギリの時期だ。
　まさに、電撃的な勢いでの人気の拡散だったことが伺える。
「いやはや、愛にあふれた絵ばかりではないか」
「うむ、一枚の絵を通して、魂が伝わってくるようだ」
　開いても開いても、めくってもめくってもテイルレッドの絵が続く。アニメチックにデフォルメされ、可愛かわいさを全面に押し出したものが大半だが、劇画調のものまである。
　多種多彩なテイルレッドの一覧が、彼らに勇気を与えてくれる。
　一同はほんわかしながらカタログチェックをしていたが、彼らの一体が恐るべきカットを発見したことで、場の空気は一気に引き締まった。

「こ、これをご覧ください！　この、数十ページにわたりテイルレッドで埋め尽くされたページの中、たった一サークルのみ、テイルブルーを描いた剛の者が!!」
　次々とそれを発見し、驚きょう愕がくの表情へと変わっていく。
「しかも、またタッチが渋い！　あの魔獣テイルブルーを、ここまでいぶし銀に!!」
　画調はどちらかといえばアメコミ風で、意外にテイルブルーの雰囲気にマッチしている。
「ましてや、カットの中に『テイルブルー大好き』という添え書きまで！　ただ者ではございませぬぞ!?」
　だがビートルギルディは腕組みをしたまま、いささかの狼ろう狽ばいも見せない。
「落ち着けい。疾とく、彼かの者のサークルページを確認するのだ」
　サークルカットの中に小さく、サークルのホームページアドレスが記載されている。
「うう、これは！」
　ビートルギルディの命令に従いそのサイトを確認したエレメリアンの表情は、さらなる驚愕に彩られた。
「やはりな。そこにテイルブルーはおるまい？」
　当たり前のようにそれを予期していたのだろう、ビートルギルディは嘆息した。
　サイトのトップページには、「新刊」と銘打たれ、同人誌の表紙と思われるイラストが掲載されている。
　だがそれは、カタログのサークルカットで大好きとアピールしたブルーではなく、さわやかな笑顔でこちらを見据えるテイルレッドのイラストだ。いずれにしろアメコミ調だが。
「サークルカットでテイルブルーを好きだとアピールされれば、如何な

る兵(つわもの)かと見定めたくなるは人の性(さが)。しかして蓋(ふた)を開けてみれば、そこにはテイルレッドの新刊よ！　あなどりがたき策略。お前たちはまんまと一本取られたというわけだ！」

　ビートルギルディの見事で的確な推察に、一同は言葉もない。

　その通りだ。もはや右を見ても左を見てもテイルレッドのこの状況。四辺数センチのカットイラストだけで描き手の個性をアピールするには、限界がある。

　そこで、意を決してテイルブルーを描くのだ。

　整然と咲き並ぶ可憐(かれん)な白(しら)百(ゆ)合(り)に交じって毒(どく)茸(きのこ)が生えていたら、二度見をしてしまうのは当然だ。こいつ正気か、とサークルページにまで行って確認してしまうのも、ごく自然な流れだ。

　結局テイルレッドの本を出します、という告知がそこにあるとはいえ、間違いなく印象には残るというわけだ。もちろん、カットに描いたキャラクターを題材にした本を絶対に出さなければいけない、という縛りもないのだし。

　一応、カット掲載時には本当にテイルブルーが好きで、ニュースでの悪行を見るに耐えかね、テイルレッドへと趣旨替えした可能性も多分にあるのだが……。

「くっ……面目次第もございませぬ!!」

「よいか、この数日の修行で学んだことを忘れるな。容易(たやす)く心を乱してはならぬぞ」

　全くその通りだ。何のために、苛(か)烈(れつ)な修行に耐えてきたのか。

　可愛(かわい)いテイルレッドの本を出すためか。

　……まあ結果的にそれも多大すぎるモチベーションとはなったが、本来の目的は、テイルブルーに勝つためだ。

「ではこれより、コミケ参加のための心得を伝授する!!」

　ビートルギルディの号令の元、一同は襟(えり)を正し、気を引き締める。

……テイルブルーに勝つために修行をしていたはずが……コミケに参加することになっている自分たちの今の状況に、一片の疑問も差し挟むことはなかった。

コミケに出征する戦士の発表も終わり、基地ホール内は活気にあふれていた。

美の四心(ビー・ティフル・ハート)と残存兵の混成軍はすっかり打ち解け、談笑している。修行をしかと成し遂げ、こうして結束も深まった。ビートルギルディの計らいは、大いに成功と言えるだろう。

老参謀・スパロウギルディは安心したようにホールを後にした。

廊下では、そんな喧(けん)騒(そう)から距離を取るように……一人修行に励む若き戦士・スワンギルディが、壁に背をもたれて自分の携帯電話を見ていた。

「……どうした、ダークグラスパー様のメールによって、しばらくは携帯電話など見たくはないと言っていたお前が」

「スパロウギルディ様……。いえ、そのダークグラスパー様ですが……任務に旅立たれて随分と時間が経(た)つというのに、あれから一度もメールがなく……」

一時期は、廊下を一歩歩くごとにメールが一通着信するという電脳ホラーの只(ただ)中(なか)にその身を置かれたスワンギルディ。しかし、あれだけ恐怖したダークグラスパーからのメールも、来なくなると寂しいようだ。

「私も未(いま)だ何の連絡も受けておらぬ。おそらくはビートルギルディ様もな。あのダークグラスパー様が、戦いで後れを取るとは思えぬが……」

スパロウギルディは髭(ひげ)型の顎(あご)のパーツを撫(な)でながら、スワンギルディと視線を合わせた。

　不ふそんでわがままだが、不器用なだけで部下思いなところもある司令官。
　いつしかスワンギルディは、彼女をそんな風に評せるほど関わっていたのだ。
「一体、あの方は今、どこで何をされておられるのでしょう……」
　着信なき携帯電話を手に、スワンギルディは不安を吐露した。

◇

　焼け熔とけた大地、轟ごう猛もうと立ち込める黒煙。
　隙すき間まがないほど地に刻まれた無数のクレーターが、どれだけ途方も無い攻防が繰り広げられたかを物語っている。まさしく、長きに及んだ絶望的な戦いの代弁者だった。
　地面に膝ひざをつき、息を荒らげるダークグラスパー。その傍かたわらには、エネルギー残量が底を尽き、待機状態セーブモードにまでパワーダウンしてしまったメガ・ネ。
「おのれ、忌いま々いましい……不死身の次は幽霊にでも成り果てたか!!」
　彼女たちの眼前では、ポニーテールの少女が腕組みをし不敵に笑っている。
　ダークグラスパーは、彼女のポニーテールから全身にいたるまでを、あらためて双そう眸ぼうに収めた。戦っていた時間は一時間や二時間どころではない。時間感覚が薄れ始めるほどの長きにわたり全力をぶつけ続けたのに、傷どころか煤すすや泥の一つさえ、その身体からだにはついていない。
　まさに暖の簾れんに腕押し、幽霊を相手にしているかのような徒労感に苛さいなまれていた。
「言っただろう？　俺様はポニーテールだ。悪のアルティメギルを討つ

ために戦う、正義のポニーテールだ！　あんたがアルティメギルである以上、負けるわけにはいかねえからな!!」
　人間に化ける能力を持つエレメリアンなら何体か、ダークグラスパーは知っている。しかしそれは総じて、仮かり初そめであり付け焼き刃、あくまで「化けた」だけの贋がん作さくだ。
　上位のエレメリアンになるほど、そんな見せかけだけの力を厭いとい、極めようとはしない。
　だがフェニックスギルディが変身したこの少女には、紛まがいの歪いびつさが一切感じられない。
　一時の場凌しのぎではなく、ここを最終目標と明確に思い、錬磨し、到達した本物の美しさが、テイルギアやグラスギアといった強化武装無しに、これだけの力を持つ要因なのだろう。
「……ポニーテール……極めし者は、これ程のものだというのか……!!」
　アルティメギル首領さえもが持て余した、最強の反逆者。
　その真価を、今さらながらにダークグラスパーは痛いほど感じ取っていた。
　そんな喪失しかけた自信につけこむように、フェニックスギルディは不ふ遜そんに語りかける。
「さすがにそろそろ、俺様には勝てねえと思い知っただろ？」
　そう言われて素直に認められるはずもなく、ダークグラスパーは吐き捨てるように言った。
「勝てぬのではない、貴様のその破は廉れん恥ちな格好が気に障さわるのじゃ！　神聖なる戦いの場で裸同然の格好とは、乙女の風上にも置けぬ奴やっ！　少しは恥じらいを知れ!!」
「くっ……あ、あかん！　よけるんやイースナちゃん！　今あんたがブン投げたブーメラン、すぐにも戻ってくるで!!」

　弱った身体からだに鞭むち打うったおかんの忠告ツッコミが、虚むなしく響く。
「裸かあ……一応、オシャレな格好したつもりなんだけどなあ。ま、確かにスケスケだもんな。やっぱ上に纏うきるもんは欲しいぜ」
「……オシャレじゃと!?　しかも……恥じらいがあるのか!?　エレメリアンの貴様が!?」
　フェニックスギルディは自分の腕を胸の前に持ってきて、しげしげと見つめた。
「この最終闘体に到達した時から、もう俺様は女そのものだ。その事実は、変身を解除してエレメリアンの姿に戻っても変わらねえ。そこに戸惑いはねえし、誇りも持っているつもりだ。恥じらいだって、自然に芽生えたさ」
　殊勝に認め、目ざとくフェニックスギルディが視線を移したのは、先ほど酷評したダークグラスパーのグラスギアだった。
「ダークグラスパーさんよ。あんた、その鎧よろいは憧あこがれの人の技術の模倣パクりだって言ったな」
「パクりではない！　リスペクトじゃ!!」
　さらに視線を移し、隣に立つメガ・ネプチューンをもしっかりと見つめる。
「あんたと長々と戦い続けて、俺様もちょっと思い出したことがあるんだ。もっとも、戦っていたのがグラスギアのあんたじゃなく、オリジナル──テイルギアをまとったテイルレッドだったら、もっと早くに気づいただろうけどよ」
「何？」
「多分、あんた……いや、ツインテイルズの鎧には俺様も覚えがある。なんとなーく見えてきたぜ。アルティメギルの猛も者さどもに連戦連勝を続ける、小さな巨人の強さの秘密がな！」
　思わせぶりな表情で、大きく頷うなずいてみせるフェニックスギル

ディ。
「俺様はもう一度テイルレッドに会う！　あいつとは、もっとちゃんと語らいてえからな!!」
　ダークグラスパーは心底戦おののいた。フェニックスギルディは、ただ強いだけではない。力を超えた異質な何かを持ち、それが彼女の本能に危機を訴えかけてくる。
「それはわらわが先約じゃ！　貴様を葬り去り、テイルレッドの正体を確かめに行く!!」
　ダークグラスパーは自慢の大おお鎌がま・ダークネスグレイブを構え、衰えぬ戦意を誇示した。
「戦いは諦あきらめねえってわけか……！　だったら、そろそろ俺様からもいかせてもらうぜ!!」
　言われて初めて、ダークグラスパーは気づいた。フェニックスギルディの言葉を借りれば第三ラウンドになるこの戦い━━始まってから、攻撃をしかけていたのは自分たちだけ。
　フェニックスギルディは、ただ飄ひょう々ひょうと攻撃を受け流していただけだったことに。
　そんな当然のことを今さらに自覚するほど、戦いの規模が凄すさまじかったのだ。
　大おお仰ぎょうに首を鳴らし、軽く屈伸を始めるフェニックスギルディ。
　三度目の曲げ伸ばしの最中、虚を突くように突如として天高く跳躍した。
「バーニングゥゥゥゥ！　フェニックスキィ━━━━━━━━━━━━ック!!」
　フェニックスグルディの身体からだを中心に、蓮れん華げのように美しい放射状の炎が咲く。
　貴の三葉ノー・ブル・クラブの兵士との戦いで見せたフェニックスキックよりもさらに巨大な炎を纏まとった蹴撃が、ダークグラスパーに襲いかかる。

「のわあああああ馬鹿（ばか）か貴様、その格好で飛び蹴りはあああああああああああああああ!!」
　怪物の姿で蹴りを放つのとは、わけが違う。
　彼女は、人間そのものの裸に、炎製の短く薄いワンピース型のドレスをまとっただけだ。
　今の今までは、舞い踊るポニーテールがもたらす健康的な美に守られてきていたが──ついに、限界を迎えてしまった。ショーツも穿（は）かぬ無防備で煽（あお）りの構図となる飛び蹴りを放てば、その先に待つのは避けえぬ公然猥褻（わいせつ）だ。
「くうっ！」
　ダークグラスパーはたまらず、視界を遮（さえぎ）るようにダークネスグレイブを眼前にかざす。
　刃（やいば）の腹を盾（たて）にし、痴女（ちじょ）とは思えぬ凛々（りり）しき表情で迫るフェニックスギルディの蹴撃を受け止めた。直撃点から二人を中心にして放射状に炎が迸（ほとばし）り、行き場を失った威力が荒れ狂う。
「ぬおりゃああああああっ！」
「ぐうああああああ、何という力かっ!?」
　胸の前で構えた握り拳（こぶし）、くの字に折り曲げ添えた左足に、ピンと伸ばした右足。芸術的な勇美を誇る蹴撃は、激突の激しい衝撃の中いかばかりも崩れず、なおも力を増していく。
　刃の腹に赤橙（せきとう）色の穴が穿（うが）たれ、広がっていく。
　ブラインドの役目もしていたダークネスグレイブが徐々に溶解し、一歩も動けぬ己の眼前にじわじわとフェニックスギルディの股間（こかん）が開帳されていく恐怖。
「ぎゃ――――モロじゃ――――――――っ!!」
　コンマ一秒の隙（すき）が生死を分けるこの最強レベルの戦いでは、相手の股間からすら目を逸（そ）らすことは許されない。

　そうわかってはいてもはい上がる恐怖に抗あらがえず、目を逸らしてしまったダークグラスパー。

　覚悟の差が、勝負の明暗を分けた。

「うおらあああああああ!!」

　フェニックスギルディはその隙すきを逃さず全身を強こわ張ばらせ、咆ほう哮こうと共に一気に蹴り抜く。

「うわ――――――――――――っ!!」

　ついにダークネスグレイブは刃やいばから柄つかまで一気に赤熱して弾け飛び、その衝撃でダークグラスパーも大きく吹き飛ばされた。

「イースナちゃん!!」

　メガ・ネの眼前で、為す術すべも無く地面を転がっていく。ようやく止まった頃ころには俯うつぶせで息を荒らげ、憎々しげに地面を指で抉えぐって握り締める。

「く、くそう……！　たった一発のキックが、恐るべき威力じゃ……!!」

「諦あきらめな。今のあんたじゃ、俺様には絶対に勝てねえ。女同士で裸に戸惑って隙を見せるあんたは、戦士としちゃあ二流だぜ!!」

　地をはい、見上げる者と、堂々と大地を踏みしめ、見下ろす者。

　彼ひ我がの勝敗は誰だれの目にも明らかだった。しかし――

「わらわが二流じゃと……？　言うたな、焼き鳥女め!!」

　闇やみの処刑人は敗北を受け入れず、甘えを捨てた壮烈な輝きを眼め鏡がねに宿して立ち上がった。

「……メガ・ネ！　三点セットじゃ!!」

　言われてすぐに意図を察し、腰の収納箱を展開するメガ・ネ。

　ぽいぽいと用途不明なネプネプシークレットアイテムの数々を収納箱から取り出してはブン投げていくが、目当ての物は見つからないようだった。

「ＱＲコードのシールも宅配伝票もないで!?　同じようなので今あるのは……ゲームソフトのケースの中に入ってる、ポイントのシリアルコード用紙だけや……!!」
「十分じゃ、貸せい!!」
　ポイントを集めてオリジナルグッズをもらおう、という文面と、半角英数字のシリアルコードが記載された、手の平サイズの用紙。
　己の肉体を守るにはあまりにも頼りないその小さな紙を三枚受け取ると、ダークグラスパーは気合い一閃（いっせん）、グラスギアを天に地にと一斉に弾き飛ばした。
「言っておくが、わらわは男には無闇に肌は見せぬ。これは、お前が自身を女であると断言したからこその脱衣じゃ!!　わらわも、覚悟を決めねばなるまい!!」
「律儀な姉ちゃんだ、別にエレメリアンが女の肌なんか見たって、どうにも思わねえだろうに。ま、そういう姿勢は見習うべきなんだろうな……女ならよ!!」
　そして威風堂々と現れた未成熟な裸身に、受け取った三枚の紙片を貼（は）り付けた。
「こやつに一切の小細工は通じぬ！　一撃に全力を託すには、鎧（よろい）など甘えにしかならぬ！」
「何でアンダースーツまで脱ぐんや!?」
　ダークグラスパー自ら投げ放った言葉のブーメランが、ここぞとばかりに舞い戻ってきた。
　メガ・ネの目には、彼女の後頭部に深々と刺さった巨大なブーメランが幻視されている。
　知的生命としての尊厳だけを僅（わず）かに秘匿し、全ての防御機構を取り払った背水の形態。
　男性型のエレメリアン相手ではなく、女対女であるからこその完全覚

悟だ。

「だが、武器を失ったあんたに何ができる!?　気合いだけじゃ、俺様は倒せねえぜ!!」

「たわけ、武器を失おうと、鎧を失おうと！　わらわには、この眼鏡（めがね）がある！　わらわの愛する眼鏡がな!!」

「ほおう……見事な心意気だ、ダークグラスパーさんよ。二流と言ったのは取り消すぜ！　なら、俺様も……!!」

　フェニックスギルディは僅かにまとっていた炎のドレスを胸当てと腰蓑（こしみの）に分割し、限界まで凝縮。これまた秘部を隠せるギリギリのサイズに成形した。

「これで、ポニーテールと眼鏡！　自分の信じるものでサシの勝負ってわけだ!!」

「なんでこの子ら普通に戦ってくれへんのやあああああああああああああああ!!」

　おかんの常識的な願いは、虚（むな）しく天に吸い込まれていく。

　対するダークグラスパーの乙女を防護（まも）っているのは、粘着力のない紙片のみ。張り付いているのはひとえに、激闘の末に全身を覆った珠（たま）の汗のおかげだ。

　それが乾いてしまえば、三枚の紙は為す術（すべ）無く地に堕（お）ちることだろう。

　つまり、待ちに徹することも許されない。正真正銘、乾坤一擲（けんこんいってき）の闘法なのだ。

　それを察したのか、受けて立つとばかり、フェニックスギルディは不敵な笑みを浮かべた。

「ようし、いくぜい！」

「おおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

　半裸、いやほぼ全裸の女が二人、地面から土砂を噴き上がらせながら

猛烈な勢いで疾走する。崩壊した大地だけでは飽き足らず、自らの痴(ち)態(たい)を以(もっ)て、真の地獄絵図を完成させたのだ。

　白滅し、同心円状に集束していく閃(せん)光(こう)の中、二人は互いの右拳(こぶし)を振り上げた。

　そして、その場の全てが真っ白に塗り込められてゆく。

「イ、イースナちゃ――――――ん!!」

　三枚の紙片が、晩秋の木の葉のように力無く舞い上がる。

　自らもその光に呑(の)み込まれながら、メガ・ネの悲痛な叫びだけが、周囲にこだました―。

キャラクター名鑑
023

????

フェニックスギルディ
人間体

????
???????



DATA

身長：159㎝

体重：50㎏

B84・W57・H81

フェニックスギルディが進化した姿。人間そのものだが、武装なしにダークグラスパーとメガ・ネを圧倒する規格外の強さを誇る。反面、この最終闘体に到達した時から性質や感覚も人間の女性そのものになってしまう。お洒落を意識しながら羞恥心が欠如しているなど、人間に「なってしまった」ゆえのアンバランスさを持ち得る危うい状態と言える。この姿の時のみの名を持っているようだが、それにはある由来があるらしい。

第二章　あつく、うすい本とツインテール。

　二つの海が見える。
　埋立地の奥に佇たたずむ雄大な海と、その前に突如として現れている、人の海が。
　目的地にほど近い、人ひと気けの無い場所を選んでゲートで転送された俺たちは、ものの数分歩いただけで目の前に出現した圧巻の光景に、言葉を失った。
「な、何だこの人の山は……まだ朝八時前だぞ!?」
　もはや、人ひと集だかりというレベルではない。何百、何千……いや、それ以上かもしれない。
　少なくともこうして立ち止まって目視できるだけで、マンモス校である陽よう月げつの全校生徒数よりも多い。延々と続く人の列は、建物で隠れている先にもさらに続いているのだろう。
　快晴も快晴。雲一つない青空に、平和の象徴であるお日様も絶好調のようだ。
　しかし、俺たちは観光に来たわけではない。
　その平和を乱す悪の襲来を予測し、ツインテール部の活動でここにやってきたのだ。
　日本で最大だという、夏の同人誌イベント会場に。
「トゥアール。本当にここにエレメリアンが現れるのか？」
　信じられないというよりも、できるなら信じたくない俺は、トゥアールに尋ねる。
「ええ。間違いありません！」
　自信満々に頷うなずくトゥアール。……やはり、平和な日々は長くは続かなかったのか。
　ちょうど駅のそばまで歩いてきたが、その駅の出口からどんどん人が

あふれ出てきて、遠目に見ていた人の山に補充されていく。
　これだけの人数だ。建物が密集したこの一帯では、戦いに巻き込んでしまうだろう。エレメリアンが現れた瞬間、どうにかして場所を変えないと。
　海の近くだし、海上で飛びながら戦うのはどうだろうか。
　俺が思案していると、愛あい香かがトゥアールを横から覗のぞき込み、問い詰めた。
「……何で今日に限って、出現を予測できたの？」
「私の世界でも、このイベントに相当する同人誌イベントでエレメリアンが現れましたから」
　さらに愛香は問い質ただす。
「じゃああんた、その荷物は何？」
「私たちは、サークル参加して会場内で待機するんです。敵を現地で迎撃できるわけですね」
　トゥアールは大きなトートバッグを持ち上げて言う。ちなみにさっき、人目がないうちに白衣のポケットからにゅるんと取り出したものだ。
「サークル参加？　俺、戦い以外に何かするのか？」
「いえいえ、ただのカモフラージュです。合同スペースですので、代表者が二人必要だったんです。総そう二じ様は私の隣で座っていてくだされば大丈夫です。長机の下でもぞもぞ私の手が動くかもしれませんが、気にしないでください」
　愛香が、トゥアールの荷物から折り畳みのキャリーを引ったくって組み立てると、トゥアール自身を乗せて備え付けのゴム紐ひもで固定した。
「そーじ、あたしちょっと荷物片付けてくるわ」
「ぎゃあああああやめてくださいお荷物は愛香さんでしょう段ボール箱の底みたいな胸して!!」

　慧理那が縛られたトゥアールをじーっと見て、何故か物欲しそうに俺に視線を向けてくる。
　俺は咳払いをしながら、荷物の中からイベントカタログを手に取った。
　この大型同人誌イベントは……コミックマーケット。略してコミケと言うらしい。
　俺自身は前知識があったわけじゃないけど、終業式にクラスメイトたちが見ていたテイルレッド関係のイベントを特集した増刊雑誌に、コミケも大々的に掲載されていたのだ。
「……それにしても……何よ、この露骨なテイルレッド推しは！」
　どんな風にテイルレッドが関わっているかは……今愛香が叫んだように、このやたらと分厚いカタログを見てのとおりだ。
「元が実物の人間だから、絵柄も様々だなあ」
　感心する俺を余所に、愛香がカタログの数十ページ分を指で摘み、範囲を示す。
「……こっから……ここまでよ！　みんなテイルレッドじゃない、ブルーがいないわ！」
「イエローもありませんわ……」
　慧理那もカタログを覗き込み、しょんぼりする。
「テイルレッドの本は片っ端から買いますよ！　世間の人たちのテイルレッドに懐いているリビドーを研究するチャンスです!!」
　トゥアールがタブレットを取り出し、電子版のカタログをタッチで操作していく。
　しぶとくカタログをチェックしていた愛香が、何かに気づいて俺の肩を叩く。
「そーじ、ほらほら！　あった！　ブルーの絵!!」
「お、ほんとだ」

　モノクロ画像でやや判別しづらいが、凜り々りしい目つきにギアの形状、そしてツインテールの形。テイルブルーに間違いない。アメコミチックでかっこいいな。
「しかも『テイルブルー大好き』って書いてるじゃないか」
　段ボールの底と形容された部位を、得意げにそびやかす愛香。
「やっぱテイルブルーにもファンはいるのよね～。ううん、流されやすそうなテイルレッドのファンと違って、世間で嫌われてるブルーを支持するってことは、きっとミーハーじゃない根っからのファンに間違いないわ！」
　慧理那もそれを聞いて必死にイエローを捜したようだが、結局見つからなかったようだ。輪をかけてしょんぼりしている。
「で、どうするんですか愛香さん？　さっきまで参加を渋ってましたけど」
　入場口の近くまで歩いてきたところで、トゥアールが意地悪っぽく愛香に聞く。
　しかし、愛香はやけにさっぱりとした表情で、首を振った。
「いいわ、あたしも行く。この人の一冊を買うだけでも、参加する価値はあるわ」
　よほど、『たった一人のファン』の存在が嬉うれしかったようだ。
「ほほお愛香さんにしてはいいこというじゃないですか！　そんな動機もイベント参加の醍だい醐ご味みですよ！　『自分だけの一冊』を見つけるのは、とても大事です」
「あんたこそいいこと言うわね。自分だけの一冊、か……。楽しみ！」
　珍しく和わ気き藹あい々あいとしている二人に笑みがこぼれ、俺はあらためてテイルブルーの描かれたサークルカットを見直した。
「もしかしたら、ツインテールが本当に大好きな人なのかもな」
　最近ではテイルブルーは、子供向けの絵本でライオンよりも強い百獣

の王として描かれるほど、偏かたよった認識をされている。
　だが、暴れん坊という部分にだけ注目せず、色いろ眼め鏡がねを抜きにして見れば、素晴らしいツインテールの持ち主であることは明白だ。
　つまりテイルブルーの熱心なファンとは、暴力の恐怖に屈さずツインテールを愛する、聖者のように高潔な魂の持ち主ではないか。俺は想像に胸ときめかせた。
「是非会って、話を聞いてみたいな。俺もこの本を売っている場所に行ってみるよ」
「うん、行こ行こ！」
　サークルカットにアドレスも掲載されているな。どんな本作ってるんだろう。
　当日ならもう、サイトに絵も載せてるかな？　トゥアルフォンで検索して、見てみよう。

◇

「うわ、すごい熱気。今の時間に入場してるこの大勢の人たちは、みんなサークル参加して、本とか出すんでしょ？　想像もできないわ」
「……うん」
　俺は吐息のようなか細さで頷うなずく。
　足取りも声こわ音ねも軽い愛あい香かと違い、俺は鉄下駄でも履いたかのように一歩一歩が重い。
「まああたしは、テイルブルーの本だけ買えたらそれで充分かな！」
　あればな……会場に……。
　愛香が楽しみにしているサークルのホームページを検索した俺は、見てはいけないものを見てしまった。
　何な故ぜ俺はいつも、いらぬ細かいことに気づいて、深入りして、自爆

するんだろう。
　事前に調べたりしなければ、俺もこのサークルさんの場所に足を運ぶまでは初めてのイベントへの期待やわくわくで、胸を一杯にしていられたのに……。
「合同サークルですから二スペース分、六人までサークル入場できます。皆さん、このチケットを入り口で渡してくださいね」
　トゥアールが封筒から取り出した厚紙をミシン目に沿って切り取り、皆に手渡していく。
「総そう二じ様にはこちらを」
「ああ」
　胸の谷間からすでに切り離された一枚のチケットを取り出し、手渡される。
「……リアクションが薄い……そ、総二様が！　私のおっぱいに慣れてしまっている……!!」
「え!?」
　確かに、何の抵抗もなく受け取ってしまった。
「ツインテール以外でも、俺は進化しているのか!?」
　これが、生物の環境適応か……。
「自慢のおっぱいも飽きられちゃあねえ？　美人は三日で飽きるって言うけど、大きすぎるおっぱいも同じってことよ」
　愛あい香かがねちねちとトゥアールを睨ねめつける。立場が入れ替わっているだけでものすごくいつも通りの会話だ。
　自分のファンがいるとわかってから、愛香はもう怖いものはないって感じだな。
「あ、愛香さんにおっぱいのことで馬ば鹿かにされるなんて！　あってはならないことです！　宇宙が爆発しても起こってはならない事件です!!」

「今この瞬間に、新たな宇宙の開かい闢びゃくが始まるのよ！　諦あきらめなさいこの飽きやすっぱい!!」

「飽きる以前に興味すら持たれなっぱいがよくも言いましたね!!」

　おっぱいでビッグバンすらも起こそうとする女の子の争いに恐怖しながら、俺は慧え理り那なや桜さくら川がわ先生とカタログの会場案内に目を通していた。

「東、ということは、こっちだな」

　やっぱりこういう時は先導したがる桜川先生の後に続き、会場内を進んでいく。

　入り組んだ通路を抜け、エスカレーターを降り、吹き抜けのフロアに到着した。

　左右に巨大なホールが設置されている。ここが、トゥアールの申し込んだスペースのある場所らしい。

「これは……壮観だな……」

　長机が横に数個繋つなげて並べられ、それが背中合わせでもう一対。それを長机二個分の縦辺で繋いだ長方形が一つのブロックとなり、さらにそれが通路分の幅を置いて、この短距離走トラックがすっぽり入りそうな大きさのホールに、びっしりと等間隔で配置されている。

　そこではすでに到着し席に着いた人たちが、忙せわしなく荷物を広げ、準備をしていた。

「ところでサークル参加ってトゥアール、あんた何か作ってきたわけ？」

　愛香の言うとおり、俺たち何も持ってきていないんだよな。

「業者でプレスせず手作りですが……ツインテイルズの応援歌と称して、オリジナルの楽曲を作りました。それを頒布物にするつもりです」

「応援歌!?　テーマ曲ですの!?　是非聞いてみたいですわ!!」

　慧理那が目を輝かせる。

「ふふふ、あとで皆さんにも差し上げますので、聴いてみてくださいね」

　何だろう、応援歌というくらいだから応援される立場の俺たちは喜ぶべきはずなのだが、嫌な予感がまとわりついて離れない。

　スペースに到着した俺たちは、トゥアールの指示で机をディスプレイし、準備していく。

　先導していたはずの桜川先生の姿が見えない。そう思った矢先、通路を挟んだ向かいのスペースで桜川先生を指差している女性がいた。

「この人です！　サークルスペースに配るペーパーに、婚こん姻いん届とどけを混ぜ込んでました!!」

　到着して真っ先に片付けた、机の上に置かれていたチラシ類を手に取り、確認する。

　……確かに、婚こん姻いん届とどけが紛れ込んでいた。

「イタズラは困ります！　事前登録のない、イベントと関係ないチラシの配布は禁止です!!」

〝イベントスタッフ〟の腕章をつけた女性が駆けつけ、桜さくら川がわ先生を注意していた。

「いやイタズラじゃない！　ちゃんと婚姻届に『私と結婚したら同人誌印刷料金99％ＯＦＦクーポン』をホチキスで止めて配っていたんだぞ!!」

　抗弁虚むなしく桜川先生は、捕獲された宇宙人のようにイベントスタッフの女性二人がかりで両サイドを挟まれ、連行されていった。

　いつでもどこでもプチ不祥事を巻き起こすな、あの先生は……。

　テーブルクロスを敷き、ディスプレイスタンドを用意。見本として、トゥアールの作ったＣＤを立てかける。

「これが手作り⁉　充分手が込んでるじゃないか⁉」
　キャラメルフィルムで個装されているし、開封して中を見てみると、フルカラー印刷のレーベル面に、データ面はプリズム。むしろ市販品と何が違うのかの判別がつかない。
　会場内待機のための頒はん布ぷ品に、よくここまで手間をかけたもんだ。さすがはトゥアール。
　可愛かわいい丸文字で「五〇〇円」と書かれた値札を前に置き、ミニポスターを後ろに設置して、トゥアールのスペースの準備は終わった。開場まで、あと一時間もある。
「さて、この場に残るのは私と総そう二じ様の二人だけで大丈夫です。愛あい香かさんと慧え理り那なさん、尊みことさんは、開場後は連絡があるまで会場内で見物やお買い物を楽しんでください」
「あんたとそーじを二人っきりになんてしておけるわけないでしょ！　エレメリアンよりあんたの方が危険なのよ‼」
「世間一般の認識を盾たてに、そっくりそのまま返しますよＡ級蛮族‼」
「暴れるなって、周りに迷惑がかかる！　というか愛香もトゥアールも、この暑さでよくそんな元気に口くち喧げん嘩かできるな……」
　二人は俺の制止を素直に受け入れた。
　背中合わせでの前後のスペースの間隔は、荷物や頒布物の段ボール箱で埋まってしまって、とても賑やかに動き回るゆとりはない。
　ここで愛香が暴れれば、周囲に与える被害は甚大なものになるだろう。
「仕方ないですね。それじゃあ、一時間交代ぐらいで会場を回りましょう」
　トゥアールはてきぱきとスケジュールを考え、時間ごとの分担を決めた。
　組み合わせは、最初が俺と慧理那、桜川先生。次に俺と愛香。その次

が俺とトゥアール。
　それぞれ一時間交替で会場を回り、残ったメンバーがスペースに残るということだ。
　もちろん、エレメリアンに備えての待機が一番の目的なので、連絡は密に取り合うようにしなければな。

　　　◇

「それにしても……喜んでいいのか、複雑だな」
　そこかしこに、四方八方に、およそ視界の全てに、テイルレッドのイラストが見える。
　様々なサイズのポスターが机と椅子の後ろにスタンドで設置され、のぼりのようだ。
　いや、店先に立てるのぼりというよりは、武将が己が家紋を誇示するための軍旗だ。
　今から天下分け目の戦が始まらんばかりの緊迫感が漂っている。
　ツインテールでいっぱいなのは嬉しいが、タッチに個人差があるだけで全部俺だしな……。
「慧理那は、見に行く場所は決まってるのか？」
「わたくし、この『その他』のスペースの『特撮』を扱っているサークルさんを見に行きたいですわ」
「なるほど。そこに向かってるのか」
　実写の人間をイラストに起こして本にしているという意味じゃ、テイルレッドと同じだな。
　カタログを確認すると、どちらかというと少女漫画チックというか、女性が描いたようなタッチのイラストが多く見受けられる。
　特撮を扱ったサークルは、大通路を挟んで反対側のホールに集中して

いるようだ。
　人ごみに押し流されないよう、桜さくら川がわ先生と一緒に慧理那をかばいながら歩いて行く。
　もじもじしながら無言で隣を歩いていた慧理那が、俺に向き直って微笑ほほえんだ。
「あ、あの、観み束つか君、二人でお買い物って、初めてですわね……」
「お嬢様、私もいますが」
　自分を指差し存在をアピールする桜川先生。どちらにしろ、この三人で買い物は珍しいな。
　ふと俺は、強いツインテールの気配を感じ、前方に視線を移した。
　つられて前を向いた慧理那が、驚きの声を上げる。
「あら……!?」
　早足でそのスペースに向かう慧理那を、俺と桜川先生も慌てて追いかける。
「もしや……あなたは！」
　感激したように両手を胸の前で組む慧理那。
「はい、どうぞ見てってくだ……」
　声をかけられたサークル主は、条件反射のようにそう言って顔を上げたが……
「ごえええええええええええええええええ神しん堂どうさんンンンンンン!!」
　慧理那と目が合うや否や、びっくりして椅い子すごと仰のけ反ぞった。
　ウェイビーにパーマをかけたツインテール。なかなかの熟練者とお見受けする。
「まあ、やっぱり！　牧もく須す先輩でしたのね！」
　どうやら、サークル主と慧理那は知り合いのようだ。
「慧え理り那な、この人は？」
「牧もく須す豊と美み得え先輩。去年の陽よう月げつ学園高等部の生徒会長をお務

めになられていた方ですわ」

　俺の質問に慧理那がてきぱきと答えたことで観念したのか、変顔でやり過ごそうとしていたその先輩は肩を竦(すく)めて苦笑した。

　いずれにせよ、その存在感のあるツインテールが健在な限り、言い逃れは出来なかったろう。

「ま、まあちょっとした趣味でね。大学に行ってからはのびのびとやってるっていうか。えっとね、この本は神(しん)堂(どう)さんには元ネタわからないと思うから……」

「いえ、わかりますわ。わたくし、毎週見ていますもの！」

「え」

　慧理那の特撮ヒーロー好きは別に周囲に隠している様子はないのだが、率先して喧(けん)伝(でん)しているわけでもないらしく、生徒会で一緒だったこの先輩も知らなかったらしい。

「牧須先輩も特撮がお好きでしたのね！　在学中、もっとお話したかったですわ」

「いや、私は特撮っていうかドラマの方っていうか役者の方っていうか……」

「とてもお上手ですわ！　こちら、一冊くださいな」

「えと、あの、その……!!」

　牧須先輩は、慧理那が自分の描いた本の元ネタを知っているとわかった途端に、再び明確に狼狽(うろた)え始めた。

「ご、ごめん！　君、神堂さんのカレ……友達だよね!?　この本読んで、上(う)手(ま)く説明して諦(あきら)めてもらって！」

「はあ……」

　お願い！　と手を合わせたのにつられるように、彼女のツインテールがふわりと舞い、先端がちょこん、と触れ合った。ツインテールのお願いポーズだ。

　むむ、そんな頼まれ方をしては、どんな無茶だろうと引き受けざるを得ない。
　俺は本を受け取り、ページをめくり始めた。
　そして、すぐに安請け合いだったと後悔することになる。
「うわ……」
　俺もこのヒーロー番組は観ている。定番の五色の戦隊ものだが、子供向けにしてはかなり人間関係が複雑で、男性メンバーのレッドとブルーの二人は女性のピンクを取り合って三角関係だ。反面、いがみ合いながらも、戦いを通して男同士の熱い友情が生まれるのが中盤の見せ場だった。
　ところがこの本ではその友情が、敵怪人の巨大化を凌しのぐ勢いで拡大解釈されている。
　開始２Ｐページで、ストーリーなどくそ食らえと言わんばかりの潔いさぎよい割り切りでレッドとブルーが全裸になり、子供には見せられない類たぐいのバトルを繰り広げ始めていた。
　あまつさえ……男性自身がとてつもなく克明に書き込まれている。
　そこだけ隠して何になるんだ、というような、ちょうど先端と胴体の境目の部分に、申し訳程度に黒線が引かれているくらいで、あとは血管とかにいたるまでそれはリアルに……うわ、うわああ。
　これは頼まれなくても慧え理り那なには見せられないだろう。
　俺は悪いと思いながらも、作者の人をまじまじと見つめた。
　この人が、このツインテールが、この絵を……。
「あっ……やば、何これ、ぞくぞくする、年下の男の子に蔑さげすんだ目で見下ろされるって、何かイイ!!」
　まずい……慧理那の先輩さんが、言動だけ慧理那の同級生になり始めたぞ!!
　俺は牧もく須すさんを傷付けないよう……かつ、慧理那も納得してくれ

るよう、考えを巡らす。

「この本、ちょっと大人向けみたいだぞ。本編でも色々恋愛関係が複雑だろ？　その辺を〝独自の解釈〟で詳しく描いてるみたいで……この人の言うとおり、慧理那にはちょっと」

　慧理那はぷう、と頬ほおを膨ふくらませた。

「わたくしの方が、観み束つか君よりお姉さんですのよ！　大人向けでも全然大丈夫ですわ!!」

　うう、慧理那のお姉さん気質を刺激してしまった。

　慧理那のツインテールが、怒る仕草に合わせてぴこぴこと揺れる。

　すみません無理です、と牧須さんにアイコンタクトを送る。

　すると牧須さんは、またビクンビクンと身体からだを震ふるわせた。どうすればいいんだこの人。

　売買手双方の視線から逃げるように本の表紙に視線を移すと、端はしの方に成年指定のマークがあるのを見つけた。

「慧理那、これ！　成年指定って書いてる！　慧理那はまだ一八歳未満だろ？」

　前にエロ本を買いに行って同じ理由で断られたことがあるから、こう言えば素直に納得してくれるだろう。何だ、牧須さんも最初からこう言って断ればよかったのに。

　……俺、見ちゃったけどな。

「じゃあ、尊みことに買ってもらいますわ！」

　お嬢さまが……生徒会長が、いけない法の抜け道を……。

　為す術すべ無く立ち尽くす俺を余よ所そに、慧理那と桜さくら川がわ先生は商談に入っていた。

「牧須先輩、この本はおいくらでしょうか？」

「ご、ごひゃ……」

　牧須さんは慧理那に問われるや否や、五〇〇円と印字された名刺サイ

ズのプライスカードを本の前からすかさず回収。わざとらしく後頭部を搔かきながら笑う。
「五〇〇万円は必要ですねえ～！」
　そんなベタベタな……。
　しかし慧理那は涼しい顔で、
「小切手でよろしいですか？」
　さらに桜さくら川がわ先生も続く。
「お嬢様、クレジットカードならマイルポイントがつきます」
「…………」
「…………」
　俺も牧もく須すさんも言葉を失った。
「ごめんなさい五〇〇円です……」
　軽いおばちゃんノリのギャグで誤ご魔ま化かしたのに、それをわざわざ自分で言い直させられるという憂き目に遭った牧須さんは、沈ちん鬱うつな表情で桜川先生に本を渡した。
「ありがとうございます、先輩！　わたくし、次のイベントも絶対買いに来ますわね!!」
「ひいいいいいいいいいいいいいいいいいい!!」
　絶叫する牧須さん。周りのサークルの人はうるさいと顔をしかめるどころか、まるで我が身に起こった悲劇を噛かみしめるかのように震ふるえている。
　何となく、この人たちの苦しみがわかってきた。
　俺たちで言うところの「正体バレ」と同じくらいの危機なんだな。イベントで知り合いに会うというのは。

　特撮スペースは早くに回り終えたのだが、その帰り道がまずい。
　ここは逆にアニメ関係のスペースが多いようだが、裸の女の子のイラ

ストが堂々と描かれたポスターが樹立している。可愛かわいいというより、ポーズやタッチが露骨すぎて、卑ひ猥わいだ。

　桜川先生が慧ぇ理り那なの視界を遮さえぎるように歩いているが、限界がある。

「うーむ、ちょっと過激すぎるな……。観み束つか、スペースに戻るまで、どうにかお嬢さまの目を塞ふさいでくれんか……」

　さすがにこれは俺も同意だ。

「でも、どうやって？」

「奥様から色々預かっている。いざという時に観束、お前がお嬢様に使うようにと」

　桜川先生から手渡されたのは、シルクの手触りのアイマスクだった。

　いざという時……？　なるほど、こんな風に、あまりよろしくない光景を見せないようにするためか。

「慧理那。悪いけど、これをつけて歩いてくれないか」

「ええっ、アイマスクじゃありませんの、これ……？　何も見えなくなりますわ」

「俺が、手を引いて歩くから……駄目か？」

「観束君が⁉　え、ええ、それでしたら……」

　いやにあっさりと納得したので、俺は慧理那にアイマスクをつける。

「それと、私も意味がわからんのだが、そのアイマスクとこれはセットで使うらしいんだ」

　続けて渡されたのは、どう見ても手錠だった。確かに、これの必要性は見当もつかない。

「内側がスポンジみたいな素材で覆われてるみたいだし、痛くないだろうけど……」

　理事長がセットで使うものだと言ったなら、仕方がない。手錠を慧ぇ理り那なの手首にはめた。

早々に自分たちのスペースに戻ろう。俺は慧理那の華きゃ奢しゃな手を取り、歩き出す。
「はあ、はあ……み、観み束つか君、もっと強く、手を握ってください……」
「わかった。痛かったら言ってくれ」
不安だろう。人ごみの中を、目隠しをして、しかも両腕を拘束したまま歩くなんて。
息が荒いし、握った方の手がしっとりと熱を持ち始めた。
こんな状態で誰だれかにぶつかったら、怖くてたまらないだろう。俺はせめて絶対に通行人にぶつからないように心掛けた。
ところが、突き動かされるように一心不乱に早足で移動している参加者たちが、俺たちを見た途端、次々に足を止め、道を譲るように横に避よけてくれるようになった。
何となく事情を察してくれたのか？　ありがたい。

目隠しと手錠をした女の子を引っ張って歩く男、という状況を俯ふ瞰かんする余裕は、今の俺にはなかった。



◇

　時間ほぼぴったりにスペースに戻り、今度は愛(あい)香(か)と俺で会場を回る番となった。
　慧(え)理(り)那(な)と交代した途端、愛香はハードル走のように自分のスペースの机を飛び越えた。そして、脇(わき)目(め)もふらず最短距離で目的のスペースへと直行しようとする。
　テイルブルーの本が欲しくてたまらないのだろう。小刻みにテレポートするような速さで人垣をすり抜け猛進する愛香を必死に追いかけ、呼び止める。
「愛香！　待て、もう少し他も見ながら行──」
　俺の制止も虚(むな)しく、とうとう愛香はテイルブルーの新刊を作っているサークルスペースの前にたどり着いてしまった。
「新刊一冊ください!!」
　初参加、初購入とは思えない慣れた言葉と共に、五〇〇円玉を差し出す愛香。
　スペースにいたのは、筋骨隆々でピッチピチのＴシャツを着た、外国人だった。
　気のせいか、どこかで見たことがあるような……？
　大きなサングラスも相まって、威圧的な雰囲気なせいか、お客さんの姿は他に見えない。
「シンカン、これでス」
　カタコトの日本語で指し示されたテーブルの上に載っていたのは、テイルレッドが表紙の本だ。愛香は笑顔のまま固まり、サークルの番号を今一度確認した。もちろん、合っている。
「あの、テイルブルー、の、本は……」
　愛香が親指と人差し指で摘(つま)んだ硬貨が、徐々に曲がっていくよう

な……目の錯覚だよな。

「今僕、友達のお留守番してまス。今日のシンカン、テイルレッドでス」

　なるほど、サークルの代表者さんが今不在で、代わりにお友達が売り子をしているのか。

　そうなるとこれ以上の質問はしづらいが、それでも愛香は食い下がる。

「あの、カットにテイルブルーが描かいてあって……あたし、それを見て……」

　留守番とはいえ、テイルブルーの本を求めて来てくれたその心情を察してくれたのだろう。

「制作途中デ、テイルレッドに変えたみたいでス。少し前レッドにエレメリアンから助けてもらったからラ、ファンになったんだっテ。来てくれたのニ、スミマセン」

　こんなに優しく丁寧に説明されては、愛香も曲げた硬貨を寸分違わず元に戻すしかない。

　少し寂しげな笑顔で硬貨を渡し、本を買う愛香。俺も、一冊買わせてもらった。

「いいノ？　テイルブルーじゃないのニ」

　謙けんそんをしているけど、ちょっとめくってみただけで俺はその筆致に引き込まれた。

　台詞せりふは日本語だが、ダイナミックな構図や豪快な書き文字は、まさにアメコミ。

　オリジナルだろうか。俺も記憶にないエメレリアンを相手に、テイルレッドが戦っている。よほど、ヒーローとしてのツインテイルズを愛してくれているのだろう。情熱がコマの一つ一つにまでほとばしっている。

「僕は、テイルブルーを描かいて欲しかったんだけどネ。ブルーのファンだからラ」

　礼を言って立ち去ろうとすると、売り子さんは不意にそんなことを口にした。

「あのダイナミックな戦い方、かっこいいよネ！　僕も身体からだをもっと鍛えテ、彼女みたいに強くなるヨ！」

　その力強い言葉に救われたのか、愛あい香かは売り子さんに笑顔でお辞儀をした。

「そーじ」

　歩き出して程なく、弾むような声で呼ばれ、俺も「ああ」と返す。

「あたしのしてきたこと、間違ってなかったんだね。世間でどんな風に思われても、ちゃんとブルーのことを評価してくれる人はいるんだから」

「そもそも、慧え理り那なだってイエローになる前からそう言ってくれてただろ。自信持てよ」

「うんっ」

　ただ、誉められたからって〝ダイナミックな戦い〟は自己肯定しないでくれよ、頼むから。

　俺と愛香は、道に詰まって足を止める。通路に沿うように人の列ができていた。

　全て、一つのサークルスペースに向かって並んでいる。

「すごい行列だな」

「そうね」

　お客さんがたくさん来るサークルほど外周に配置されるとトゥアールに教えられたのだが、そのサークルスペースはホールの中程に位置しているにもかかわらず、長蛇の列ができ、通路を塞ふさがないよう係の人が

集まって誘導までしているほどの盛況ぶりだった。
　よく見てみると――
「テ、テイルレッド!?」
　お客さんに本を手渡しているのは、ゆるキャラのように丸くデフォルメされた、テイルレッドの着ぐるみだった。しかも、それが二体。愛あい嬌きょうのある動きで売り子をしている。
　コスプレをしている人はすでに結構見かけたが、着ぐるみとは。思わず声が漏れた。
「すごいな……」
　着ぐるみだが髪の毛ツインテールのクオリティが半端ではなく、本物の人間と比べても遜そん色しょくないほどだ。
　この噎むせ返るような暑さの中、周りの迷惑にならない程度に小刻みに動き、可か憐れんさをアピールしている。決して声は出さず、仕草だけでコミュニケーションを完かん遂すいしている。
　作り込んだツインテールだけに頼らず、その他の細かな努力も惜しまない姿勢が素晴らしい。
　きっと中の人は、ツインテール好きに違いない。
「そーじ、買うの？」
「え？」
　愛あい香かに声を掛けられて気づく。俺は無意識に列に並び、「最後尾」の札を受け取っていた。
　列の一番後ろの人がこの札を頭上に掲げることで、これから並ぶ人の目印になるのか。
　あの着ぐるみ姿で料金と商品の受け渡しは恐ろしく速く、あっという間に俺の番が来た。
「……素敵なツインテールですね」
　そう一言だけ告げてお辞儀をし、本を受け取る。それはもちろん、着

ぐるみのツインテールのみならず、それを使いこなす中の人への賞賛だ。
「おっと、中の人はいないんだった──」
　自分の未熟さを恥じて独りごちる。すると、着ぐるみは「どうも」と応こたえるように可愛かわいらしくお辞儀を返してくれた。満ち足りた気持ちと共に、本を手にして早々に人垣を抜けた。
「へえ、これも上う手まいわね」
　人の邪魔にならないところまで移動し、軽く本をめくると、横から愛香も覗のぞき込んできた。
「ああ。愛が伝わってくるな」
　自分のことを描かかれているのだから照れが入りそうなものだが、不思議と俺は素直にそう思えた。先ほどのアメコミもそうだが、揺るがない気持ちを感じるんだよな。
　もしかしたら、漫画を初めて描いたのかもしれない。そう思えるほど、線や仕上げは粗かったが、それを補って余るほどのあふれんばかりのキャラ愛が、この本からは伝わってくる。
　あの人たちは、よほどテイルレッド、そしてツインテールのことが好きなんだな。
　本をバッグに仕舞って自分のスペースに戻ろうとした時、横に立っていた男子が携帯電話で残念そうに話しているのが聞こえた。
「企業ブースの善いい沙すな闇あん子このトークイベント、やっぱり中止だってさ。残念だなあ～」
　……善沙闇子……イースナ!?
「お詫びにメガネドンのグッズ配布するらしいから、それもらいに行くわ」
　愛香に促され歩き出したが……俺は、先ほどの話が気になった。
　イースナ、ダークグラスパーとは、あの異世界でフェニックスギル

ディとの戦いを任せて以来、一度も顔を合わせていない。それは、こちらの世界に帰って来てからのテレビ放送など……つまり善沙闇子も含めてだ。
　トゥアールがフェニックスギルディの反応が消えたのを確かに確認している。倒したのは間違いないんだ。あいつ、ちゃんとこの世界こっちに帰って来てるよな……？
　そう思ってから、俺は自分がおかしなことを言っていると自じちょう嘲した。
　ここが、俺たちの世界が、イースナの帰ってくるべき世界だなんて。
　味方はしてもらったがあいつは本来、この世界の侵攻指揮を取っている敵じゃないか。
　でも、メールの返事も結局来ないままだったし、やっぱり心配だな──。

　その後も予定時間まで愛香と会場を散策し、自分のスペースへ帰ろうとした時、館内のスピーカーからチャイムが鳴り響いた。「不審物がないか身の回りを確認してください」という啓けい蒙もうの放送が少し前にあったが、またそれだろうか。
『コスプレスペースに、エレメリアンが出現したそうです。イベント参加者の皆様は、慌てず騒がず速すみやかに避難なさってください』
　件くだんの館内放送とトーンとテンションは同じだが、とんでもない内容が伝えられる。
「……悔しいけど、トゥアールの読みが大当たりだったみたいね」
「お前は何でいつも、トゥアールがいい仕事すると悔しがるんだ……!?」
　俺と愛あい香かは人通りのない外階段の陰に身を躍らせ、変身した。
「テイル・オン！」

光の繭まゆが弾け、全身にツインテールの力が漲みなぎる。
会場では、たくさんのツインテールへの愛を見せてもらった。俺も負けてられないぜ！

「そういえば、この世界で変身するの、久しぶりね」
ギアの感触を確かめるように、指を握ったり開いたりしているブルー。

「そ、そうだな」
俺は相変わらず、早起きした朝は変身し、テイルレッドのツインテールを見て英気を養っているのだが、それを言ったら怒られると思うので黙っておく。

「さあ……行くぞ‼」

◇

髪紐属性リボンで飛行するブルーに摑つかまって、あたかも空の彼方から登場したと人々に見えるように、エレメリアンがいると思おぼしき場所に近付く。

館内放送の通り、現場は屋外のコスプレスペースだ。アニメやゲームのキャラのコスプレをした人たちがひしめき合っている。

安全圏と判断されたかのようにできあがった円の中心に、佇たたずむ影が一つ。あれが現れたエレメリアンで間違いないだろう。

「そこまでだ！　エレメリアン‼」
空中で髪紐属性リボンを解除し、颯さっ爽そうと地面に降下する俺とブルー。

──そこには、首から下だけテイルレッドの着ぐるみを着た虫型のエレメリアンが、地面に落ちたテイルレッドの頭部をしょんぼりしながら見

つめていた。

　バランスを崩し、俺とブルーは着地をミスってミサイルのように地面に激突する。
「テイルレッドだ！」
「テイルレッドが来てくれたぞ!!」
　到着ではなく墜落なのだが、俺たちがこんな派手な登場をし、人々が騒いでも、エレメリアンは微動だにしない。
　なんて哀愁漂う立ち姿なんだ、とてもこれから戦いをするとは思えない……！
　まるで、両親が大切にしている花瓶を割ってしまい、呆ぼう然ぜんとしながら地面に落ちている破片を見つめている子供のようだ。
　なるほど……トゥアールからエレメリアン探知の連絡がなかったのに、人々が気づいたのはこういうことだったのか。以前トゥアールは、属性力探知器エレメーラサーチャーでは、エレメリアンの核コアである属性力エレメーラが活性化しない限りは、誤探知を防ぐために反応しないと言っていた。
「あいつ、変装してこの会場に忍び込んでいたけど、何らかのハプニングで正体を晒さらしてしまったんだろうな」
　とにかく、二人にも連絡したのでイエローも遅れて駆けつけてくるだろう。
　一方、ブルーの懸念は別のところにあったようだ。俺の肩をちょいちょいとつつく。
「……あれ、さっきあんたがベタ誉ぼめしてた着ぐるみよね……」
　そうだな。俺がその見事なツインテールの作り込みに敬意を懐いだき、その人たちが売っていた本を見て、あふれ出るテイルレッドへの深い愛情を感じた着ぐるみさんだな。
　中の人は、実はエレメリアンだったということか。わー驚いた……。

　きつい日差しのせいかな、テイルギア着てても立ちくらみがしてきたぞ。

　その時、エレメリアンはようやく生気の抜けた顔をこちらに向け、ぼそりと口を開いた。

「……俺のコスプレは完かん璧ぺきだった……」

　くたびれたおっさん声だ。着ぐるみが徹底して無口だったのがわかった気がする。

　迅じん速そくに到着した俺たちに気づいても驚かないあたり、よほどショックが大きいと見える。

「しかし、悲しきは本能！　同人誌完売の喜びに浮かれ、コスプレスペースにやってきてこのコスプレを披露し、賞賛を受けるうちに……どうしても、脱皮をしたいという誘惑に打ち勝てなかったのだ!!」

「よく見たらあいつ、セミみたいな頭してるわね。そりゃあ、脱皮もするわ」

　ブルーが冷静に納得する。多分、うっかり頭部を外した時点ではっと我に返り、やらかしてしまったとフリーズしていたのだろう。

「作戦は失敗だ……!!」

　ついには、身体からだの方の着ぐるみまで脱いでしまった。

「作戦って、一体何のために同人誌売ってたんだよお前ら」

「わからぬ！　だが、売っていた!!」

　そうか、としか言いようのないストレートなブン投げ回答に、敵ながら心配になる。

「俺は皆の頑張りとビートルギルディ様の面目を潰した大罪人！　もはや生きて基地に帰ろうとは思わぬ！　この上は、お前たちの属性力エレメーラをいただくことで汚名を少しでも削そごうぞ!!」

　およその事情はわかった。その上で俺は、こいつに言わなくてはいけないことがあった。

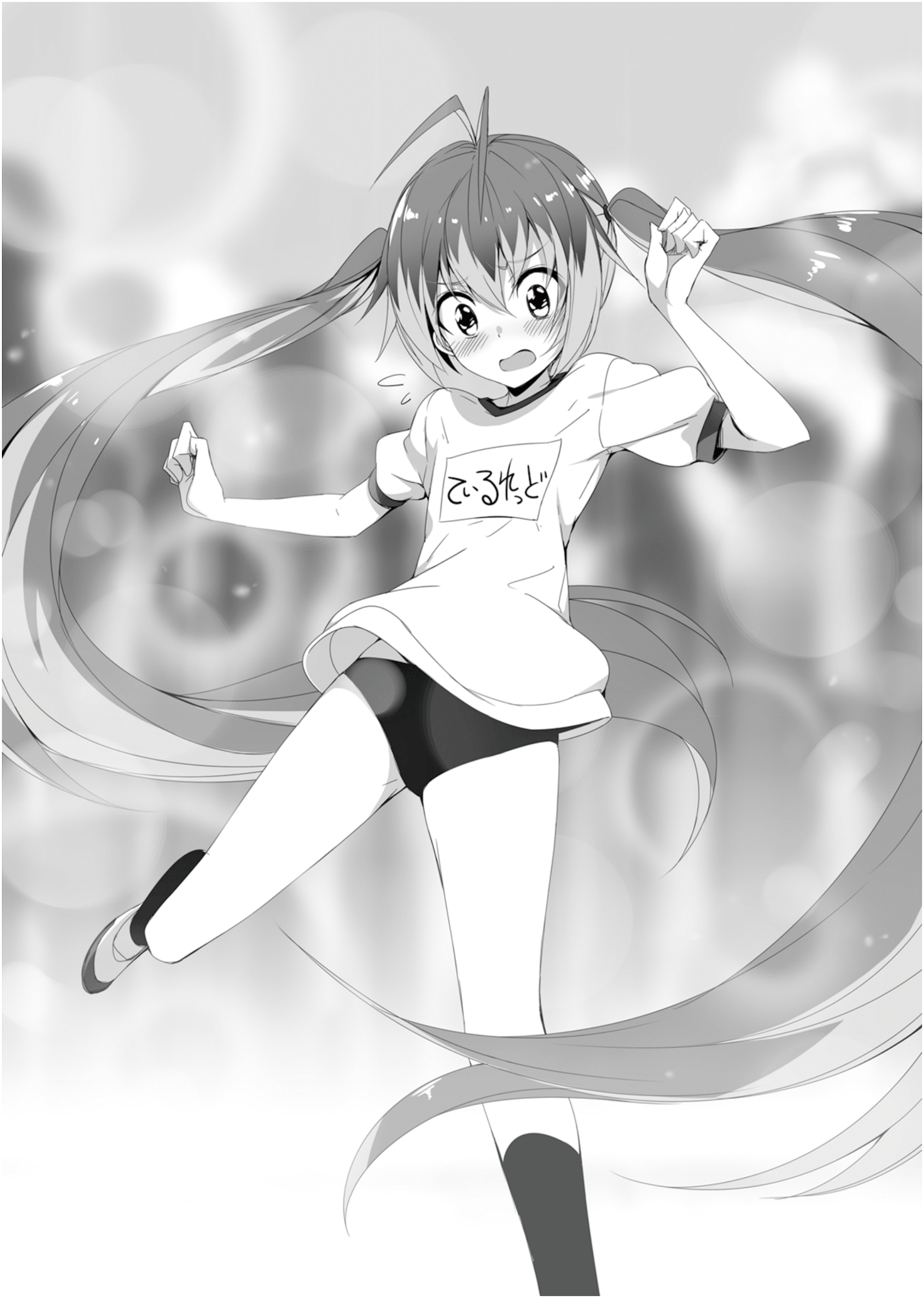
「お前、名前は」
「我が名はシケーダギルディ！　仮装属性コスプレにて美を探求する戦士!!」
「――美の探求だと？　じゃあ、その着ぐるみは何だ」
　俺は、シケーダギルディの足元に転がっている着ぐるみを……ツインテールを指差した。
「確かに美を探求したんだな、見事なツインテールだった。俺もそれは素直に認める。けどな、お前はいつまでそのツインテールを地面に転がしておくつもりだ!!」
「はっ……!!」
　ようやく気がついたのか、慌てて着ぐるみの頭部を拾い上げるシケーダギルディ。
「見ろ！　コンクリートの上に放置されて、ツインテールもボロボロじゃないか！　自分の進退より、まず目先のツインテールを心配したらどうだ!!」
　真夏の日差しで熱せられた地面に長々と置いたせいで、着ぐるみもツインテールも変形して痛々しい姿となっている。俺は、それを糾弾せずにはいられなかった。
「おおっ……テイルレッドよ、お前の言う通りだ……！　正体が露見したのが何だ！　何よりも先んじて地面に落ちた我が子きぐるみを案じなかった、俺が馬ば鹿かであった!!」
　事の重大さに気づいたのか、シケーダギルディは着ぐるみの頭部を愛おしげに抱き締め、泣きながら頬ほお擦ずりを始めた。いや……そこまでしなくていいんだけど……俺の顔に……。
　俺に向かって歓声と拍手が送られてきた。すっかりギャラリーが出来上がり、盛り上がっている。
　ちょうどその時、遅れてやって来たイエローが合流する。

「お待たせしましたわ！」
　敵が脱衣したと宣言した後に来てよかった、対抗意識を燃やしかねない。……今ここでイエローの完全脱衣形態フルブラストモードが解放されたら地獄絵図だ。
　はあはあするのだけは絶対に阻止しなければ。
「三人揃ったか、ツインテイルズ……ならばこちらも！　者共、いでよ!!」
　シケーダギルディの号令でいつも通り戦闘員アルティロイドが現れるのを警戒し、俺たちは身構える。
「モケー」
「モケケー」
「げっ!?」
　今回はいつも以上にコミカルなモケーだ。何と、俺が見とれたテイルレッドの着ぐるみが、今度は編隊を組んでいる。悠然と人垣をかきわけ、こちらへと歩いてきた。
　あっという間に周りを取り囲まれ、イエローとブルーが背向かいで警戒する。
「テイルレッドのコスプレをした戦闘員アルティロイドですわ！」
「ちょっと何十体いるのこれ!?」
　シケーダギルディは自信満々に紹介を始めた。
「名付けて、テイルレッド着ぐるみ部隊トルーパーズ!!」
「同人誌を印刷するような気軽さでテイルレッドを量産してんじゃねー!!」
　わざわざ戦闘員アルティロイドをテイルレッドにコスプレさせる意味がわからないが、少なくてもこの壮観な光景に、ギャラリーは大沸きだ。
　コスプレスペースの本領発揮とばかりに、激しいフラッシュが焚たかれる。

　テイルレッド部隊(トルーパーズ)を盾のように自分たちの前に整列させ、シケーダギルディは勝利を確信したように笑った。
「どうだツインテイルズよ、自分や仲間の姿をした者が相手では手を出せまい!!」
　ああ、戦闘員(アルティロイド)をコスプレさせたのはそういう意図だったのか。でもなあ……。
「え？　出せないって？　誰(だれ)が？」
　ブルーは淡々と、いたって真顔で、テイルレッド（着ぐるみ）の顔面をブン殴っていた。
「何をする貴様ああああああああああああああああああああああああああああ!?」
　シケーダギルディが絶叫し、目を疑うような蛮行にギャラリーは声を失って固まる。
　わかりきってたことだろう。こいつら、過去の戦いをちゃんと教訓にしてるのか……!?
　着ぐるみどころか、フォクスギルディの用意したもっと俺の等身に近い人形だって、ブルーは一片の躊(ちゅう)躇(ちょ)もなく粉々にしたんだぞ。しかも初戦闘でだぞ。そういうお方だぞ。
「こいつらいつもの戦闘員(アルティロイド)と同じでアホみたいに弱いから、気にせずブン殴ればいいよ！」
　そう言ってブルーは怖いほど機械的に、着ぐるみレッドを殴り飛ばしていく。野球のコーチが外野に向かって「どんどんいくぞー」とノックを飛ばしていくように、実に熟(こな)れた動きで。
「だから俺は着ぐるみだろうとツインテール殴るなんてできないんだよ!!」
　仕方がないことと納得はしていても、さっき俺の訴えを聞いてくれたシケーダギルディと、今キーボードのエンターキーを押すぐらいの気軽

さでツインテールを殴っているブルーを見比べ、俺はやるせなさに崩れそうになる。
「おのれ、着ぐるみの仇だ、受けよツインテイルズ!!」
　シケーダギルディはその大きな目から、リング状の光が幾重にも連なった光線を放ってきた。俺はすかさずブレイザーブレイドを抜き真ま芯しんに斬きりつけるが、手て応ごたえがない。それどころか光線は依然として照射され続け、腕をはい上り、ついに俺の全身を覆ってしまった。
「うわっ……！」
「レッド、大丈夫ですの!?」
　イエローに案じられすぐ応えようとしたが、視界に飛び込んできた違和感に声が引きつった。
「な、何だこれぇ!?」
　いつの間にか、俺は体操服に着替えさせられていた。大きめのシャツに、ブルマ。
　体操服属性ブルマのタトルギルディが、化けて出てきそうな見た目だ。
　俺は慌てて自分の身体からだを触った。
　……ボディタッチに多少躊ちゅう躇ちょはあったが、ソーラの時に比べれば起伏がゼロのテイルレッドの身体に遠慮などしていられない。
　シルクのような、軟金属のような不思議な手触りのアンダースーツも、腕や腰のアーマーの感触も、普段通り手の平に伝わってきた。
「……違う、着せ替えられてない！　テイルギアはここにある!!」
　俺自身にも、周りの人にも、別の服を着せられたように見えているが、ちゃんとテイルギアはここに存在しているんだ。
「属性玉エレメーラオーブ──文学属性ブック!!」
　すかさずイエローが文学属性ブックを発動し、眼前に能力分析のスクリーンが形成される。
「その攻撃……精巧な立体映像が、レッドの身体を覆っているようです

わ！」
　なるほど、テイルギアの強制的な着脱なんて、幹部クラスのやつだろうができるはずがないもんな。別に俺に害はないんだ、気にせず攻撃すればいいんだ。
　しかし、敵は思わぬところからやってきた。
「可愛かわいいいいいいいいいいいいいいい!!」
「撮らせてください、家宝にします!!」
　俺が体操服姿でファイティングポーズをとったせいだろうか。


てぃるそっど

　ギャラリーたちは一定の距離をとるのも放棄し、マナーをブン投げて俺の元へと殺到。
　男性はさらなる接写を試み、女性は俺の身体からだをベタベタと触り始めた。
「や、撮らないで……！　やめて～！」
　何な故ぜ俺はテイルレッドの姿の時には、望まぬか弱い声をだしてしまうのだろうか。
「まだまだ行くぞ！　次はこれだ!!」
　シケーダギルディの攻撃は対象以外は全て透過するらしく、ギャラリーをすり抜けてさっきのビームが俺に直撃した。
　今度は、婦警さんの格好に変えられた。タイトなスカートに一度もはいたことのないパンスト、子供には似合わない服装だが――
「お願いします、逮捕してください!!」
　俯うつぶせで地面をはいずりながら、男たちが殺到してくる。
　日本の将来を担う若者たちが、どんどん道を踏み外していく!!
「極めは！　これだあああああっ!!」
　三度目のコスプレで、俺はとうとうウェディングドレス姿にされてしまった。
　熱狂は最高潮になり、フラッシュは太陽よりも眩まぶしくなった。
「殺すぞこの虫ケラがああああああああああ！　私は何が許せんって、ファッション感覚でとりあえずウェディングドレスを着てみる女がたまらなく許せんのだ！　ウェディングドレスはなあ……結婚するその日にだけ着るものだああああああああああああああああ!!」
　採寸も試着もクソくらえという、メイドさんの怨えん嗟さの叫びがギャラリーに交じって聞こえた。己おのが魂の主張のためなら、いつだって風のように現れるな、あの人は……。
　とにかく、この距離に一般人がこれだけいては、俺は戦うことができ

ない。ブルーやイエローが暴走しないよう願いつつ、こいつの攻撃に耐えて活路を見出だすしかないのか……!?
「わーっはっはっはっは！　最高の素材、最高のコスプレ！　人間どもよ、コスプレの素晴らしさを知り、コスプレを愛するがよいぞ!!」
　その熱狂を斬きり裂くように、拡声器で拡大された音声がコスプレスペースに響き渡った。
「はっはっはっはっはっはっはっは！　まさしくセミの命のように儚はかない信念ですね！」
「ぬう、何やつ!?」
　ギャラリーが一糸乱れぬ動きで左右に割れる。悠然と歩みを進めてきた、白い人影は──

「私は世界を渡る復ふく讐しゅう者、仮面ツインテール!!」

　トゥアールだ。仮面ツインテールが、とうとう公おおやけの前に姿を!!
「何だ、あの怪しげなマスクの女は!?」
「何故だ、何故テイルレッドたんにはまともな仲間がいないんだ!?」
　やはり、人垣が割れたのは関わり合いを持つまいとする防衛本能だったようだ。
　仮面ツインテールは人々の反応も気にせず、シケーダギルディに指を突きつけ、糾弾した。
「あなたたちエレメリアンがこの世界に現れたのは四月！　とっくにこのイベントへの申し込み受け付けは終了している時期です！　どんな卑ひ怯きょうな手でサークル参加したんですか!!」
　…………ほぼ同じ時期にこの世界に来たはずのトゥアールも、当たり前のように今日サークル参加していたんだが、それは……。
「それよりも！　テイルレッドをコスプレさせることで、コスプレの属

性が拡散すると!?　その目もく論ろ見みは大外れです!!」
「何をう!?」
　いつものように、エレメリアンに説教を始める仮面ツインテール。
「テイルレッドほど可愛かわいい女の子ならば、何を着ても似合ってしまう！　どんな場違いな服装でもモノにしてしまう！　元の固定概念を打ち壊し、新たなる美として完成させてしまう！　それは、仮の装いではなく正道！　正装なのです!!　コスプレではありません!!」
「な、なんと……仮装を正装に!?」
「そう！　それはもはや――コスプレではなく、お着替えです!!」
「お、お着替えだと……!!」
　シケーダギルディは、射抜かれたように胸を押さえ、陶酔にまどろむ。
「むう、信念を砕かれたばかりだというのに何だ、この胸のときめきは……！　テイルレッドのお着替え！　この言葉を反はん芻すうするだけで、身体からだが熱く燃え滾たぎる!!」
　さらにギャラリーはやっと離れてくれたものの、熱病から覚めたわけではなかったようだ。
「くそっ、変な仮面の人も、エレメリアンも、いいこと言いやがるぜ！」
「テイルレッドのお着替え！　これは流行はやるぞ!!」
「よし、玩具メーカーに商品化リクエストの電話だ、急げ！　盆休みなんて知るか!!」
　口々に欲望を叫ぶギャラリーたち。エレメリアンも人間も、行動に大差がない……。
　シケーダギルディもこの人たちも、実は男のお着替えで喜んでるなんて知ったら、信念が砕けるどころか廃人になるんじゃないのか。
「……というわけで、後はよろしく！」

　仮面ツインテールは俺たちに手を振り、そそくさと退散してしまった。
「何しに来たのよあんたはあああああああああああああああああああ!!」
「一般人の方々を遠ざけてくださいましたが、なにやら敵も喜ばせてパワーアップさせてしまったようで、プラスマイナスゼロでしょうか……」
　ブルーが抗議の声を上げ、イエローもむむむ、と唸うなる。
『何しに来たと言いましても。私だけ、総そう二じ様とお買い物できませんでしたから。つーん』
「「うっ……」」
　通信に切り替わり、トゥアールが拗すねたように言ってきた。ブルーとイエローの二人が、揃って言葉に詰まる。
　そういえば、トゥアールは交代時間の前だから、ずっと待機していただけだもんな。
　イエローだけでなくブルーも少し申し訳なさそうにしていたが、すぐに気を取り直し、俺に注意を促してきた。
「レッド、あんたは今仮にもウェディングドレス姿なんだから、おとなしくしてて」
「ええ。花嫁さんが剣を振るうなんて、見過ごせません。わたくしとブルーが戦いますわ！」
　それは、女の子ならではの気遣いだった。ウェディングドレスは、お着替えの中でも特別中の特別なんだろう。
　ギャラリーの中で血の涙を流しているように見える、メイドさん含め。
「シ、シケーダギルディ君……お、遅れてごめんね、ホヒッ……」
　背後から蚊かの鳴くような小さな声が聞こえ、振り返る。

　そこにいたのはまさに、蚊の姿をした小柄なエレメリアンだった。腹部だけが、血を満腹まで堪能した蚊のようにぽっこりと膨ふくれている変わったフォルムだ。
「おお、モスキートギルディ！　いいところに増援に来てくれた!!」
　……セミに、蚊のエレメリアン……。
　夏だなあ……。
「企業ブースでお宝を探していて、騒ぎに気づかなくてさあ。レッドたん抱き枕は買えたよ」
　肩を小刻みに震ふるわせる小物くさい笑い方で、モスキートギルディは紙袋を掲げる。
　深く考えたくないんだけど、俺の全身がプリントされた抱き枕って、何に使われるんだ。
「よし、これで二対二の勝負だ！　ゆくぞテイルブルー、テイルイエロー!!」
「そうだねえ。辛つらかったテイルブルーのイラスト描かきの修行の日々の成果、見せなくちゃあ」
　シケーダに続くモスキートギルディのさりげない言葉に、ブルーはビクリと身体からだを震わせた。
「今、何て……!?　修行の内容!?　イ、イラストって……」
　わざわざＴＶ放送をジャックしてまで宣言した休戦。その修行の内容が今、明らかになった。
「その通り！　我らの修行はテイルブルー！　お前のイラストを一心不乱に描くことだ！　この休戦期間我らは一丸となり、修行に励んできた。全ては、貴様を倒すためだ!!」
「あたし!?」
「辛く、険しい日々だった。その中で鬼神テイルブルーの動きを目に焼き付けたのだ!!」

　シケーダギルディはその辛い日々を思い出したのか、拳こぶしを握り締め打ち震えている。
「ブルーだけですの!?　対イエローの修行はしませんでしたの!?」
　イエローが何な故ぜかまた羨うらやましそうにしているが、これはまずい傾向だぞ。
　ブルーの苦手なニュルニュルな奴やつを送り込んでくるどころか、とうとう対ブルーに焦点を合わせた特訓までしていやがったなんて……敵も、日々成長しているってことか!!
「描かいたイラスト……み、見る？　見る？　自信作なんだけどさあ……ホヒヒ……」
　そのねちっこくか細い言い回しに、ブルーが苛いら立だち始める。モスキートギルディは気にせずどこからともなくＡ４サイズの紙を取り出し、ブルーの眼前に突きつけた。
「おお、テイルブルーのイラストだ！」
「上う手まい！」
　ギャラリーが、イラストを見て率直な賛辞を送る。確かにブルーのイラストだ。
「上手いけど、何でイラストを書いて修行になるんだ……あれ？」
　俺の脳裏に疑問が浮かんだ。ブルー……愛あい香か。エレメリアン。そして、イラスト。
　何か、思い出してはいけないことがあったような。
『ブルー……いいえ、津つ辺べ愛香さん』
　まるで怪談でも始めるかのように、トゥアールが声を低くして通信してきた。
　聞きたくないとばかりに、即座にブルーが制止する。
「待って」
『異世界に行く前に、部室で話していたことなんですけど。私も、まさ

か、とは思ったんです。マジで今回ばかりは冗談半分だったんですが――』
「言わないで」
『――エレメリアンがテイルブルーのイラストを描いたら、部室で全裸で一日過ごすと言いましたよね？　マジでやってたみたいですよおゲハハハハハハ!!』
　無情にも、異世界に旅立つ前に部室で交わした二人の約束が、現実のものとなってしまった。
『さあ、戦ってくださいテイルブルー！　この戦いに勝とうが負けようが、あなたを待つのは破滅だけですが！　いいですねえ滅びの美学!!』
「一人じゃ死なないわよ……！」
　本気だ。トゥアールを抱えて火山の噴火口に飛び込むくらいは平気でやる目だ。
「ホヒッ……ぼ、僕たちの修行の成果に、ブルーが動揺してるよ。よおし、僕も同じ仮コ装ス属プ性レとしてシケーダギルディ君には負けていられないよねえ……ホヒヒ」
　モスキートギルディは勝利を確信したのか、武器の曲刀を出現させ、弱々しく握り締めた。
「……オーラピラー!!」
　ブルーは開き直ったようにランスを構え、即座にオーラピラーを放った―のだが。
「――見切ったあ！　エグゼキュートウェイブ、破れたり～!!」
　モスキートギルディは、にやけ笑いのままそれを皮一枚の差で回避した。標的を逃し、後方のギャラリーへと向かっていったオーラピラーを、慌てて遠隔で霧散させるブルー。
「う、嘘うそでしょ……避よけるなんて!?」
「そのオーラピラーという捕縛結界……射出の際の振り抜きが甘いんだ

よねえ」
　モスキートギルディは、これまで誰だれも指摘しなかったオーラピラーについて解説し始めた。
「テイルブルー、君はさあ、戦いの動きの中で、不自然に胴体を隠していることが多いんだけど、気づいてたかなあ？」
　ねちねちと半笑いで煽あおるように解説するため、ブルーの機嫌がみるみる悪化していく。
「初めは人体急所の心臓を庇かばっての動きかと思ったんだけど……違うんだよねえ。無意識に、貧乳が目立たないよう動いてる……そうでしょ？　その動きを注意すれば、自慢の必殺技も、回避は不可能じゃないんだよねえ～……ホヒッ」
　るる。いや、これが素なんだろうけど……モスキートギルディのねちっこい喋しゃべり方は、ただでさえ沸点が低……もとい、竹を割ったような性格のブルーには相性が最悪だ。
　そういえばトゥアールも、愛あい香かが夏服になってパンチに切れがなくなったのを見抜いた時、全く同じことを言っていたなあ……。
「ねえねえ、悔しい？　ホヒッ……貧乳気にしてるのばれちゃって、悔しい？」
　ぷーんと耳障りな羽音を立て、モスキートギルディはブルーの周囲を旋せん回かいしながらる。
　ブルーの双そう眸ぼうが赤に染まり、肩を震ふるわせ始める。ギャラリーは小さな子供に至るまで危険を察知し、一斉に後あと退ずさっていく。
　しかし悲しいかな、蚊かにはそこまで上等な生存本能を望むべくもなかった。
「そんなもん……とっくに全世界にばれてるわあああああああああああああああああ!!」
　ブルーは旋回しているモスキートギルディの素っ首を握り摑つかむと、

下段突きで顔面を地面に叩たたきつけた。轟音と共に、砕けたコンクリートの欠片かけらが舞い上がる。
「ちょ、ひどいなあもう、そんな気にし……ごぶふっ……」
　首を掴んだまま立ち上がらせ、その顔面にマシンガンのような両拳こぶしの乱打を浴びせていく。
「モ、モスキートギルディィイイイイイイイイイイ!!」
　助けに入ろうとしたシケーダギルディがブルーの肘ひじ打ちを食らって吹っ飛ぶ。
　今やブルーの心は、星を包む優しい海ではなく、光届かぬ深海の底になってしまったのだ。
　蚊の羽音を一億倍に増幅させたような耳に障る打撃音が人々の耳じ朶だを蹂じゅう躙りんする中、俺たちにトゥアールから通信が入った。
『イエロー！　確か、私の作ったＣＤを聴きたいと言っていましたよね!?』
「え、ええ、言いましたけど今はそれどころじゃ……!!」
『これはいい販促になります、是非会場の皆さんと一緒に視聴してください!!』
　その時。
　コスプレスペースにいつの間にか設置されていた巨大なスピーカーから、演歌の前奏のような情感たっぷりの音楽があたりに響き渡った。
　眼前の惨劇から目を逸そらしたかったギャラリーたちは、これ幸いとばかりにその調べに耳を澄ます。
　聞こえてきたのは――今、目の前で惨劇を繰り広げているお方の歌声だった。

貧乳人生

作詞　トゥアール
作曲　トゥアール
唄　アンチアイカシステム六号・アイカウタワセール
（盗み録どりした声の合成）

胸の薄さが　幸さちの薄さでした
胸の硬さが　拳こぶしと同じでした

噛かんだ唇くちびる　　柔らかく
触れた胸元　ただ硬く

いつか膨ふくれると　信じて　幾季節越え
変わらぬ壁と　また目が逢う

荒れ波があり　漣さざなみがあり　せせらぎがあり
乳の津々浦々　眺めます
わたしの引き波　いつ返すと

熊が逃げて　虎が泣いて　獅し子しが土下座し
それでも満たされぬ　この思い

祈る神など　とうに殴り
願う星など　墜おとしました

はあ～ん　貧乳人生　　胸が憎い
はあ～ん　貧乳人生　　胸が欲しい

悲しい歌声が響き渡る。

テイルブルーの唄うたが、戦場に哀かなしく響き渡る。

拳こぶしを振るう愛あい香かの声で、こぶしたっぷりに響き渡る。

残念なことに、ぐうの音も出ないほど今この暴虐に相応ふさわしい旋せん律りつだった。

ギャラリーたちも、賛美歌に聴き入るかのようにそっと目を閉じ、耳を澄ませている。

「か、かっこいいですわ、次はわたくしたちの歌も作ってもらいましょう！」

まるで特撮ヒーローの挿入歌を聴いたように目を輝かせるイエロー。

「あの作詞センスを目の当たりにしてその願いが出るか⁉　たぶん、脱衣岬とかそんな歌になるぞ……」

「やーめーてーよー、やーめーてーよおー」

なまじ防御力の高い昆虫エレメリアンの特性が徒あだとなった。モスキートギルディはボクシングの試合なら完全にＴＫＯをとられるほど戦意を喪失しているが、右のパンチで左にブッ飛ばされ、倒れる前に次は左からパンチが飛んでくるため、倒れることも許されない。

無間地獄とは、このことか。

徐々に、徐々に、真綿で首を絞しめるように命の灯とも火しびが消えてゆく。

「シ、シケーダギルディ君、ぼ、僕の戦利品、基地に……持って帰って……ホヒッ……」

平手でプチっと潰すように修行の成果を一蹴され、蚊かの勇士はついに力尽き、爆散した。

「モスキートギルディよ……！　くうう、わ、我らのあの修行の日々は、何だったのだ‼」

地面に膝ひざをつき、身体からだを震ふるわせるシケーダギルディ。

　せっかくコンマ一秒の隙すきを見つけたのに、必殺技を見切られたのならパンチでいいや、なんて脳筋でかかってこられたら、そりゃ手も足も出ないよな……。
「……観念したなら、俺の服を元に戻して、退却しろ！　そして、二度とやって来るな!!」
　ここまで戦意を失った相手に鞭むち打つつもりはない。まだ属性力エレメーラを奪ったりはしていない以上、ここでの戦いは早く切り上げたいというのが本音だ。
　しかし俺の願いも虚むなしく、その言葉で逆に発奮したように、シケーダギルディは勢いよく立ち上がった。
「我らアルティメギルの戦士に――撤退はない!!」
「レッドに手出しはさせませんわ!!」
　フルパワーでブン殴りまくったせいか、ブルーは疲れ果ててしまっている。
　それに変わり、今度はイエローがシケーダギルディと対たい峙じした。
　俺は、ウェディングドレス姿のままブーケを胸に立つだけだ。
「テイルイエローよ……。すぐ脱ぐお前に問いたい……。衣服とは、何だ!?　脱ぐためではなく、着るためにあるのではないのか!?　俺は間違ってはいない！　より可愛かわいい服を少女に着て欲しいというこの気持ち、男女問わず誰だれもが持つ願いのはず!!」
「あなたは、人の意思を軽んじています。感心しませんわ。着たい時に着て、脱ぎたい時に脱ぐ。それが人間ですもの……。それが衣服ですもの。そうですわよね？　ご主人様」
「確かに人の自由は守られるべきだけど、律せられるべき自由もあるとは思う……」
　精一杯の抗弁をしたつもりだが、イエローには意図が通じなかったようだ。

「ええ……自由と平和を愛する、それがヒーローですわよね！」
　好意的に解釈されて力強く頷うなずかれ、俺はそれ以上かける言葉を持たなかった。
「ならば、俺は……せめて、最後の力、着たいものを着て振り絞らせてもらおう‼　テイルブルーには殴れたが……貴様にはできるか、テイルイエロー‼」
　シケーダギルディは脱皮したはずのテイルレッドの着ぐるみを再び装着し、テイルイエローへと突進した。
　……俺のツインテールを死に装束にしないでくれるか。
「できますわ！　偽物ならば躊躇ためらいはしません！　そしてわたくしも、ご主人様におしおきで叩たたいてもらう！　仲間同士の熱き信頼がここに完成ですわ‼」
「ブルーを基準にしないで躊躇ってもいいんだぞ！　何か別方向に行こうとしてないか⁉」
　俺は、咄とっ嗟さに周囲を見渡した。
　確かにさっき開催されたブルーの血塗られた世界タイトル戦のおかげでだいぶギャラリーと距離を空けたが、それでもイエローの火力では被害を抑えきれないぞ！
　しかしそれはイエローも百も承知だったようで、何と、一発の弾丸も発射することなく、全ての武装を脱衣パージしてしまった‼
　……一応女の子が露出度の高い格好になっているのに、一枚も写真を撮られる気配がないのが、世間のイエローへの警戒ぶりの現れだな……。
　衣装を着る者。
　衣装を脱ぐ者。
　互いの信念をかけ、真っ向からぶつかり合う。
　いや、よく見ると一つだけ……左腕の装甲だけ、イエローは残してい

る！
「属性玉エレメーラオーブ――性転換属性トランスセクシャル!!」
　性転換属性トランスセクシャルの属性玉エレメーラオーブを発動させ、異世界での戦いで完成した――属性玉エレメーラオーブを同時発動できる新装備・属性玉多重変換機構エレメアデイツシヨンを起動させるイエロー。
「属性玉多重変換機構エレメアデイツシヨン――脚属性レッグ！　兎耳属性ラビット!!」
　そしてイエローが多重装そう塡てんしたのは、脚部強化に特化した二つの属性だった。
　右足首に収納部マウンターが現れ、手にしていたヴォルティックシューターを塡はめ込む。
　兎耳属性ラビットで跳躍力が強化された左足で地面を蹴り込み……ヴォルティックシューターから供給される電撃と、脚属性レッグで力が倍加された右足を振りかぶり、回し蹴りを放つ――!!
「ヴォルティックジャッジメント・クレセントッ!!」
　まさに蹴り技の名手であるイエローならではの切り札。円弧クレセントを描いた電撃脚は見事にテイルレッドの着ぐるみを焼き切り、中のシケーダギルディに命中した。
「ふ、ははははは……俺は負けておらぬぞ、テイルイエロー！　テイルレッドをお着替えさせた時の民衆の反応を思い出せ！　人は……脱ぐよりも、着たいのだあああああああああああ!!」
　真っ向勝負に敗れ、空高く跳ね飛ばされたシケーダギルディは、それでも己の信じる属性に希望を託し、大空で爆発した。
　接近戦……しかも、周囲に人が密集していて被害を出せない状況での、イエローの切り札か。必殺技の別形態アナザーバージヨンを咄とっ嗟さに思いつくあたりが、イエローらしい。
　問題は、別に今の技なら、脱がなくても撃てただろう、ということなのだが。

　ウェディングドレスから元のギアに戻ると、ギャラリーから歓声が巻き起こった。今回は俺、全く出番無しだったな。

　　　◇

　ギャラリーをドン引きさせたテイルブルーの戦いを、少年のように純粋な瞳ひとみで見つめていた人がいた。総そう二じと愛あい香かがブルーのカットを見て訪れたサークルで留守番をしていた外国人だ。
「やっぱり、テイルブルーはかっこいいなア」
　彼は閉場時間が近付く今も、余韻の残るコスプレスペースに立ち尽くしている。
　鍛えた筋肉で盛り上がるその肩を、背後から力強く叩たたいたのは、同じようにサングラスをかけたスキンヘッドの外国人だった。
「ＨＥＹデック、ひどいじゃないカ、留守番の途中でいなくなるなんテ」
「ソーリー。でもあの放送を聞いテ、館内に残る人はいないヨ」
　スキンヘッドの人が、ブルーのカットを描かいたサークル主らしい。
　しばしジョークじみた会話の応酬の後、スキンヘッドの人は感慨深げに呟いた。
「コミケはどうだっタ？　極秘来日の甲斐は合ったかイ？」
「最高サ。ツインテール好きな人にたくさん会えたし、何より、テイルブルーの戦いを間近で見れたんダ。いい感じに役作りをして、クランクインに備えられるヨ！」
　彼こそ、現在制作進行中のハリウッド版ツインテイルズ映画で、テイルブルーを演じるアクション俳優――デック・ニールソン、その人だった。

役作りの一環なのか、その地毛は、制作発表会見の時と比べて異常なほどの速さで伸びている。今も、ツインテールに結ぼうと思えばできるほどだ。役者魂かくあるべし。
ライブで見たブルーの暴虐は彼に、どんなインスピレーションを与えてしまったのだろうか──。

◇

「今日は新必殺技も披露しましたし、きっとイエローの人気も高まると思いますわ！」
人気を気にしているなら、どうしていつも脱いでしまうんだ……。
「……とうとう人前で暴れちゃった……せっかく貴重なブルーのファンに会えたのに……」
ファンの目を気にしてるなら、暴走前に着ぐるみ千本殴打ノックからして駄目だっただろ……。
イエローとブルー、今日の戦闘への感想は対称的だ。
大歓声に送られてコスプレスペースを飛び立ち、変身解除できる場所を探していた俺たちは──突然、強烈な力に引っ張られ、会場から少し離れたビルの屋上に着地した。
「何だ⁉」
異様な出来事に身構え、すぐさま戦闘態勢をとる。
身体からだの周囲を漂うこの黒い風に既視感を覚え、俺は咄とっ嗟さに屋上の入り口へと視線を移す。
そこで俺たちを待っていたのは、奇しくも、俺が安否を危き惧ぐしていた少女だった。
「久しぶりじゃな、テイルレッド」
「ダ、ダークグラスパー⁉」

　黒衣の少女は、潮風にマントをはためかせ、俺を真まっ直すぐに見つめてきた。

　ひとまず健在であることが確認できて安あん堵どすると同時に、違和感も覚える。そのたなびくマントは、半分から先が千ち切ぎれ飛んでしまったかのようにボロボロだ。

　マントだけではない。漆黒の鎧よろい・グラスギアは至る所がひび割れ、欠け落ち、戦いのダメージを物語る。それは彼女の横に控えているメガ・ネプチューンも同じで、輝くボディには無数の亀裂や破損箇所が見て取れた。フェニックスギルディとの戦いのダメージなのか……!?

「ここならば、人目を気にして気兼ねする必要はなかろう」

「戦うつもりか!?」

　ブルーがうんざりした表情で糾弾した。

「あんた、また部下と戦わせて疲ひ弊へいした時にかかってくるわけ!?　ワンパターンよ!!」

　ダークグラスパーはまるで、初めて戦ったあの時と同じように、殺気じみた苛いら立だちを発散させている。

「……変身解除せよ、テイルレッド」

「何!?」

　何者だ、正体を現せ──それもまた、俺が初めて彼女と対たい峙じした折に言われたことだ。

「素顔を！　素顔をわらわに見せるのじゃ！　貴様には、その義務がある!!」

　しかし、今日の彼女の言葉の真意は、あの時とは明らかに違う。

「貴様の正体が本当に男なのか、違うのか！　満天下に晒さらしてもらうぞ!!」

〝テイルレッドの正体〟を確信した、断罪の督とく責せきだった──。

キャラクター名鑑 024

戦闘員（アルティロイド）



DATA

身長：およそ145㎝～170㎝（個体差あり）
体重：およそ50㎏～70㎏（個体差あり）
属性力：特になし

属性力の絞り粕のような雑念を核に、無尽蔵に量産される戦闘員（せんとういん）。エレメリアンたちの指示に忠実に従い、戦闘補助から薄い本の買い出しまでこなす万能選手。惜しむらくはとてつもなく弱いことだが、敵に一片の情けもかけないブルーとは対照的に、敵でも気遣う優しさを持っている。一応、知能はさほどないはずなのだが……。基本は全身真っ黒のスタイルだが、貴の三葉（ノー・ブル・クラブ）の使役する赤のバリエーション、さらには謎に満ちた上位種も存在するとか。

第三章　またもや俺、ツインテールだってバレそう。

　俺が──テイルレッドが男なのか、そう問い質ただしてきたダークグラスパー。
　その強こわ張ばった表情は、軽い思いつきや冗談だとは到底思えない。
「もしかして、お前……」
　俺は思わず口くち籠ごもる。ダークグラスパーは、俺の正体が男だと見破ったフェニックスギルディと戦った。戦いの中で、あいつが俺の正体について口を滑らせたと考えるのが妥当だろう。
　一本筋で好感の持てるやつだった。人の秘密をペラペラ喋しゃべるようには見えなかったが……。
「……これを知っているのは今、わらわだけじゃ。お前の態度次第では、わらわのこの豊満な胸の内に秘めたままにしておこうというのじゃからな」
　……くっ……、すでに駆け引きは始まっているのか。
　ここで胸の大きさについて俺や愛あい香かがツッコもうものなら、取引は破談ということになりかねない。流すのが得策だろう。
「あんたさ、レッドが男言葉を使ってるから、妙な妄想に取り憑つかれたんじゃないの？」
　さすがだ。この衝撃の告白にも動揺を見せず、ブルーはさも怪け訝げんそうに演技をする。
「わらわはテイルレッドと話をしておるのじゃ！」
　邪魔をするなと、ブルーを睨にらみ付けるダークグラスパー。まるで何かに追い詰められているような、すごい気迫だ。
「お前も、テイルイエローも！　仮かり初そめにも女であろう！　好きで

もない男に裸を見られ、あまつさえキスまでしてしまったのかもしれぬのじゃぞ！　焦りもするわ！　わらわの今の心の内、察せぬほど女を捨ててはおるまい!!」
「っ……そ、それは……」
「ダークグラスパー、さん……」
　さすがにブルーも気け圧おされている。イエローはなおさらだ。
　俺を女だと思っていたからこそ見せてきたフレンドリーシップな痴ち女じょ行為の数々が、裏切られてしまったのだ。彼女の怒りはもっともだ。
　次第に彼女は糾弾ではなく、縋すがるように俺を見つめ始めた。
「テイルレッド……。嘘うそであろう？　違うというのなら、変身を解いてわらわを安心させてくれ……！」
　どうすればいいんだ。今ここで明かさなければ、ダークグラスパーは全てのエレメリアンに詳つまびらかにしてしまうかもしれない。テイルレッドの正体への疑念を。
「────そうか、自分からは明かせぬかっ！　卑劣にもわらわの唇くちびるを奪った貴様じゃ、その顔しかと検あらためてくれるぞ!!」
　拳こぶしを握り締め、敵てき愾がい心しんで眼め鏡がねとその奥の瞳ひとみを燃やすダークグラスパー。
「まあまあ、待ちいな。そんなぷんぷんしてたら、レッドちゃんも余計意固地になるやろ」
　横で黙っていたメガ・ネが、妙に計ったようなタイミングで会話に入ってきた。
「ここはちゃーんと、お姉さんの器を見したりいな。こんな可愛かわいい子になるっちゅうことは、元の僕ちゃんもきっと可愛い子やで？」
　……メガ・ネは、わざと話題を逸そらしたように感じる。
　事実、多少気が削そがれたように顔の険を解き、ダークグラスパーは

ふん、と鼻を鳴らす。
「おおかた前髪で目が隠れているような無個性な男じゃろう。特に取り柄もなく自分からは何もしないのに何故(なぜ)か学園の美少女にモテまくり、普段は気怠(けだる)げなのにベッドの上でだけはやたらアクティブなのは確実じゃな」
「それ、〝この物語の登場人物は一八歳以上です〟ってあえて念押しされるタイプの学生さんやんか。テイルレッドちゃんに変身するなら、元の男の子も小さな子供やろ」
　ダークグラスパーはメガ・ネの言葉に目をぱちくりとさせた。
「……はて、その通りじゃな。なぜわらわは、こやつの正体が年上の男などと……」
「イースナちゃん、えっちなゲームばっかりやっとるから、自分の中の男性像が固定されとんのとちゃうん？」
　ぐうの音も出ないのだろう、おかんの小言に反論はしなかった。
　この二人は、いつ見ても本当に親子みたいだ。暴走しがちなダークグラスパーのストッパーとしてメガ・ネが献身的に支える。いいパートナーなんだな……。
　俺はメガ・ネのフォローを聞いて、まだ打つ手があることを悟る。
　テイルレッドは、言わば二段階に変身をしているんだ。女体化と、子供化。
　フェニックスギルディも、やつから話を聞いたダークグラスパーも、俺の「変身前の容姿」までは特定できていない。せめてそこだけでも隠し通せれば、最悪こいつが男だと確信してしまっても、まだ何とかなるはずだ。
　だがそのためには、今この場を何としても乗り切らなくてはいけない。
　俺はブルーとイエローに視線で合図をした。

「この場を乗り切りさえすれば……などと思うておるやもしれぬが、今日ばかりはわらわも本気じゃぞ」

　そして、俺の考えを先読みしたように、ダークグラスパーが闘気を発散させていく。

「明かしたくないのならば構わぬ。テイルギアを維持できぬほどのダメージを与えれば、必ず素顔を現すはずじゃからな」

　ダークグラスパーは闇(やみ)の大(おお)鎌(がま)・ダークネスグレイブを手にし、俺たちに突きつけた。

　そうきたか……。本気だというのは偽りじゃないようだな。

　反射的にブルーとイエローもそれぞれウェイブランスとヴォルティックブラスターを手にして構え、一触即発の空気となってしまう。

「ダークグラスパー。裸を見たことは謝る」

　俺は二人を制して、素手のまま前に出た。

「謝るのならどうする、土下座でもするか！」

「額を地に擦(こす)りつけることなんて、何でもない。相手に誠意を伝えるためなら、躊躇(ためら)わずそうする。だが、今の俺はツインテールだ。ツインテールを地に擦りつけることはできない!!」

「むう、さすがじゃテイルレッド、誠意の中にも気高き誇り……くうう、それほどのツインテールへの愛を持つ者が男などと、どうしても信じられぬ！」

　ダークグラスパーは迷いを振り切るかの如く、千(ち)切(ぎ)れたマントを大(おお)仰(ぎょう)に翻(ひるがえ)した。

「ゆくぞメガ・ネ！　正体を確かめ、男だったなら粉々にする。もしも正体が男だというのが嘘(うそ)ならば、わらわをやきもきさせた罰じゃ、もう一回ちゅーする!!」

「この子悪ないやん!?」

「いいや悪いのはテイルレッドじゃ！　こんなに幼な可愛(かわい)いツイン

テールに化けられては、それは裸も見せるしキスもしてしまうわ！」
「痴女(ちじょ)やないか!!」
　揺るぎなき責任転嫁の前では、おかんの小言はあまりにも無力だった。
「戦う気がないのなら下がっておれメガ・ネ、わらわだけで三人とも倒してくれる!!」
「イースナちゃん！　はっきり言うけど、休まんとあかんて！　もうヘトヘトやろ!!」
「ええい、いつもいつも口うるさいやつめ、おかんか貴様!!」
　――――そうか、やけにメガ・ネが焦っていたのは……そういうことだったのか！
　俺は二人が言い争いをしている間に、三つ編み属性(トライブライド)を発動させた。
「属性玉(エレメーラオーブ)――――三つ編み属性(トライブライド)!!」
　イエローが何故(なぜ)か俺の眼前に身を躍らせ、「非常口」のプレートの絵をさらにアクティブにしたようなポーズで武装を脱衣(パージ)する。とろんだ目を向けてくるが、俺はいつも通り真顔で流すしかできなかった。
　俺とブルーの武器がイエローの合身巨大砲(ユナイトウエポン)に合体し、ツインテイルズの必殺武器が完成する。
「みんないくぞ、フュージョニックバスターだ！」
「あんたやっぱ、また脱がすつもり!?」
　フュージョニックバスターを以前ダークグラスパーに対して放った時、ギアを吹っ飛ばして結果的に裸にしてしまった。トゥアールによると、怪我(けが)をさせず武装を解除しようという一念が影響し、そんな効力になったという話だ。ブルーが使用をためらうのもわかる。
「あっちは本気で倒すつもりでかかってくるんだぞ!?　けど俺たちは、同じ人間相手に戦うなんてできない……これしかないだろ!!」

「え」

　ブルーが不思議そうにしているのが恐ろしいが、とにかく方法がこれしかないのは本当だ。今の彼女には、戦う力は残っていないはずだ。だからメガ・ネは、しきりに場を和ませようとし、戦いを回避させようとしていたのだ。

　傷付けずに武装解除をさせるという意味で、フュージョニックバスターは対ダークグラスパーにもっとも有効な武器だ。また彼女に嫌な思いをさせてしまうが躊躇ためらってはいられない。

「ファイヤー!!」

　俺は腹を括くくり、トリガーを引いた。螺ら旋せんを描いた光波が、一直線にダークグラスパーへと向かう。

　微動だにしないのでよもや真っ向から受け止め相そう殺さいするつもりなのかと思いきや、ダークグラスパーはフュージョニックバスターを見て弱々しく震ふるえていた。

「い、いやじゃ……また、男に裸を見られる……」

　か細いその言葉が聞こえた瞬間、俺は弾かれたようにグリップに力を込めていた。

「ッ……駄目だ!!」

　すでに発射されているバスターを力任せに持ち上げ、強引に射角を変える。

「イースナちゃん!!」

　両腕を広げ、メガ・ネがへたりこむダークグラスパーの前に身を躍らせた。彼女の銀色のつむじを掠かすめ、バスターの閃せん光こうは空の彼方へと消えていく。

　一瞬遅れてわざと外されたことを悟ったメガ・ネが、驚いたように俺を見つめていた。

「ちょっとレッド、何やってんのよ、こうするしかないんでしょ!?」

反動ででんぐり返しのように転んだブルーが、火のように抗議してくる。

「すまない……。自分で言い出しておいて何だけど、あんなに怯おびえている女の子に攻撃なんてできない！」

「だ、だ、だ、誰だれが怯えているじゃと!?　お前と目線の高さを合わせてやっただけじゃ!!」

メガ・ネはダークグラスパーの肩に手を置き、すまなそうに俺に目配せしてきた。

「イースナちゃん、やっぱ無理や、戦えへんて。今日は退ひこう。な」

「冗談ではない！　わらわはすでに一度、こやつら相手に背を見せておるのじゃぞ!!」

「ええ加減にしとき！　レッドちゃんの厚意に背ェ向ける方がかっこ悪いで!!」

「待て、わらわは──」

メガ・ネは戦闘機形態メガネウインガーに変形し、強引にダークグラスパーを搭乗させると、文句も聞かずに空の彼方へと飛び去っていった。

メガ・ネはああ言っていたが、本当にイースナの身を案じたのだろう。戦いのダメージが深刻で心身ともに弱っていたのも、俺たちの攻撃に怯えを見せた要因ではないだろうか。

「ど、どうしましょう……ご主人様の正体がバレてしまいそうですわ、はあ、はあ」

再着衣リバースせずにフュージョニックバスターを放置プレイし、イエローが今の布面積と同じように儚はかなげな不安を吐露する。

ああ、それは俺も同じさ……。

◇

　ツインテイルズとのコミケ決戦の戦況を報告するため、残存部隊の兵の一体、ライノセラギルディがビートルギルディの自室へと足を運んでいた。

　不意の戦闘、無念の最期ではあったが、シケーダギルディ、モスキートギルディの果断な戦いぶりに皆心打たれ、アルティメギル部隊の士気は高まる一方だ。

　技を見切り、たじろがせ、驚かせた。明らかに修行前にはなかった反応をテイルブルーは戦いで見せたのだ。ここが攻め時だとばかり、戦士たちは我われが我われがと出撃を懇願していた。

　今や各部隊の移動戦艦が合体し、かなりの大きさになった基地だが、その中の美の四心ビー・テイフル・ハートの区画において、ビートルギルディの部屋の広さは常軌を逸いっしていた。

　ライノセラギルディは入り口から中に入り、ざっと見渡す。

　広大な室内を、モケ、モケ、と忙しそうに戦闘員アルティロイドが段ボールを運んでいる。部屋には宅配便の中継ステーション内部のように長大なベルトコンベアが設置されていて、ビートルギルディの姿を見つけるのも一苦労だった。

「ビートルギルディ様。その天井を貫かんばかりに積み上げられた段ボールの山は一体……」

　自らも段ボールを左右により分けながら、ビートルギルディが答える。

「コミケの戦利品だ。今、逐次届いておる。テイルレッド本はもちろんのこと、各ジャンル余すことなく良品を買い募った故ゆえ、なかなかに作業が進まなくてな。部下の手を借りている」

　およそ出品されていた本全てを買ってきたのではないかという凄すさまじい数だ。

　そして開封された段ボールの中身が部屋に敷き詰められたベルトコン

ベアに流され、各ポイントに立つ戦闘員アルティロイドが、モケモケと仕分け作業を行っていく。
「もちろん、お前たち兵への褒ほう美びもある。今しばらく待つがよい」
　よく見ると、レーンは終着点でさらに枝型に分かれ、ダストシュート状のボックスに繋つながっている。そこにはそれぞれ、部下たちの名札が貼はってあった。
　部下たちの好みに合わせて買ってきた本を、仕分けし、ラップで個装し、再び包装する。
　この部屋は今、ビートルギルディ個人による通販倉庫と化しているのだ。
「――無論、会場に出征した二名の勇士の本は、丁重に手た向むける」
　散っていった部下へ、嘆きの言葉など無用。堂々たる戦いぶりへの賞賛は、薄い本を餞はなむけにされることこそ、戦士の本懐ではないか。
「っ……ビ、ビートルギルディ様……!!」
　ビートルギルディの心遣いに熱き涙を抑えきれず、咽むせび泣くライノセラギルディ。

　部屋の入り口で密かにその様子を窺うかがっていたダークグラスパーが、げんなりとしていた。
「何をやっとるのじゃあいつらは……」
　メガ・ネもその後ろから顔を覗のぞかせる。
「あの子ぉらイベントに参加したみたいやな」
　ダークグラスパーは腕組みをして思案に耽ふけり、
「……わらわも、フェニックスギルディを倒せていれば、参加できていたのじゃがな……」
「当日欠席になってもうたもんな」
　フェニックスギルディとの戦いは、痛み分けで有う耶や無む耶やのまま終

わってしまった。つまり、任務は失敗した。

　さらには真意を問い質ただそうと急襲したテイルレッドには、逆に情けをかけられる始末。

　メガ・ネに連れられこうして基地に戻ってきたところで、凱がい旋せんというわけにもいかない。いつものように自己主張もできず、ダークグラスパーは皆の前に姿を現せずにいたのだ。

　こんなボロボロの成りでは、精巧に武勇伝をでっちあげても、説得力はあるまい。

　逡巡するダークグラスパーの視線の先で、ライノセラギルディが小ぶりな段ボール箱を持ち上げた。名札には、モケっとした字で「ダークグラスパー様」と書かれている。

「おお、ダークグラスパー様への本もあるのですな、ビートルギルディ様！」

「うむ。想像以上に厳しき任務なのだろう、コミケまでにはお帰り遊ばれなんだからな。ダークグラスパー様はテイルレッドを性的な目で見ておられるゆえ、やや破は廉れん恥ちな本を集めた」

　仕事が忙しくコミケに行けない上司に代わり、薄い本を買っておく。実にできた部下だ。

「……かわいいやつめ。わらわの出しゅっ立たっに際し部下共々リアクションが薄かったのは、不器用なツンデレであったか」

「部下はんたちにやらしい目なのがバレてるて、ちょい反省した方がええで……」

　心遣いの真まっ直すぐさに感謝しつつもそう戒告したメガ・ネは、続けて問いかけた。

「イースナちゃん、テイルレッドちゃんのこと、みんなに教えるんか？」

　そう問われて迷いを見せながらも、ダークグラスパーはきゅっと唇くち

びるを噛かむ。
　部下たちのあの顔を見て、言えるはずもない。
「……ふん。別に兵たちに伝える必要などない。たとえ本当に正体が男だろうと、テイルレッドはこの世界で最強のツインテール属性を持つ者じゃ。ツインテール属性を奪われること……ツインテールを失うことこそが、あ奴やっにとっては何よりも耐え難き罰となろう」
「ほなら、テイルレッドちゃんのことはウチらだけの胸に仕舞っておくんやね？」
　嬉うれしそうに念を押してくるメガ・ネに背を向け、ダークグラスパーは誤ご魔ま化かすように話題を逸そらした。
「しかし憎きはテイルレッド……！　さてはあ奴め、あの可愛かわいさを餌えさに、多くの者を毒どく牙がにかけてきたに違いない……！　くぬう、許せぬ、あの妖女めが!!」
「そーかなぁ。どっちかっちゅーと、テイルレッドちゃんが周りの女の毒牙にかけられそうになってるように見えるんやけどなあ……イースナちゃん含めて」
　またしてもの正論に、ぐぬぬ、と唸うなり、ダークグラスパーは腕組みをして吐き捨てた。
「こればかりは……心の機微ばかりは、人間でなければわからぬようじゃな！」
　メガ・ネは一瞬、機能停止フリーズしたかのように、駆動音さえ立てずに立ち尽くす。
　出かかった言葉を呑のみ込み、メガ・ネは寂しそうに苦笑した。
「……せやなぁ」
　ダークグラスパーははっとして、何かを言いたげに唇を小さく震ふるわせる。
　バツが悪そうに逸らした瞳ひとみは、眼め鏡がねの光の奥に隠れ、感情を見

て取ることはできない。
　やりきれない沈黙が続いた後、ダークグラスパーは努めて明るい声を出した。
「ひ、ひとまず、部屋に戻ってグラスギアとお前のメンテナンスじゃ！　このボロボロの姿をお見せするわけにはいかぬからな！」
「お見せするって、まさか……」
「うむ。首領様の元へ向かう。お前はどうする、メガ・ネ」
　寂せき寞ばくに曇っていたメガ・ネの表情は、途端に硬質の凜り々りしさを取り戻した。
「もちろん、ウチもついてくで」
　のらりくらりと逃げ続けてはいられない。
　首領へ直じき々じきに任務失敗を報告する覚悟を、ダークグラスパーは決めたのだ。

◇

「世の中にはホント色々な属性があるのね……」
　本日の戦闘を終え、転送ゲートになったロッカーを潜くぐり抜けてツインテール部部室の中へと入ると、ブルーはしみじみと呟つぶやいた。
　俺とイエローも後に続き、頷うなずきながら変身解除する。
　今日の敵の属性は閉所属性リミットスペース……狭い場所が好きだと言い張るアメーバギルディというエレメリアンだった。
　ネットカフェに始まってカプセルホテル、果ては病院のＭＲＩなど、閉へい塞そく空間や設備に現れては、人々に閉所のよさを説いていた。
「閉所恐怖症なら聞いたことあるけど、逆にそれを好きってのは初耳だったな」
　もっとも、その布教活動はだいたいが不発だったようだ。プールに行

けば水着の属性の人がいるはず──というような感覚で、ＭＲＩに閉所好きの人が通うなんてことはまあ……そうそうないだろうからな。

「それに、ここ数日はかなりの頻ひん度どで現れていますわ。勢いづいてきているような気がするのです」

「ああ、そうだな」

　ダークグラスパーの襲撃を受けてから、数日が過ぎた。

　夏休みも終わりに差し掛かり始めた今、前半の停滞を取り戻そうとするかのように、アルティメギルの出現ペースも通常割り増しになっている。

　その一方で彼女は……ダークグラスパーは何の音おと沙さ汰たもない。

　疑念の段階であれ、部下たちにテイルレッドが男であると話した様子がないのも、出現するやつらの態度を見れば明らかだ。

　俺たちは疲れを隠しもせず、思い思いに部室の椅い子すに腰掛け、深く息をついた。

　部室内で待っていたトゥアールが駆け寄り、俺の肩を揉もんでくれながら尋ねた。

「総そう二じ様、お疲れのようですね」

「さすがに毎日だとな……。しかもここ最近の敵は、こっちの戦い方を研究し尽くしているし」

　愛あい香かは頭の後ろで手を組み、やれやれと溜ため息いきをつく。

「特にあたしのね……。何であんなにテイルブルーの研究ばっかしてんのよあいつら」

「いや完全に自業自得だろ今までどんなむごい戦い方してきたのか忘れたのか⁉」

　刺し突とつをことごとく躱かわすアメーバギルディに業を煮やし、足首を引っ掴つかんでビタンビタンと地面に叩たたきつけ始めるという暴挙に及ん

だブルー。
　これは入浴中のトゥアール相手に編み出した戦法なので、アルティメギルの連中のデータにあるはずもない。結局今日も、一方的な肉弾戦で撃破していた。
　この戦闘データもまた研究され、テイルブルー許すまじ、と気運が高まるのだろう。
　戦いの連鎖って、なんて虚むなしいんだ……。
　トゥアールは肩もみをしながら俺の背中にさらに密着してきた。
「さっきの閉所属性リミットスペースですけど、胎内回帰願望に近いのではないでしょうか？」
　いや、意図して密着しようとはしていないのだろうが、トゥアールほどスタイルがいいと、少し近寄っただけで、当たる……。
「何かそれ、聞いたことあるな……」
「うふふ、擬似的に実践されます？　一部分だけ」
「……一部分？　……って……どこ？」
「ナイストス総二様！　責任持って私が胎内に回帰ナビゲートしますね!!」
　指をわきわきさせ俺に近付くトゥアールに、愛あい香かは自分の頬ほおを叩きしゃきっとすると、
「輪りん廻ねに回帰しろアホおおおおおおおおおおおおお!!」
　俺の対とい面めんから一足飛びで長机二つを飛び越え、トゥアールに回し蹴りを見舞った。
「ほぶうっ!!」
　俺の背後にいるトゥアールに蹴りなどするものだから、俺にはもはやモロと言うのも烏お滸こがましいほど愛香のパンツ（スカイブルーの縞しま々しまだった）が間近に見えたのだが、さすがに報告はしないでおく。
　トゥアールは首を鳴らして立ち上がり、愛香を挑発した。
「ふふふ、まあ迎撃はされましたが、疲れているとツッコミも甘めです

ね。いよいよ私の我慢勝ちも近いと見えます」

　甘め⁉

　風圧だけで俺の横髪がバリカンで刈られたのかと思ったほど凄すさまじい蹴りだったのだが、トゥアールは直撃してこれだ。どんどん慣れていっている。継続は力なり、ってやつか。

「ともあれ、戦う皆さんのお疲れをケアするのも私の役目です。完成したこの新マシーンをツインテール部部室に置いておきますね」

　部室に戻ってきた時から、入り口付近の壁にある白い布がかかった人間大の大きな物が気になってはいたが──トゥアールはそれに歩み寄ると、一気に布を取り払った。

（……カプセル？）

　楕だ円えん状のカプセルが、足場に乗って斜めに固定されている。

　酸素カプセルか……あるいは映画で何度か見た、コールドスリープの機械のようでもある。

「ヒーリングマシーン、〝トゥアールヘルス〟。略してトゥアヘルです」

　健康にするという意味のヘルスなのだからネーミングに他意はないはずなのだが、何だ、この違和感は。

「中に入って一眠りすると、僅わずか数十分で身体からだはリフレッシュ！　あとこっそり追加操作でビンビンに……あ、何でもないです」

　何かを言いかけて口に手をやり、おほほほ、と誤ご魔ま化かすトゥアール。

「酸素カプセルを連想したんだけど、それも疲労回復効果があるっていうし……これはそれのすごいバージョンって考えればいいのか？」

「ええ、そんな感じです、総そう二じ様。溜たまった乳酸も消し飛ばして、血行もよくなり、しかもビンビ……あ、何でもないです」

　面白そうだから試させてもらおうと思ったが、俺より先に愛あい香かが

立ち上がった。
「最初にあたしが使うわ。いいでしょ、トゥアール」
「もちろん。私も最初は愛香さんに使って欲しいと思っていましたから」
「いいからおとなしく……えっ!?」
　トゥアールに笑顔でそう返され、言い出した愛香の方が驚いている。
　理由はすぐに判明した。
「全裸でないと使えませんので、着用しているものは全部脱いでから入ってくださいね」
　強烈な後出し説明に怒り、愛香はトゥアールの脇わき腹ばらを両手で摑つかんで猛烈にこすり始めた。
「そんないかがわしい機械を学まなび舎やに置くなあああああああああ!!」
　手を水平に広げたトゥアールが、竹とんぼのように天井に飛んでいく。
　……人間の脇腹をどれだけの勢いでこすればああなるんだ……!?
「ここまでお膳立てしてまだ脱がないんですか!?　いい加減にしてください！　察しのいい愛香さんなら『まったく、トゥアールのやつ、お節介な真似しちゃって』とかニヤリと笑って思い切りよくすっぽんぽんになるところでしょう!!」
　着地するやいなや、口を尖とがらせてツッコむトゥアール。
「お節介どころか巨大なお世話すぎることを察したのよバカ!!」
「あの、もしかしてお二人とも、まだあの約束にこだわっていらっしゃるのですか……？」
　慧え理り那なが不安げに尋ねると、トゥアールは当然です、と力強く答える。
「絶対にありえないと思ったから愛香さんも私との約束を受諾したんで

しょう!?　エレメリアンはテイルブルーのイラストを描かくという奇跡を成した！　ならば愛香さんはその奇跡に、全裸という全力で応えるべきです!!」

「ぐぬぬ……!!」

　約束を受けた手前、愛あい香かもこの件に関しては強く言い返せず、シケーダギルディたちに明かされてから今日まで、二人は何度もこんなやりとりをしてきた。

「全裸という全力、って何か語ご呂ろがいいですね。慧え理り那なさんに著作権委譲します！」

「あ、ありがとうございますわ……。確かに語呂がよくてかっこいいですわね。使うことはないと思いますが……」

　贈り物には律儀に応こたえてしまう慧理那。かっこよくても全裸は全裸だ。

　俺も、使うことがないことを切に願うぞ。マジで。

「……ともかく。こういうことは、後回しにすればするほどやりにくくなるものです！　勢いでババーッとやっちゃえばいいんです!!」

　そういうもんかもな。勢いでやっちゃえば、大して気にならないだろうし、愛香もこれからは約束に慎重になるだろう。

　ここに、男の俺さえいなければ。

「俺、外に出るから」

「いいえ総そう二じ様は外ではなく中にお願いします！　中に!!」

　トゥアールは鼻び孔こうを広げて俺に詰め寄った。何な故ぜ強調して言う……。

　愛香は柄にもなく肩を寄せ合うような仕草で、慧理那に近付いた。

「か、会長……よかったら一緒に脱がない？」

「津つ辺べさんに誘っていただくのは珍しいので嬉うれしいのですが、さすがにそれはちょっと……」

あまつさえ、愛香は慧理那まで巻き込もうとしている。

「えーい、もう!!」

愛香は観念したように大きく息をつき、先ほどのように頬ほおを叩たたくと、

「そーじ！　目瞑つぶってて!!」

勢いよく制服のシャツのボタンを外し始めた。

「うわっ、いきなり……ちょっと待て!!」

入り口の近くで愛香が脱ぎ始めたため、俺は部室の外に出るタイミングも逸いっしてしまった。愛香に背を向け、気をつけをして目を瞑る。

「こんなことでグジグジするなんて、あたしらしくないわ！　約束は守る!!」

「津辺さん、かっこいいですわ!!」

どうしよう、愛香が学校内で脱いだのを見たのが免罪符になって、ますますテイルイエローが脱ぐようになったら……。

「……って、ああっ、このツインテールは──!!」

廊下から見知ったツインテールの気配が近づいてくるのを感じ、俺は思わず目を開け、入り口の方を振り向いた。

「そーじ、見るなって言ったでしょ!!」

ちょうどスカートを脱いだところだった愛あい香かに怒鳴られる。パンツならさっき見えたんだけど……いやいや!!

「ごめんっ……でも！　今！」

軽くパニックになり、怒られたのもあって上う手まく言葉が出てこない。

「慧え理り那なさん、見ました？　今ちょっと口角が上がってたでしょう、言葉とは裏腹にエロいのが蛮族のいやらしいところです」

「確かに、ちょっと嬉しそうでしたわ……」

女子が何やらひそひそガールズトークをしているが、今はそれどころ

じゃないんだ！
「ああっ……」
　遅かった。ついに教えること叶（かな）わず、部室のドアが開けられてしまった。
「ごめんくださいまし」
　やっぱり……。俺は頭を抱える。感じたツインテールの気配通り、来客は理事長だった。
　まさか夏休みに、突然理事長がやってくるなんて、誰（だれ）が予想できよう。
　理事長の後ろには、桜（さくら）川（がわ）先生が「すまない」という表情で俺たちに目配せをしている。
　以前のように部室に行きたいと言われて、止めようとしてくれたが、無理だったのだろう。
「…………む？」
　理事長の目が、制服のブラウスを掻（か）き抱いて立ち尽くす、半裸の愛香に鋭く向けられる。



やばい。

部室で……男子の俺がいるそばで、女生徒が脱いでいる。こんな状況を目の当たりにして、理事長という責任ある立場の人が見逃すはずがない。

「これはどういうことか、説明なさい、慧（え）理（り）那（な）!!」

予想通り、部室内に厳しい叱（しっ）責（せき）が響き渡った。

しかもその矛（ほこ）先（さき）が生徒会長である慧理那の監督不行き届きとして向かいそうだったので、俺は慌てて理事長に駆け寄った。

「すみません理事長、違うんです！　これは……!!」

「婿（むこ）殿の前で、津（つ）辺（べ）さんが脱いでいて、貴女（あなた）が脱いでいない！　母は、その不（ふ）甲（が）斐（い）なさの訳を問うているのです!!」

「あうう、お母様……」

サイレント映画だったならば、その立ち姿、凜（りん）とした瞳（ひとみ）……たったそれだけで「娘を厳しく教育する立派な母」だと容易に想像できただろう。それほどの迫力が理事長にはある。

ただこの映画、アテレコが耳を疑うほど超翻訳だった。

「理事長、あたしは軽い罰ゲームでこうしてるだけで、そーじも会長も関係ないですから！」

愛（あい）香（か）もフォローに回るが、頑固一徹、古式ゆかしい大和（やまと）撫（なで）子（しこ）である理事長は、聞く耳を持ってくれなかった。

「将来を誓い合った婿殿の目の前で、他の女性が脱いでいるのです！　それを正妻たる貴女がただ座して見過ごすなど、不貞にも劣る裏切り！　到底看過できるものではありません!!」

慧理那に強引な縁組みをさせないためにも、俺は理事長の言う婚約を受け入れたふりをしているわけだが……そのせいで、こういう時には反論ができないのが難しい。

こうなったらもう、勢いで乗り切るしかない。

「理事長、何か俺たちに御用でしょうか!!」

　俺は理事長の視界を覆うように立ちはだかり、元気よく尋ねる。それが功を奏したのか、理事長は顔の険を解いて笑顔を向けてくれた。

「今日は用事で学園に来ていたものですから。また婿殿たちが部活をしているところを見たくなりましたの」

　理事長の視線を追うように振り向くと、慧理那が何(な)故(ぜ)かシャツのボタンに手をかけていてビビった。

「そういえば先日、慧理那から津(つ)辺(べ)さんのお誕生会のことを聞いて、婿殿のお家(うち)が喫茶店をなさっていると知りましたわ」

　この真夏に微(み)塵(じん)も暑さを感じさせず着物を着こなす理事長の上品な微笑(ほほえ)みに合わせ、彼女のツインテールもしゃなりしゃなりと高貴に揺れる。

　そんな理事長が子供のような悪(いた)戯(ずら)っぽい笑みを浮かべるのは、何か新鮮だった。

「わたくし、学生時代はよく喫茶店に通っていましたのよ。学生の折に親しかった先輩のご実家が、喫茶店を経営されていましたから」

　そうでしょうねえええええええええええええええ！

　急激に更なる窮(きゅう)地(ち)に立たされ、俺は白目を剝(む)きそうになった。

「まあ、そうだったんですの、お母様」

「ええ、先輩の淹(い)れてくださる珈(コー)琲(ヒー)が大好きでしたわ」

　緊迫した空気は晴れ、母(おや)娘(こ)でほのぼのと語り合っているが、俺の背中は冷や汗で豪雨になっている。

「ですからどうでしょう、婿(むこ)殿。わたくしもこの後予定はありませんので、よろしければこの機会に、婿殿のお家にお連れ頂きたいのですが」

「いやいやいやいやいや無理です、うちは！　珈琲は薄いし椅(い)子(す)は堅いし、客層も目茶苦茶特殊なんです!!　あとカンブリア紀に棲(せい)息(そく)し

てた巨大トンボとかが店内を飛んでます!!」

「え？　そーじの家の珈琲、すごくおいしいじゃない。あたしのお姉ちゃんもファンだし」

「わたくし、古代のトンボ見てみたいですわ！　一メートル近くありますのよね!?」

　愛(あい)香(か)がいつ〝末(み)春(はる)おばさん〟と口にしないかヒヤヒヤし、喉(のど)が砂漠のように渇いている。

　しかも俺の余計な一言で、慧(え)理(り)那(な)の好奇心も刺激してしまった。

　俺は必死に三人にアイコンタクトを送る。

　愛香はすぐにああ、と首(しゅ)肯(こう)してくれた。慧理那も一瞬遅れて気づいてくれたようで、トゥアールは……笑顔のままだが、多分察してくれたと思う。

　三人とも、唯一本当のことを説明した「喫茶店の客層」ゆえに、俺が理事長に来て欲しくないと思っている……と考えているだろう。

　違うんだ。喫茶店に行って母さんと対面させてしまったら、理事長はあるいはその特殊な客層をも遥(はる)かに超越した特殊なお方になるかも知れないんだ!!

「お母様！　わたくし、これから観(み)束(つか)君と大事な用事がありますので……またの機会に」

　慧理那が助け船を出してくれた。

　それを聞いた理事長が、花が咲いたように顔をほころばせる。もう少し説得が必要かと思ったが、理事長はいやにあっさりと引き下がってくれた。

「……あら、まあまあ。うふふ、そうでしたの。先ほどは怒鳴ってごめんなさいね、慧理那。母が野暮でしたわ。これからでしたのね」

　着物の袖(そで)で口(くち)許(もと)を隠し、妖(よう)艶(えん)な視線を俺に送りながら。

　桜(さくら)川(がわ)先生は今がチャンスだとばかり、理事長にやんわりと帰宅

を促した。
「さ、さあ、奥様。車までお送りします」
「ええ。まったく、そうならそうと言って欲しかったですわ、尊みこと」
「？　いえ、ですから私は部室では取り込み中だと――」
「ええ、そのようですわね。わたくしの洞察が未熟でしたわ」
　桜さくら川がわ先生に伴われた理事長を見送り、俺は抜け殻がらのようになって机に突っ伏した。
　俺たち今日、部室で変身解除したよな……。危なかった。
　理事長は以前も戦闘会議中という絶妙なタイミングで現れたが、よりによって今日はエレメリアンが現れた直後に部室を尋ねてくるなんて。
「……トゥアール、トゥアヘルに入っていいか……」
「はい、どうぞ、全裸で!!」
「いや、何とか着衣で……」
　服を脱ぐのもめんどいって、もう末期の疲労度だよな。
　とにかく理事長と母さんだけは、絶対に会わせるわけにはいかない!!
　――何で俺は、こんなにも俺だけの秘密を次から次に抱え込むんだ……！

　秘密……。
　その言葉が頭を過よぎった時、一人の少女の顔も脳裏に浮かんだ。
　ダークグラスパーも、部下の士気に関わる重大な秘密を自分だけで抱えているんだよな。
　あいつは……大丈夫かな……。

◇

　ツインテイルズやエレメリアンが出撃や移動に使用している、極彩色

の空間。
　ダークグラスパーとメガ・ネの二人が連れだって歩いているのは、その極彩色の空間を四角のトンネルに成形したような、神秘的な通路だった。
「久しぶりやな、首領はんにお会いするのも」
「……そもそも首領様は、幹部とすら滅多なことでは直接お会いになりはせぬからな」
　通常、アルティメギルの兵士たちは基地内に自室を設けるが、ダークグラスパーのように秘匿性を求められる立場の者は、自室に立ち入るまでの防御措置セキュリティとして、空間転送のゲートを入り口との間に挟んでいる。自分か、自分が許可した者しか入れないように。
　首領の「自室」はその防御措置が、さらに気が遠くなるほどの数で連なっているのだ。
　マルチバース・キューブ。
　アルティメギル首領が座する絶対の神域、〝首領の間〟が存在するのは、そう呼ばれる一種の多次元宇宙空間の最奥。無限の組み替えで作られる首領の間への「通路」は、コマが数億も数兆もある、スライディングブロックパズルのようなものだ。
　二度として同じ順路では辿たどり着けない。示された道順を外れれば、永久に多次元宇宙を彷徨さまようこととなる。アルティメギル首領には、謁えっ見けんするだけでも命を懸けねばならない。
　だが、今ダークグラスパーが懸念しているのは、別のことだった。
「今回ばかりは、厳しきお叱しかりを受けるであろうな……」
　ダークグラスパーも、叱しっ責せきは覚悟していた。
　フェニックスギルディの討伐任務を果たせなかったばかりか、四頂軍の一角・貴の三葉ノー・ブル・クラブをツインテイルズに完全撃破されてしまった。指揮官としての罪は重い。

「ウチも一緒に謝るから、な？」
　メガ・ネが肩を叩(たた)きながら慰める。
「馬(ば)鹿(か)者(もの)、不始末に対し一緒に頭を下げるなど、おかんか」
　いつもの憎まれ口にも、どこか切れがない。重い足取りのまま、謁(えっ)見(けん)を申し入れた際に指示された「今回の順路」を抜ける。
「逆にイースナちゃんが、何するにも保護者同伴必須のお子様ってことやな！」
「ふん、言うたな。ならば遠慮なく一緒に頭を下げてもらうとするか」
　少し余裕を取り戻し、ダークグラスパーは苦笑した。
　天井から風(ふ)呂(ろ)敷(しき)状に撓(たわ)んだ光が差し込み、ダークグラスパーとメガ・ネを覆い包んだ。

　薄暗くも、眩(まばゆ)い一面──その部屋は、神秘の結晶だった。
　アルティメギルの基地自体、現行文明とはかけ離れた不思議な素材、不思議な外観ではあるが、ここはその比ではない。
　宇宙をそのまま凝縮したような。
　星の輝きをあまさず散らしたような。
　神聖さと荘厳さとを兼ね備えた空間には何一つとして装飾品がないが、あまねく存在感を閉じこめるには、地平の先すら見えないこの広さにあってまだ足りない。
　そんな中に、たった一つ。入り口から敷かれた天の川のような煌(きら)びやかな通路の終端に、粒子状の壁に四方を囲まれた一角があった。神殿の玉座のように数段の階段が積まれ、その先には煌めくオーロラのようなカーテン──聖布(ヴェール)で厳(おごそ)かに守られている。

「ダークグラスパーよ。久方ぶりであるな」

「……首領、様……」

聖布ヴェール越しに、途方も無い威圧感が鎮座していた。

「余は、フェニックスギルディの完殺を命じた。無論、任務完了の報に参ったのであろう？」

男とも、女とも、人とも獣ともとれる数重にぶれた不可思議な声こわ音ねが、周囲を制圧した。

当然、戦いの結果を知っての言葉だろう。

ダークグラスパーは恭うやうやしく跪ひざまずき、臆おくすることなく言葉を返す。

「申し開きはいたしませぬ。反逆者、フェニックスギルディ……倒しても斃たおれず、殺しても死なず。想像以上の力の持ち主でありました」

「ほう」

「戦闘で後れを取ることはありませんでしたが、戦いを続けても永久に決着はつかないと判断。此度の戦いで得たデータを元に対策を取るため、やむを得ず一度撤退いたしました」

「……ふむ。フェニックスギルディの脅威――目の当たりにしたか」

言い終えた瞬間厳しき勅ちょく言げんをも覚悟していたダークグラスパーは、やけにあっさりと納得されたことに、拍子抜けさえ覚えた。標的の強さを知るが故ゆえの温情だろうか。

ほっとしかけたダークグラスパーの目の前に、厚い机形のチェス盤が浮かび上がった。

白黒のピースが初期位置に配置されている。

ピースはいずれも前後の向きの区別のつく上等な作りで、淡い光彩が上品な美を醸かもし出していた。

そして、そのチェス盤の上に、しなやかな指先が浮かび上がる。

首領の思念が半実体化した、人ともエレメリアンともとれる五指だった。

「ダークグラスパー……。美しき処刑人よ。そなたはこの女王(クィーン)だ」
　もったいぶった指の動きで、女王ではなく馬面のピースを示す首領。
　何か意味があるのだろう、とダークグラスパーは表情を崩さずに黙っていた。
「女王は座して黙する王(キング)に成り代わり、盤上を駆ける最強の戦士。余はそなたにその権限を与えてきた」
　馬面のピース・騎士(ナイト)を縦横無尽に動かし、盤上を舞わせる首領。
　まさに越権行為も甚だしい、王ゆえの采配だった。
「多くの兵士(ピーン)を、そなたに与えた」
　玄関の呼び鈴を連想する絶妙な言い間違えとともに、兵士(ポーン)が縦に四マスも直進した。
　初手の例外を含めても前方一～二マスしか動けないルールは、むろん適用されていない。
「そして、散っていった」
　しかし、相手の陣地に辿(たど)り着くや否(いな)や、兵士は盤上から姿を消していく。一応、今の状況を再現しているといえば……まあ、そう取れなくもなかった。強引にもほどがあるが。
　さらに、チェス盤の直上に、黒光りする石が出現し、首領の手はそれをそっと摘(つま)んだ。
「これが何かわかるか」
「……碁石、でありますか」
「左様」
　ダークグラスパーはまさかそんなことはと思いつつ適当に応(こた)えたのだが、本当に当たってしまったようだ。
「本来、チェスピースと碁石は決して争うことはできぬ。だが一度、同じ盤上に並んでしまえば……」
　手触りの良さそうな艶(つや)やかな黒の碁石が、女王のピースの右隣に

そっと置かれた。
「――――そういうことだ」
　リアクションをしていないのに、自信に満ち（あふ）れた声（こわ）音（ね）でどんどん話を先に進めていく。
　全くわからない。
　ただチェスピースと碁石が並んでいるようにしか見えない。何を暗示しているのかも読み取れない。
「碁石には、なりたくなかろう」
「アッハイ……」
　恐ろしい。
　出（しゅっ）立（たっ）前、イラスト修行を始めたビートルギルディたちへ、「人は未知のものに恐怖する」と教え伝えたのは他ならぬダークグラスパー自身だが、まさに今がそうではないか。
　神と問答をしているかのような難解さに、ダークグラスパーは心底恐怖した。
　首領の御（み）言（こと）を脳裏で反（はん）芻（すう）しても、まるで理解が及ばない。
　これが自分の部下だったならば、今の会話をテキストに起こすやいなや、赤ペンで大きく×（バツ）印をつけて「わかりづらいです。ちゃんと読者に伝わる日本語で」と、手厳しい校閲を下されるのは免（まぬが）れないだろう。
　だが、全てを超越した完全存在・アルティメギル首領がよもやまさか、ちょっとかっこつけたいお年（とし）頃（ごろ）の男子よろしく、ルールも碌（ろく）にわからないのにチェスをいじくっているだけとは考えられない。
　何かにつけて「チェックメイトだ」とか言いたがる、生温かい目で見守ってあげなければいけない思春期の少年少女ではないのだ。
　胸に手を当て、深呼吸。表情をきりっと引き締め、ダークグラスパーは首領の言葉に再び傾聴した。

「ダークグラスパーよ。数々の失態──赦ゆるすには余りある。次こそは……」
　首領の指は騎士ナイトを摘つまみ、王キングの前に置いた。
「チェックメイトだ」
「ごぶはっ」
　危うく吐血しそうになり、踏み堪こたえるダークグラスパー。
　騎士が王の真ん前では、惜しむらくも全くチェックメイトになっていない。
「何事か」
「は、はっ……フェニックスギルディとの戦いのダメージが今になって……」
　咄とっ嗟さの言い訳だが、あの戦いに比するダメージを今受けたような気がするのは確かだ。
　僅わずかに宙に浮いていたチェス盤が床に下ろされ、聖布ヴェール越しの首領の影が不気味に揺らめく。
「古代ツインテール文明……失われし栄光──」
　またもや首領は多くを語らず、意味ありげな独白の後、話を先に進めた。
「何な故ぜ、ツインテール属性が最強なのか。それはこの全能たる余でさえも与あずかり知るところではない……が、おおよその見当はつく」
　しかし今度ばかりはダークグラスパーも、言葉の断片から導き出されていく結論に固かた唾ずを呑のんだ。
「創生はじまりと破壊おわりを等しく司つかさどる神の采い配し……ツインテールとは、全ての属性力エレメーラの始みな祖もとたる存在ちからなのだ」
　ダークグラスパーもまた、難解なルビを伴った言葉の卓越した使い手だからこそ、戦せん慄りつを禁じえない。ここまで容易たやすく怪しい単語を撃ち出し続ける、首領の力を。

「ゆえに、最強のツインテール属性を手にする者は、全次元全世界を支配する、究極の神となるであろう」
　それが、アルティメギルの理念の真実。
　頑かたくなにツインテール属性を求めるのは、ただ一番強い力だからというだけではなかった。
　手にした者を神へと導く、全てを超越した属性力エレメーラ――ツインテール属性には、まだまだ秘められたなぞがいくつもあるのだ。
　……古代ツインテール文明とやらが、言ったっきり投げっぱなしなのが気になるが。
「――余が恐ろしいか、ダークグラスパーよ」
「……えっ!?」
　唐突に失望めいた渇いた言葉をかけられ、我に返ったダークグラスパーが顔を上げる。
「この秘話を耳にし、胸ときめかせるどころか、余への恐怖が勝っておるとは。ツインテールへの愛はそれまでであったか。貴様は眼め鏡がねだけか」
　すぐさま反論しようとするが、身体からだが震ふるえ、声が出ない。
「しょせん眼鏡など、男女問わず露出する顔面面積を狭め、雰囲気で誤ご魔ま化かすためかける勘違いおしゃれ遊具アイテム。それを愛し極めたところで、果てはこの体ていたらくというわけよな」
　眼鏡を愛する者が聞けば例外なく腰の刀を抜くであろう罵詈を受けても、ダークグラスパーは指一本動かせずにいた。
「―何故だ。こうまで言われ、何故余へ啖たん呵かを切り返さぬ。眼鏡を熱く語らぬのだ」
　首領の失望は、次第に憤怒へと変わってゆく。
「何故、眼鏡への侮辱を償つぐなわせんと怒り猛たけらぬ。余へ刃を向けぬのは何故だ……!!」

　闇の処刑人と恐れられていても、ダークグラスパーは……イースナは、まだ子供。

　初めて味わう、絶対的な存在からの敵意を前に、眼鏡という仮面が剝はがれかけているのだ。

「――――貴様へのチェックメイトは、今かけねばならぬか」

　最後通つう牒ちょうは、前触れもなく訪れた。

　薄布の向こうで、指を弾く音が聞こえる。直後、その聖布ヴェールのかけられた一角の横に極彩色のゲートが出現し、中から一体のエレメリアンが姿を現した。

「お前は――――」

　瑞みず々みずしい黒と紫で彩られた、引き締まった肉体。

　鋭い嘴くちばしを携えた、天を衝つくように屹きっ立りつした頭部。

　左右の手の甲から伸びる、三本二対の巨大なかぎ爪づめ。

　手首と肘ひじの間で異様な存在感を放つ、刃のように研ぎ澄まされた翼。

　現行生物には到底真似できぬ遥はるかなる雄々しさは――まさしく、古代の翼竜。

「アルティメギル四頂軍……死の二菱ダー・イノ・ランヴアス！　プテラギルディ!!」

「プテラギルディ、任務の遂行のため罷まかり越しました」

　フェニックスギルディの討伐任務は、彼ら死の二菱ダー・イノ・ランヴアスへと引き継がれるということか。

　任務を解かれることは、まだ納得できる。自分は一度失敗しているのだから。しかしダークグラスパーが知る死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの役割から考えて、この任務を引き継ぎ、任される理由が見えない。

「……お前たちの任務は、予期せぬ成長を遂げ、アルティメギルにとって脅威となったツインテールの戦士を打倒し、ツインテール属性を奪う

ことのはず。何な故ぜ裏切り者の処罰などを!?」
「裏切り者がもはや倒すべき脅威でしかないならば、我らの任務となりましょう」
　プテラギルディは静かに一礼を捧げた。

「――私が打倒の命を受けた裏切り者は、ダークグラスパー様。あなた様でございます」

　瞬間、巨大な輪が一瞬にしてダークグラスパーの眼前に迫っていた。
　属性力エレメーラを奪う悪魔の輪。使役者の力や用途に速度が左右されるのか、不意打ちを狙ねらった今はまさに弾丸のごとき速度で標的に迫っていた。
「イースナちゃん！」
　横からメガ・ネがダークグラスパーを突き飛ばし、迫ってきた輪が代わりに彼女の身体からだを潜くぐり抜けていった。
「……む……!?」
　しかしリングは属性力エレメーラを奪えず、メガ・ネは指の砲口をプテラギルディへと突きつけた。
「なるほど、いかにコアが眼鏡属性グラスの属性玉エレメーラオーブとはいえ、機械仕掛けにはさしもの『宇宙の紐ストリングセオリア』も用を為なさぬか」
　首領がいささか感心したように講説を披露する。
　アルティメギルの誰だれもこのリングにそんな大おお袈げ裟さ極まる名前がついていたことなど知らないので、プテラギルディは真顔で疑問符を浮かべ棒立ちしていた。
　チェス盤の時と同じく、再びダークグラスパーたちの眼前に首領の腕が具現化する。
「ならば、こうすればよい」

　首領の手の平から突如として放たれた強烈な衝撃波が、メガ・ネの全身を貫く。
「あぐっ……!!」
　目の前の光景に理解が追いつかないのか、ダークグラスパーは愕がく然ぜんと立ち尽くす。
「……な……!!」
　メガ・ネは為なす術すべ無く全身から火花を散らし、それでもダークグラスパーを守ろうと、彼女の前で両腕を広げる。
　しかし、程なく内側から爆発を起こし、その鋼鉄の身体からだをバラバラに飛散させた。
「イ、イースナ、ちゃ……逃げ……」
　床に転がった頭部から呼びかけたメガ・ネだったが、やがて瞳ひとみの光も途切れてしまった。
「メ……メガ・ネェ――――――――――――ッ！」
　ダークグラスパーの悲痛な叫びが、首領の間に響き渡る。
「……あ、あ……」
　いやいやをするように頭を振りながら、メガ・ネの頭部に手を伸ばすダークグラスパー。
「存外に脆もろい……。余は、軽く制圧するつもりで放ったのだがな」
　とぼけたような口調で薄ら笑う首領へと、烈火の如き怒りを解き放つ。
「……首領ッ……！　貴様あああああああああああああああああ!!」
「そうだ。怒りを我にぶつけよ。ダークグラスパー……元々お前は、アルティメギルを憎んでいたはず。しかし組織に馴な染じむにつれ牙きばは抜け……つまらぬ存在に成り下がった。だが、今はよいぞ。怒りに燃える瞳ひとみこそ、眼め鏡がねには映える。眼鏡の美しさを最大に引き出す!!」
「知ったような口を、貴様に眼鏡の何がわかる!!」

　首領は邪悪な笑みをこぼし、絶望的なまでに冷えついた声こわ音ねで告げた。
「わかるとも。余にわからぬ属性などない。ただ一つを除いてな」
　取るに足らない大口のはずだった。しかし、その言葉の奥に宿る底知れ無さに、ダークグラスパーはまさに果てなき大宇宙を幻視した。
　凍りつき、言い返すこともできずに後あと退ずさる。
「くっ……!!」
　ダークグラスパーはカオシックインフィニットの応用で空間に穴を穿うがち、バラバラになったメガ・ネの身体をその中へ待避させた。
　そして、メガ・ネの頭部だけを掻かき抱き、首領の間を駆け去って行く。
「よいのですか、首領様」
　早々に後を追おうとはせず、首領の意思を仰ぐプテラギルディ。
「ツインテールの戦士を手元に置くも一興と思ったが……所詮あやつでは、ツインテールの頂にはたどり着けぬ。眼鏡という不純物を持つ限りな」
　逃がさぬと思えば簡単な話だ。首領自ら通路を書き換え、退路を断てばよい。
　だが、そうする様子はなく、首領は聖布ヴェールの奥でその影を薄く震ふるわせた。
「人間が進化の過程で置き忘れ、薄れさせていった本能までをも全開し、ツインテールへの愛へと捧げられる崇高なる存在……余が求めているのは、そんな戦士よ」
　すでに興味を失ったのか。新たな反逆者の背にはもはや一いち瞥べつもくれず、首領は遥はるか深しん淵えんへと視線を向けた。
「理性と本能……二つの要素ツインテールを一つの心と結晶化させ戦うことのできる戦士……ツインテールのために人類を超越する者！　それぞまさ

しく、究極のツインテール!!」
　ミュージカルのクライマックスのように、首領の独白に熱がこもっていく。
「余は手にせねばならんのだ。唯一無二と輝く、究極のツインテール属性をな」
　適当に相(あい)槌(づち)を討つ暇(いとま)もなく語り続けられたが、そのおそらくはありがたいはずの金言の、なんと難解なことか。常人ならば録音した音声を九〇回ほどリピートして聞いて、ようやくおぼろげに全容を摑(つか)めるかどうか。直属軍の幹部・プテラギルディをしても、七九回はリピート再生が必要であろう。
「すぐには追わなくてよい。裏切り者に相応(ふさわ)しい恐怖を与えよ。眼(め)鏡(がね)のレンズに、徐々に罅(ひび)を入れてゆくようにな」
　プテラギルディは、己が周囲に浮かんでいた疑問符を粉(こな)微(み)塵(じん)に粉砕し、恭(うやうや)しく頭(こうべ)を垂れる。
「ははっ」
　ある程度の逃走を許し、微(かす)かに希望を与えてから摘(つ)み取ろうとしている。邪悪な思慮だ。
　聖布(ヴェール)に覆われた一角が、首領と共に霞(かすみ)のように溶けて消える。
　首領は再び形なき神秘として、何(いず)処(こ)かの世界へと消え去ったのだろう。

　プテラギルディは残されたチェス盤を片付けようとし、不意にその手を止めた。
　配置が無茶苦茶な首領のチェス盤では、偶然にも黒の王(キング)が白の騎士(ナイト)や僧正(ビショップ)に囲まれ、あたかも詰みの様相を呈している。
　本来、将棋のように倒した駒(こま)を自駒にできないチェスでは、同色の

ピースが正面から向き合うことはない。特に、前後の区別が施ほどこされたこのチェスピースではそれが明確だ。

　しかし黒の王キングにチェックメイトを掛けているのは――外ほかならぬ、黒の女王クィーンだった。

◇

　もしも逃走の最中に経路を書き換えられたならば、別空間に放ったメガ・ネの身体からだの反応を頼りに空間を移動する。そう算段していたが、ダークグラスパーはあっさりと元来た道を戻ることができた。
「はあ、はあ、メガ・ネ……待っておれ！　すぐに修理してやるからな!!」
　呼びかけても、メガ・ネの頭部から反応はない。抱き締めた腕に自然と力がこもる。
　長大な異空間を抜け、鬱うっ屈くっと木々茂る小高い丘が視界に入る。首領の間への入り口の異空間ゲートを開いた、侵略済みの異世界にある場所だ。
　追っ手の姿がないのを確認し、そこでようやく一息つく。
　今度はアルティメギル基地へのゲートを開こうとしたダークグラスパーだったが、手慣れた動作を何度繰り返しても、ゲートは一向に現れない。
「馬ば鹿かな……基地へのゲートが開かぬ！　何な故ぜじゃ!?」
　焦るダークグラスパーの背に、無慈悲な一言が投げかけられた。
「ダークグラスパー様。あなたはもう、アルティメギルの一員ではないのです。お覚悟を」
　振り向くとそこには、音もなく現れたプテラギルディの姿。

　ようやく首領の意図を理解した。一時の希望を持たせた後、こうして絶望を与える。安っぽいホラーのような悪趣味な真似を。
「待て……わかった、降伏する！　だが一度だけわらわの部屋に戻らせてくれ、メガ・ネを修理したい！　おかんのように口うるさいが……こやつは、わらわの大切な相棒なのじゃ!!」
「□□□□!!」
　プテラギルディが、一瞬微かすかな戸惑いを見せた。
　しかし、今の必死なダークグラスパーには気づく余地もない。メガ・ネの生命たる属性玉エレメーラオーブの核コアがある頭部を──それだけはなんとしてもと、胸に抱いて必死に守っている。
「どうかお許しを。首領様の命は絶対です」
　観念し、メガ・ネの頭部を抱き締めたままへたり込むダークグラスパー。
　自分が同じ追っ手の立場なら、命乞いなど聞くはずもない。
「……因果応報か……。処刑人が処刑されるとは皮肉よな……」
　プテラギルディが『宇宙の紐ストリングセオリア』を出現させ、ダークグラスパーへと照準を定める。
　己の破滅を悟った今、あのうるさい小言がひどく恋しい。失って初めてわかる親の愛。遅きに失しすぎたのだ。
　再び弾丸のように繰り出された宇宙の紐ストリングセオリアに、もう彼女は目を向けもしなかった。

「フェニックスチョ────────────ップ!!」

　天空から降り注いだ炎の一いち斬ざんが、属性力エレメーラ吸収のリングを真っ二つに断ち割った。
「むっ……貴様は!?」

　手刀を天に掲げ、現れた戦士は高らかに己が名を宣した。
「ポニーテールは世界を繋つなぐ架け橋！　太陽の戦士、フェニックスギルディ見参!!」
　再びエレメリアンの姿に戻ったフェニックスギルディが、へたりこむダークグラスパーの前に仁王立ちした。さすがのプテラデルディもこれには動揺し、
「自ら姿を現すとは……裏切り者でありながら何と剛胆な!!」
「おう、もう勝負はついてんだろうが。女をしつこく追い回すなんて、みっともねえ！　首領直属軍の幹部の名が泣くぜ、プテラギルディさんよ!!」
　何度も何度も復活しダークグラスパーに再戦を挑んだごく最近の過去など灼しゃく熱ねっの脳筋で忘却し、フェニックスギルディは手厳しくプテラギルディを断罪した。
「ぬう……！」
　そして銃剣武器・フェニックスラッシューターを出現させて構え、ぐうの音も出ずにいるプテラギルディの眼前へと銃口を突きつける。
「この場は退ひきな。それとも、俺様と一戦交まじえるか!?」
　首領直じき々じきの命を受けたのだ、当然受けて立つかと思いきや、何な故ぜかプテラギルディは未練も見せずに背を向け、土煙を噴き上げて飛び去っていった。
　ダークグラスパーは、予想だにしない救援者に疑いの眼まな差ざしを向ける。
「貴様、なぜわらわを助けた!!」
「……あんたはそう聞いたテイルレッドに何て返した？　ダークグラスパーさんよ」
「ぐっ……」
「ま、あえて言うなら侘わびってとこか。どうも俺様と関わったせい

で、あんたたちはやばいことになったらしい」

　武器を仕舞い、フェニックスギルディはダークグラスパーの前で胡座あぐらをかいた。

「悪ィ。あんたが強くて、戦っててわくわくしてな！　ホントなら、あのまま倒されたフリしてた方が、あんたも俺様も都合はよかったんだろうけどよ！」

　討伐者に対して、何とも上から目線な物言いだ。もちろん、こう言えば威勢よく反論してくるのを予想していたのだろうが、ダークグラスパーは俯うつむいてへたり込んだままだ。フェニックスギルディが想像している以上に、ショックを受けているようだった。

「こ……これで骨身に染みたろ。あの首領はな、普段は懐が深いようにしちゃあいるけどよ、いざ自分に害を及ぼす相手と思い込んだ途端、有無を言わせず処刑にかかってきやがる」

　それは、組織の長おさとして当然のこと。少なくとも今までのダークグラスパーならそんな戯たわ言ごと、歯し牙がにもかけなかっただろう。

「ああ、そうじゃな……あの俗物めが。かように矮わい小しょうな器で神になろうとは、片腹痛いわ」

　幾分かダークグラスパーの言葉に生気が戻ったのにほっとしたように、フェニックスギルディはよし、と腕組みで頷うなずき、立ち上がった。

「お前はこれからどうするつもりなのじゃ、フェニックスギルディ……」

「俺様は、テイルレッドに運命的なものを感じた。あんたとの戦いのおかげでその理わ由けに見当がついたんでな、ちょいと確かめに行ってくるぜ!!」

　途方に暮れたようなダークグラスパーと対称的に、フェニックスギルディは真まっ直すぐに前を見据えている。今や同じ追われの身の二人だ

が、実に対称的だ。
「ツインテイルズのとこに行きな。そのお母ちゃんロボ、修理してもらえよ。いるんだろ？　あいつらには、優秀な科学担当サポーターが」
　助言も虚むなしく無言で頭を垂れる少女に、フェニックスギルディは慌てて近寄る。
「おい、いくら何でもことここに来てあんたを尾つけようなんて思わないぜ？　安心しろよ！」
「違う！　今さらどの面つらを下げて、あやつらを頼れというのじゃ!!」
　その頭を、拳げん骨こつで軽く小突くフェニックスギルディ。
「あいたっ」
「どんな面でも頭でもいいから下げろよ。大切な人を助けるためだ、できるはずだぜ!!」
「っ……この……！　エレメリアンごときが、人間のような知った口を……!!」
　フェニックスギルディは翼を広げ、空に浮かび上がる。
「ごときとか思えるんならよ、きっちり借りは返してやんな！」
　去り際、胸のすくような一言を残し、炎の飛行機雲を残して消えていった。
　皮肉にも、その優しい拳骨は似ていた。疎うとみながらもどこか嬉うれしかった、彼女が「おかん」と呼ぶロボットの大きな手に。
　胸に抱いたメガ・ネの頭部に、ぎゅっと力を込める。
「……頭を下げて、地にツインテールをつければ、逆に怒るようなやつじゃぞ……」
　自じちょうするように皮肉を漏らすと、決意を湛たたえた瞳ひとみでダークグラスパーは立ち上がった。

◇

「お前は自分の真の魅力に気づいていない！　その腰のくびれの美しさたるや──」

　腰の何たるかを必死に説きながら、フラミンゴギルディは爆散した。

　戦いが終わり、俺たちは戦闘場となったスポーツジムの離れの駐車場を後にする。

　今日は、敵に対策されているブルーを助けようと、イエローが奮戦したのだが……俺が一生懸命屋外へと引き付けた瞬間、思う存分撃ちまくり、そして脱ぎまくっただけだった。

「……すみません。わたくし、また我を忘れてしまって……」

　イエローの場合、気を引き締めているのは俺も十二分にわかっているのだが、それなのに何故(なぜ)かいつも、はあはあしながら脱衣(パージ)していくのだ、気をつけるだけでは難しいのだろう。

「すぐに爆発が始まって、ギャラリーが寄ってこなかったのは幸いだったな。急いで帰ろう」

　転送ゲートのポイントに急いで向かう。人気(ひとけ)のない場所とはいえ、イエローの完全脱衣形態(フルブラストモード)で壮大な爆発音が響き渡ったのだ、程なく人が押し寄せてくるだろう。

「脱衣(パージ)するにしても、もう少しこうきりっとした表情でいれば、また印象も違うと思うぞ」

「裸は恥ずかしいですわ！　でも、ご主人様の前だと脱いでしまうのですわっ!!」

　これは……心理学界に新たな一頁(ページ)が刻まれるような珍しい症例だろうか。

　慧理那(えりな)の抱える二律背反を理解するには、まだ俺は未熟すぎる。

「あのダークグラスパーだって、ちゃんと裸が恥ずかしいっていう気持ちはあったんだからさ……」

「ダ、ダークグラスパーがどうかしたか……」

　ダークグラスパーの声が聞こえたので俺は振り向き、ダークグラスパーのことを見習った方がいい、と今し方話していたことを伝えようとした。

「だからさ、ダークグラスパーだって──」

　──目の前に、ダークグラスパーがいた。

「うおわあああああああああああまた来たのか!?」

　しかし、どうも様子がおかしい。身構える俺たちとは裏腹に彼女は力なく歩み寄ってくると、一本のハサミを俺の前に差し出した。

「何の真ま似ねよ!?」

　横から差し挟まれるブルーの問いには答えず、ダークグラスパーは俺を切なげに見た。

「……わ、わらわのツインテールを、お前にやる」

「何!?」

「お前がもらって一番嬉うれしいものは、これであろう……？」

　返答を待たず、ダークグラスパーは胸に垂れた房をすくい上げ、ハサミを近づけた。

　俺は身体からだがかっと熱くなり、弾かれるように彼女の手首を摑つかんでいた。

「ツインテールを切って、俺が喜ぶだと!?　馬ば鹿かを言うな！」

「テイルレッドよ、お前はツインテールが主食ではないのか……!?」

　なんて危険なすれ違いだ。この考えの違いは正さねば。

「ああ、確かにそうだ！　だけど、物理的にむしゃむしゃすると誰だれが言った!!」

「……主食なのは……すんなり認めるのねっ……」

　ブルーが手の平で顔を覆い、肩を震ふるわせている。

「じゃがわらわは……精一杯考えたが、これしか思いつかなんだ!!」

膝ひざをついて屈かがみ、俺と目線を合わせて懇願するダークグラスパー。

先ほどイエローに自制を促したが、少なくとも今までのダークグラスパーは、露出行為をしていてすら余裕があり、洒落しゃれた遊び心を忘れなかった。

それを思えば、彼女が今どれだけ切せっ羽ぱ詰まっているかがわかる。

「……ごめん、言い過ぎたよ。理由を聞かせてくれ」

俺はツインテールを差し出すまでに追い詰められた彼女の心境を慮おもんぱかってやれなかった自分を恥じ、彼女の顔を見た。

「……これじゃ」

ダークグラスパーの真横、何もない空間に黒い穴が出現し、半紙に墨汁が染み込むようにじわりと広がっていく。

その穴から現れ、宙に浮いているものを見て、俺は心臓を摑つかまれたような気分になった。

「こ、これは……まさかメガ・ネプチューンか!?　一体どうしてこんなことに!?」

生々しく、痛々しいその姿。

ブルーとイエローも何度も見た相手だ、動揺を隠せずにいる。

「わらわは反逆者の烙らく印いんを押された。そしてそのわらわを庇かばい、メガ・ネはこうなった……」

「何だって!?　反逆者……お前が!?」

にわかに信じがたい言葉に、俺たち三人は息を呑のんだ。

宙に浮くパーツの中から、見間違えようもないメガ・ネの頭部を手た繰ぐり寄せ、胸に抱くダークグラスパー。

「基地を追い出されたわらわには、もうこやつを治してやることができぬのじゃ……!!」

そして地面に膝ひざをつき、本来見下ろすはずの小さな俺を見上げ、哀

願した。
「わらわのことはどうでもよい！　ただどうか、メガ・ネを助けてくれ！　頼む!!」

キャラクター名鑑 025

メガネドン

MEGANEDON



DATA

性別:いちおう雌

身長:205㎝

体重:489kg

アイドル善沙闇子がファミリー層(主に子供)の人気を見込んでマスコットキャラとして考案した、眼鏡をかけた鮫のゆるキャラ。中身はメガ・ネ。ぼへーっとした癒やし系の図体でアクション俳優顔負けの動きを見せるギャップと相まって、人気は急上昇。関連グッズも好評で、知名度が善沙闇子を上回り始めるという本末転倒状態である。最初は渋々やっていたメガ・ネだが、この姿だと人前に出られるうえ、子供たちが喜んで寄ってきてくれることに内心喜んでいるようだ。

第四章　おかんと眼鏡。

　ブルーたちの反対を押し切って、俺は基地にダークグラスパーを連れ帰った。
　無謀なのは承知の上だ。けど、メガ・ネを壊されて悲嘆に暮れている彼女を、どうしても放っておけなかった。
　俺の勝手で基地に入れることはできないと思ったので、最初は家の方に案内しようとしたのだが、みんなに危険だと反対されてしまった。
　結局折れたトゥアールが、基地に入れる許可を出してくれたのだ。

「みんな、そろそろ警戒を解いてくれ、これじゃあ話もできない」
　コンソールルームのテーブルには、変身したままの俺とブルー、イエロー、トゥアールが、四人揃ってイースナの対面（といめん）に着いている。これではまるで、取り調べか尋問かだ。
　当然、俺たちの変身の解除をブルーは認めず、トゥアールも念のため仮面をつけている。
「別に、嘘（うそ）を言ってるとは思ってないわ。もしこいつがあたしたちを欺（あざむ）くためだけの理由で相棒をバラバラにするような奴（やつ）なら――あたしは容赦しないから」
　ビクリと震（ふる）えるダークグラスパー。
　釘を刺すにしてはドスが効きすぎているが……ブルーの本心なんだろう。
「ただ、こいつが本当に追われの身だったとしてよ。そんな奴を連れ込んで、この基地が敵に知られたらどうなると思う？」
　ブルーは腕を組み、二の腕を指でとんとんと叩（たた）きながらダークグラスパーを訝（いぶか）しげに見つめた。
「わ、わかっておる……。わらわも、お前たちに迷惑をかける気はな

い。ただ、トゥアールにメガ・ネを修理してほしいだけなのじゃ……」
　天てん上じょう天てん下げ唯ゆい我が独どく尊そん、いついかなる時でも傲ごう岸がん不ふそんな態度で胸を張っていたダークグラスパーも、今や見る影もなく消沈してしまっている。
「メガ・ネを作ったのはあなたでしょう。何な故ぜ、わざわざ私に？」
　仮面越しのトゥアールの言葉に寂せき寞ばくを漂わせ受け止め、ダークグラスパーは頭を振った。
「わらわがメガ・ネを作れたのは、神ゴッド眼め鏡がねの力だけではない。アルティメギル基地の超科学の粋を結集した、工房があってこそじゃ。わらわ一人では、修理はできぬ……」
　彼女の殊勝な態度にさすがのブルーも折れたのか、幾分か声こわ音ねを優しくして質問をした。
「あたしが言うのもなんだけどさ……エレメリアンって、命を奪うことをタブーにしてるようなフシがあるじゃない。いくら何でも、任務失敗だけであそこまでするの？」
「……普通のエレメリアンならそうじゃ。彼らは、元をたどれば人間の心から生まれた、人類の末まっ裔えいとも呼べる生命じゃ。ゆえに、人間への敬意は皆持っている。だが、例外があった……」
　テーブルの上で拳こぶしを握り、ダークグラスパーは憎々しげに呟つぶやいた。
「アルティメギル首領──全エレメリアンを統括する最強の存在。やつには、一切の慈悲がなかった」
「首領だって!?」
　思いもよらずもたらされた、アルティメギル首領の情報。俺は思わず立ち上がる。
「メガ・ネは、そいつにあんな目に……!!」
　直属の四頂軍のさらに先にいたはずの絶対統治者を、こんな形で知る

ことになるなんて。
「ダークグラスパー。その首領の場所に案内してくんない？　そいつを倒せば、戦いは終わるんでしょ？」
　同じく首領の存在を知り驚いたようだが、ブルーの思考はより過激だった。
「無理じゃ。首領の間への道は、無限大に等しい通パ路スを指定通りに繋つないで、初めて開かれる。わらわとて、もはやどうすればり着けるかはわからぬ」
「まあ、確かに裏切り者をぬけぬけ膝ひざ元もとに戻すはずはありませんしね……」
　仮面ツインテールの言葉に反論するように、ダークグラスパーは俺を見た。
「そもそも、今のお前たちでは首領には絶対に勝てぬ。メガ・ネとて、我らギア装着者とそん色しょくない戦闘力を持っていたのじゃぞ。それが、ただの一撃であの有様じゃ」
　重い空気がコンソールルームを包む。
　俺は意を決して立ち上がり、ブレスを胸の前にかざす。
「ちょっと！　待ちなさ──」
　ブルーには悪いが、絶対に止められると思い、何の前振りもなく俺は変身を解除した。
　トゥアールとイエローも、信じられないという風に固まっている。
「あ、あ……」
　赤い光が弾けた瞬間、眼前に男が立っているのを見て、ダークグラスパーは目を見開いた。
「俺が変身したままじゃ、この子だっていつまでも『ダークグラスパー』でいなくちゃならないだろ」
「…………わかった。わらわも腹を括くくろう」

　俺の意思を汲（く）んでくれたのか、ダークグラスパーも以前変身を見せた時と同じように、神眼鏡（ゴッドめがね）のブリッジに指で触れる。

　漆黒のグラスギアは粒子となり消えて失せ、群青（ぐんじょう）色のジャージを着た女の子が姿を現す。

　観念したように溜息（ためいき）をつき、ブルーが変身を解除する。イエローも続いて変身を解き、トゥアールも仮面を外した。

「みんなには話してなかったけど……そもそもダークグラスパーが俺の正体を疑うようになったのは、フェニックスギルディがテイルレッドの正体を男だと気づいていたからだ。やつには認識攪乱装置（イマジンチャフ）が一切効果がないみたいだった」

「あいつ、ポニーテール属性でしょ？　男の娘属性（ガールズボーイ）とかならともかく、どうして？　ツインテールと対になる属性だから？」

　愛香（あいか）の問いに遠慮がちに答えたのは、変身を解除したイースナだった。

「それは、私にもわかりません……でも、あいつは色々な意味で、エレメリアンを超越して、いました……」

　がらりと雰囲気の変わった彼女に、愛香と慧理那（えりな）は少なからず動揺しているようだ。二人は、変身前のイースナを見るのは初めてだからな。

　全員の視線を集め当惑しながらも、イースナはあらためて俺の顔を見つめてきた。

「やっぱり、テイルレッドは男の子、だったんですね……」

　しきりに見せろと言っていた俺の正体を目の当たりにしても、ほっとしたという様子はない。当然のことだが……。

「確かに私は、フェニックスギルディに、テイルレッドの正体を、聞きました。でも、あいつは結局倒せて、いません」

「それじゃ、そーじの正体を知ったエレメリアンが野放しってこと⁉」

　イースナの告白に、愛香は血相を変える。
「ただ、私にだけ特別教えた、とも言っていたので、他に告げ口はしないと、思います。今も、あいつは追われの身、ですし……」
　おかしな話だが、そう聞いて俺は少しほっとした。あいつのこと、気に入ってたからかな。
「イースナ。俺たちは何もしない。喋しゃべりたくないなら、アルティメギルのことも、これ以上何も喋らなくていい。ただ、ここにいるだけでいいから」
「そーじ!?」
　聞かなければいけないことがたくさんあるのは、俺もわかっている。
「……愛香。別に俺だってダークグラスパーのこれまでの行いを許したわけじゃない。ただ、この子の気持ちになって考えてみろ。組織の秘密を喋ったら……って考えれば怖いだろうし、何よりこの子は……大切な人を壊されてしまったんだ」
「……!!」
「どうした、イースナ？」
「……同じです。あなたも、メガ・ネを人と呼んでくれるんですね……」
　俺は何か特別なことを言ったつもりはないが……少しだけ、イースナの緊張が緩んだように見えた。
「総そう二じ様の言うとおりです。アルティメギル首領……こんなにも簡単に切り捨てるということは首領直属戦士の座を与えていても、イースナを初めから信用していなかったということです。無理に聞きだしても、得られる情報は知れています」
　トゥアールは神妙な面持ちでイースナの側そばまで歩いていくと、
「イースナ。あなたの神ゴッド眼め鏡がねを預からせてもらいます。いいですね」

「わ、わかりました……」
　神ゴッド眼め鏡がねをトゥアールに渡してすぐ、イースナはジャージのポケットから眼鏡ケースを取り出す。中から全く同じアンダーリムの眼鏡を取り出し、せかせかとかけ直した。そういえば以前、裸眼を見せるのは裸を見せるのと同じだ、というようなことを言っていたっけ。
「私も貴女あなたを許してはいませんが、私の科学で助けられる命があるのなら見捨てはしません。メガ・ネプチューンの修理は私に任せなさい、イースナ」
「い、いいんですか……！　あ、あの、メガ・ネの設計図、神ゴッド眼め鏡がねの中に、入ってます……」
　つーん、とそっぽを向くトゥアール。
　そうか。神ゴッド眼め鏡がねを預かったのは、戦闘力を没収するのではなく、メガ・ネの修理のためか。
　どうしてもイースナに対しては棘とげがあるトゥアールだが、やっぱりちゃんと気遣っていてくれたんだ。
　イースナが素顔のトゥアールと向き合うのは久しぶりのことだろう。本当の意味で〝再会〟した二人にの間には、どこか神聖な雰囲気が作られているように感じる。過去のわだかまりが解ければ、この二人はきっともっと仲良くなれると思う。

　場の空気も和らぎ、イースナとのこれからを話し合うべきだ———俺がそう思った矢先、コンソールルームの入り口から手を叩たたく音が聞こえた。
「よーし、それじゃあギスギスした雰囲気は終わりね！」
　母さんが—多分全部聞いていたに違いない—満足げな表情で部屋に入ってきた。
「ようこそ、ダークグラスパー……いいえ、イースナちゃん」

「あ、は、はい……」
　……邂(かい)逅(こう)してしまったか、出会ってはいけない二人が……。
「こ、この人は……？」
　あからさまに挙動不審になり、助けを求めるように俺に話しかけてくるイースナ。
「俺の母さんだ」
「テイルレッドの、おかあ、さん……」
　それまで震(ふる)えていたイースナが真顔になり、女幹部コスプレをした母さんをじっと見つめた。
　同じ漆黒の衣をまとう者。
　いわばそれは、三〇過ぎのダークグラスパー。妙齢のギア装着者だ。
　戦いの虚(むな)しさを知ったか、イースナ……。
　母さんはイースナの肩を叩(たた)くと、家に遊びに来た友達にジュースをふるまうような気軽さで、とんでもない提案をした。
「イースナちゃん、あなたしばらく、総(そう)ちゃんの部屋で生活しなさい」
「え」
　俺は間の抜けた声を出してしまったが、
「「「えええええええええええええええええええええええええええええええええ!?」」」
　愛(あい)香(か)とトゥアールと慧(え)理(り)那(な)はそれどころではなく、揃って絶叫した。
「……イースナちゃん。ちょっとだけ、おばさんたちだけで話がしたいの。外で待っていてもらっていい？」
「はい……」
　母さんに言われてイースナがコンソールルームの外に出ると、三人は血相を変えて一斉に母さんに詰め寄った。

「未み春はるおばさん、何言ってるんですか、あいつが変身してる時そーじ……テイルレッドにどんなことしたか、おばさんも見たでしょう！」

「わ、わたくしはもうあの方を信用していますけど、それでも観み束つか君一人では危険ですわ！」

「羨うらやましいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい!!」

　身振り手振りも加え訴える三人を、母さんは笑顔でかわしている。

「イースナが俺に何かすると思ってるのか？　神ゴッド眼め鏡がねは回収したじゃないか」

「グラスギアがなくったって、そーじに何かすることはできるのよ!!」

　イースナは、武術でも嗜たしなんでいたのか？　そんな風には見えなかったが。

　母さんはくすりと笑うと、普段見せることのない真剣な顔で三人を順に見やった。

「ねえ。あの子、メガ・ネっていうロボットをおかんって呼んでいたわよね？」

　愛香は記憶を手繰り寄せるように天井を振り仰ぎ、すぐに頷うなずいた。

「そういえば……」

　珍しくアルティメギルの中じゃ常識人のメガ・ネは、ツッコミが正論過ぎて逆に浮いていた。だからダークグラスパーはことあるごとに、彼女を「おかんか」なんて言っていた。

「家族関係まではわからないけど……あの子は本当にメガ・ネちゃんをお母さんだって思っていた気がするの。これは、私も子の母だからわかることよ」

　元の世界での家族は、今どうしているんだろう。トゥアールは高等部から親元を離れて上京するような感覚で異世界を渡ったのかもしれないが、イースナはまだそんな年齢ですらない。

　もしかして、アルティメギルという組織を居場所としていた理由は——。

「今あの子は、私たちには想像もできないほどに悲しみ、苦しんでいると思うの。だから、ちゃんとケアしてあげないと……。申し訳ないけれど、愛香ちゃんやトゥアールちゃんはまだまだあの子に対して棘とげがある。それももちろんわかるわよ？　でも、それじゃああの子は心を開いてくれないわ」

　愛あい香かは納得ができない、と反論する。

「おばさん、そーじはすぐ人を信用して……そこがいいとこだけど、でもだまされやすいんです、だから一人じゃ……!!」

　耳が痛いな。フォローはしてもらっても、確かに俺は腹の探り合いなんてできない人間だ。

「されることを厭いとわず人にぶつかっていける総そうちゃんだから、適任なのよ」

「母さん……」

　正直、俺も一人じゃ不安だ。されることより、女の子と二人で過ごすということが。

「それならなおさら！　わたくしだって、観み束つか君に救われた身……きっとイースナさんの力になれますわ!!」

　慧え理り那なが食い下がるも、母さんは頭を振る。

「慧理那ちゃんは大丈夫でも、テイルイエローは脱ぐでしょう？　きっとダークグラスパーの時を思いだしてしまうんじゃないかしら」

　一気に理由の信しん憑ぴょう性が下がりまくった気がするが、母さんの表情は変わらず真剣だ。

　気遣わせまいという配慮だろう、あえておどけるように母さんは言った。

「とにかく、本日からしばらく、イースナちゃん以外は総ちゃんの部屋

に立ち入り禁止！　これは、家主命令よ！」
　家主命令があるなら、もう少し早く、破壊行為禁止で適用してほしかった。
　この数か月で俺の部屋は、何度破壊と修復を繰り返したことか。
　自室が不死鳥フェニックスになりかけるなんて、人類で俺ぐらいだろう。
　母さんは俺の肩をそっと叩たたき、温かい微笑ほほえみで願いを託してくれた。
「総ちゃん、できるわよね？　あなたは、母さんの息子ですもの」
「え、ああ」
　適任と言われても、俺なんかが、傷ついた女の子のケアをできるんだろうか……。
「……ううん、違うわよね。イースナちゃんだってツインテールだもの、総ちゃんはツインテールの女の子を絶対に救ってあげられるわ」
「うん。申し訳ないけど、そっちの方が俺としてはしっくりくるかな」
　親の期待を背負うより、自分の好きなものを救うために。
　孝行息子とは言えないが、その方が俺らしい。
「それじゃあ、外で待ってるイースナちゃんを部屋に案内してあげて、総ちゃん」
「わかった！」
　部屋を出る前に振りかえると、しばらく放心したように黙っていたトゥアールが、虚うつろな目で母さんに縋すがり付いていた。
「あの、お義か母あ様、本当に他意はないんですよね!?　気のせいか、この家に初めて来た時私に向けてくださったものと同じ目をさっきイースナに向けていた気がするんですが、大丈夫ですよね!?」
「うふふ、考え過ぎよ、トゥアールちゃん」
「私の得意技は虚無の思考時間シークタイム＝ゼロというんですが、お義か母あ様は使えたりしませんよね!?」

「そんなかっこいい技、こんなおばさんが会得できるはずがないじゃない」

　中二の青春を駆け抜けた母ならば、むしろいともたやすく習得ラーニングできそうな気がするが……。というか今まで何度か、もはや母さんのステータス画面にその能力が記載されているとしか思えない局面を見た気もするが……とにかく、あたって砕けろだ。

　ダークグラスパー……イースナとは、いつかしっかり向かい合わなくちゃいけなかった。

　今日、その時が来たんだ。

◇

　それからすぐに、俺はイースナを連れて二階の自室へとやってきた。

　だが、さすがに状況は芳かんばしくない。イースナはよほど俺を警戒しているのか、テーブルの前に敷いたクッションもあえて避け、絨じゅう毯たんの上に体育座りして俯うつむいている。

　考えてみれば俺は、「イースナ」とはほんの二、三言しか話したことがなかった。

　ダークグラスパーの時のようにハイテンションならいくらでも間まが持つが、こんなにおとなしい女の子と二人きりでは、少しの沈黙にさえ頭が痛い。何を話したもんかな。

「そんなに怖がらないで。俺はもう、君を敵だって思ってないから」

　俺は努めて優しくと心掛け、彼女を怯おびえさせないよう話しかける。

「別に……あなたが怖いわけじゃ、ないです……」

　だが、イースナはちらりとこちらを向いただけで、すぐにまた俯いてしまった。

「は、恥ずかしくて、顔を、合わせられないんです……」

「どうしてだ？」
「だって、あなたは、私の裸を……見たから……」
「うっ」
　……そうだよな。女の子って、裸を見られれば恥ずかしいんだよな。
　見失いがちだけど、その大前提はしっかりと胸に刻んでおこう。
「……み、見たのはテイルレッドなんだからさ……ノーカウントにはできないかな？」
　往生際が悪いが、彼女の気分が少しでも和らげばと、俺はそんな提案をした。
「テイルレッドの時の、記憶は、全部あるんですか……？」
「そりゃ、人格まで変わるわけじゃないからな」
「や、やっぱり……。あ、あなたは……私の身体からだ、全部覚えてる……」
「誤解を招く言い方するなよ⁉」
　それっきり、イースナは俯うつむいて押し黙ってしまった。
　ますます会話のしづらい空気になってしまったぞ。
「ごめん。でも、俺の事情もわかってくれないか。だますつもりはないけど……男が変身して戦っているなんて、積極的に喧けん伝でんできないよ。俺や、家族や友達の生活だってあるんだ」
「それは、わかります。でも……わ、私に、キスをしました……」
　フュージョニックバスターでグラスギアを吹っ飛ばして、結果的に裸にしてしまったことは、俺にも非はある。武装を解除しようという一念が効力として影響したという話だからな。
　だけどその後のことは──
「あれはどっちかっていうとそっちが無理矢理……」
「無理矢理っ……⁉　わ、私に無理矢理何をするつもりなんですかっ……‼」

「話が進まないなっ⁉」
　母さんは俺一人の方がいいって言ってたけど、やっぱり愛あい香かやトゥアールにもいて欲しかったなあ。知り合いの女の子や女性はみんな活発な人ばかりだから、俺も気兼ねなく話せたけど……年とし頃ごろの内気な女の子とは、どう接していいかわからないよ。
　こうして見ているだけで、崩れてしまいそうなほどに儚はかなげな雰囲気だ。
「っ……そ、そんなに私を見て……まさか、服の下の裸を想像してるんですか……‼」
「だから別にそういうことに興味はないからっ！」
　そう言った途端、イースナは露骨に不審な目を俺に向けてきた。
「……興味、ない？　嘘うそ……」
「いや、ゼロって言ったら言い過ぎだろうけど、でも俺……」
　ちょっと目を離した隙すきにイースナは、ベッドの下に頭を突っ込んでいた。
「何してるんだ⁉」
「あ、あなたの性せい癖へきを知っておかないと……これから何をされるか……」
　俺は頑張って歩み寄ろうとしているのに、何でこうも警戒されるんだ⁉
（いや、見方を変えれば敵に囚とらわれの立場なんだ。どうしても不安にはなるか……）
　不安になるあまり、家や捜さがしをしてしまうのも無理からぬことというわけだ。
　…………さすがにこの納得の仕方は、俺でも厳しい。
「俺、ベッドの下に物なんて置いてないぞ」
　確か以前、トゥアールがベッドの下にエロ本がないのは不健康だと

言って、ベッドの下からはみ出して見えるくらいの数のエロ本を置いていったっけ。すぐ愛香に焚(ふん)書(しょ)されてたけど。

　納得がいかないとばかり、今度は本棚や勉強机の引き出しまでも捜し始めるイースナ。

「……ツインテールの女の子の写真ばっかり……漫画も……」

「い、いいだろ！　男なんだから、それくらい!!」

　表紙がツインテールの子の漫画本とか、実写なら写真集とか、あと、グラビアの女の子がツインテールだった時の週刊漫画も買って、取っておいたり。

　ささやかなものじゃないか。こんなものでも女の子は引いちゃうのか!?

「……裸じゃない、漫画と写真集……不健康……」

　聞き間違いでなければ、本来相反する単語が繋(つな)がっていたような。なんだかすごいジト目で見られて……もしかして引いてるんじゃなくて……落胆されてる？

　イースナは勉強机の上のノートパソコンを開き、勝手に起動した。

　スタート画面が表示されるや、すっきりとしたデスクトップを見て顔をしかめる。

「……何も、入ってない……ランチャーにまとめているわけでもないし、何、これ……」

「そりゃ、ネット見るくらいしか使わないから、ほとんどデフォだよ」

　あと、トゥアルフォンが万能過ぎて最近は起動すること自体少なくなってしまった。

「エ、エロゲーを持ってないなんて、大不健康、です……年(とし)頃(ごろ)の男の子が……」

　ん？　心なしか、表情に余裕が滲(にじ)み出てきたかな？

　イースナはいそいそと、床に置いていた自分のバッグの中からディス

クケースを取り出した。あたかも、カーコンポにセットするＣＤをダッシュボードから取り出すような自然さで。

　個装フィルムを開封するとケースからはカラフルなピクチャーレーベルがお目見えし、俯ふ瞰かんの構図で両手を広げた笑顔の女の子が描かかれていた。

　――エロゲーのディスクだ……。

「が、外出用なので、種類はあまりないけど、例えばこれなら、万人にお勧めできる……」

　うら若き女の子が、化粧道具などが入っているべきバッグにエロゲーのディスクを携帯しているとは。

　いや、これは俺の古くさい偏見なのかな。最近の女の子のバッグには、エロゲーのディスクが入っているのがトレンドなんだろうか……。流行はイマイチわからない。

　そもそもエロゲーって、万人にお勧めしていいものだったか。

「わかった。それじゃあお勧めされてみるよ」

　でも、せっかくイースナが歩み寄りを見せてくれたんだ。ここはいっちょう俺も全力で乗っかって、彼女を理解しないとな。

「……」

「……」

　痛いほどの静寂が、部屋を押し包む。

　普段はそんなに気にならない、俺のＰＣのドライブのディスク読み込み音さえもが異常に大きく聞こえるくらい、その他は無音だった。

　何だこれ。

　何で俺は、年下の女の子と二人で、神妙にエロゲーのインストール画面を見つめているんだ。

　座卓の上に持ってきたノートパソコンを前にして、俺とイースナは隣

り合って座り、見つめている。ちょっと距離が近くなったのはいいけど、どうすればいいんだこの沈黙。

　ＳＤキャラがちょこちょこと画面上を動き回り、インストール中にも飽きさせまいという配慮が見える。ただ、何か……デフォルメされているとはいえ、脱がしっこしてるんだよねこの女の子たち。

「読み込み速度、遅いですね……」

「中等部の時に買ってもらったものだから、そこそこ年季は入ってるかな。スペックに不満はないけど」

「でも、いいと、思います。インストール画面を眺めていると、心が高揚しますから……。戦に赴(おもむ)く前に、武士が、刀の手入れをするような、感じですよね……」

「そ、そうか。大事な作業なんだな……」

　そうしてイースナ言うところの厳かなインストールがようやく終わり、デフォルトから何も増えていなかったデスクトップに、初めて新規のアイコンが追加された。

　ワイヤレスのマウスを操作し、ゲームを起動する。

「待って！　そのままクリックしないで……！　ＯＰが、とってもいいの……!!」

「はい……」

　だんだんテンションが上がってきたイースナに、言われるがまま画面を見つめる俺。

「むっ……!?」

　カラフルな背景が踊り、ハイテンションな歌声が響くＯＰムービーで、俺はツインテールの女の子が切なげに目線を送ってきたのを見逃さなかった。

「そ、その子、可愛(かわい)い、でしょ……」

　バッチリ気づかれてしまったようで、イースナが誇らしげに話かけて

きた。
「ああ！　いいツインテールだ……躍動感にあふれている」
「その子が一番、エッチなんです……」
　……リアクションできない。
「聞いた話によると、エロゲーでも裸は控え目で、話の面白さが特に支持されてるタイトルとかもたくさんあるらしいじゃないか。お勧めするなら、これもそういうジャンルなんだろ？」
「違う。バリバリ抜きゲー」
「抜っ……!!」
　年としし頃ごろの女の子が臆おく面めんもなくとんでもない単語を口にし、めちゃくちゃ恥ずかしい。
　でも、せっかく元気が出てきたのに、ここで俺がそんな素振りを見せたらまた沈んじゃうだろうな……。
　覚悟を決めて、つき合おう！　可愛いツインテールの子がヒロインなんだ、ツインテールに集中すれば乗り越えられる!!
「ええと俺、さっきのＯＰムービーの女の子の話が見たいんだけど」
「……あのツインテールの子……？　全ヒロインと同時に関係を持たないと、攻略できないから……全員に、手を出して……」
　俺の発奮をあざ笑うかのように、悲劇的な事実が告げられた。
「よりによって隠しキャラかよ!?　あんなに素晴らしいツインテールなのに!?」
　可愛かわいらしい外観からは想像もできない、厳しい出現条件のキャラだった……。

　ゲームがスタートしてわずか数クリックで、画面は肌色が支配する世紀末になっていた。
『ひゃううう～また転んで服が脱げちゃったよう～』

　媚こび媚びなボイスで、人体構造を超越したイリュージョンを披露するヒロイン①。

「何で幼おさな馴な染じみを起こしに来て廊下で転んだだけで全裸になってるんだよこの子!?」

「こういう突き抜け加減が、とても面白い……。初心者にも、お勧め……」

　俺はとんでもない思い違いをしていたのではないか。

　これが初心者向け……!?　じゃあエロゲー上級者は、どれほど人智を超えた世界で生きているというんだ!?

「ちょっ……おい、全裸になるならまだしも、何かこれ、主人公とこのヒロイン……」

　メッセージウィンドウに「てへへっ」と照れ台詞せりふが表示されて安心したのも束の間、頬ほおを上気させたヒロインが起きがけの主人公に抱きついた。まだ始まって一分経たってないんだぞ。

　この超展開、慧ぇ理り那なの先輩の同人誌を思わせる。

「大丈夫、淫いん語ごはピー音で隠れてない、から……!!」

「なおさら困るんだけど!?　おいいつの間に外部スピーカーなんてつけた!?」

　トゥアールに改造されて防音対策が施ほどこされた部屋なのをいいことに、ボリュームをＭＡＸにするイースナ。

　ヒロインのあられもない喘あえぎ声が、容赦無く部屋に響き渡る。

「助けてくれ――――――――――――――――っ!!」

　ヒロインの喘ぎ声と俺の懇願は一体となって調和し、悲しい旋せん律りつを奏でたのだった。

◇

観み束つか家の地下にあるのは、ツインテイルズの秘密基地。悪を打ち砕き、人類の自由と平和を守るための砦とりでだ。

しかしその基地は今や、悪をも超越した凶悪な憎悪にむしばまれていた。

コンソールルームの空気が、煮えたぎったマグマのように歪ゆがんでいる。

小動物なら絶命は免まぬがれないドス黒い瘴しょう気きが、幾層にも重なって堆たい積せきしている。

トゥアールと愛あい香かは、渇きすぎて血走った瞳ひとみで、総そう二じの部屋が中継されているメインモニターを注視していた。

「未み春はるおばさん……本当に、本当に……そーじ一人で大丈夫なんですよね」

「愛香ちゃん。辛抱の時よ。しっかりと総そうちゃんを見守ってあげて。あの子は女の子をちゃんと救ってあげられる、自慢の息子よ」

「将軍……お義か母あ様！　自慢の息子さんの息子さんがピンチの予感なのですがっ!!」

トゥアールの切せっ羽ぱ詰まった訴えも、未春は大丈夫大丈夫、と楽観的に流す。

家主に制止されているからこそ、ギリギリで愛香は踏みとどまっている。

本来ハンマーで叩たたいても一ミリとして歪むことのないモニター周りのパネルを覆った特殊金属が、愛香が手をついている周辺だけが展性の限界を超えひしゃげ始めている。

行き場のない乙女の感情は、腕力以外の何に転化すればいいというのだ。

「転んで全裸になるくらい、私だってやろうと思えばできるのにっ……まさかゲームのヒロインに先を越されるなんて……」

　羨うらやましさのあまりよだれまで垂らしながら、トゥアールはかつて自分のファンだった少女が無意識に取り始めた抜け駆けに、忸じく怩じたる思いを懐いだく。
「愛香さんもさぞ悔しいでしょう！　あなたが十五年かかってできなかったことを、あのゲームのヒロインは容易たやすく成し遂げ、そしてイースナがそれを教えているんですから!!」
「ひと転びで全裸になるなんてゲームの存在以外にできるかああああああああああああ!!」
　フィクションの存在でなければ成しえないような超暴力の数々を人類史に刻んできた少女が、理不尽な常識を口に出し。そして今また、新たな暴力の歴史を刻む。
　トゥアールは「ひゃうう」とゲームヒロインと同じ声を出しながら、床を滑走していった。
　そんな淀よどんだ瘴しょう気きに毒されることはなかったが、慧え理り那なは男女が睦むつまじくエロゲーをやっているという光景を見て、今にも気絶しそうに頭を沸ふっ騰とうさせていた。
「トゥアールさんは以前、えろ本を買えば観み束つか君との距離が縮まると仰いました……。でもイースナさんは、たった数十分でわたくしの一歩も二歩も先に行ってしまいましたわっ!!」
「ええ、返す言葉もありません、慧理那さん……。イースナが迸ほとばしらせる、無意識の雌メス性せい……！　狙ねらわない情欲が、これほどまでたやすく総二様の防御を突破するとは……！　無意識系小悪魔のリルナちゃんを見て学んでいたはずなのに!!」
　床からブリッジで起き上がりながら、トゥアールは無念さを滲にじませた。
　未春が画面を見ながら、ぼそりと呟つぶやく。

「くっくっく……見込んだとおりあの子、下へ手たに男慣れしてないのにエロゲーとかに興味がある分、一気に進みそうね……」

　トゥアールが半泣きで未み春はるに詰め寄る。
「お義か母あ様!?　今、何か邪悪な顔をされていませんでした!?」
「ふふふ、まさか。総そうちゃん頑張って、って念を送っていたのよ」
「本当ですよね!?　私が不ふ甲が斐いないからもうイースナに総そう二じ様の童貞奪ってもらおうとか、そんなご無体なこと考えてませんよね!?」
「もちろんよトゥアールちゃん」
　当たり前のように盗撮をされながら、念は念でも邪念を送り込まれる息子の受難と、それを見守る少女たちの叫びは、突然の警報音で遮さえぎられた。
　本来ならば忌いむべきはずの、エレメリアン出現のアラートだ。
「やったあ！　エレメリアンが現れましたよ!!」
「本当!?　でかしたわエレメリアン!!」
「エレメリアンが現れたということは、当然観み束つか君も出撃しなければいけませんわよね!!」
　侵略者を歓迎するという、ヒーローにあるまじき暴言を吐き散らす少女たち。
　トゥアールは嬉き々きとして遥はるか上階にいる総二に通信した。
「総二様！　前まえ屈かがみになられているかもしれませんがエレメリアン出現です、出撃を！」
　盗撮されていることを容易たやすく看破できる失言だったにもかかわらず、総二は何の遠慮もなく立ち上がる。
『……前屈み？　何のことだ？　とりあえず、すぐそっちに行くよ』
「……」
　トゥアールはあらためて盗撮画面を確認する。

　イースナが繋つないだスピーカーから嬌きょう声せいが漏れ、ＰＣの画面には少女のあられもない痴ち態たいが。
　何より、肩が触れ合うような距離に女の子が座っていたのに。
「……あれでビクともしないって、総二様本当にすごいですよね……」
　喜びと同時に様々な不安を胸に懐いだき、少女たちは出撃の準備を始めた。

◇

「あの幼稚園だ」
　出撃した先。目的地の幼稚園の庭では、鳥のようなエレメリアンが女性に寄り添っていた。
　他の園児や先生は避難したのか、姿は見えない。
　属性力エレメーラを奪おうとせず、ただ身柄を確保している理由はなんだ？
「っ……まさか、俺たちと戦う時のための人質か……!?　みんな、隠れろ！　う闊かっに近づけないぞ！」
　状況を把握するのが先決だ。俺たちは、離れた歩道の塀に身を隠した。
　テイルギアで強化された聴覚に神経を集中する。
　エレメリアンの前では、幼い女の子が涙目で「ママを返して」と訴えている。
「やっぱり人質か！　……俺が正面から向かってあいつの注意を引くから、二人は──」
「待ってレッド、様子がおかしい」
　急せく気持ちをブルーの一言で鎮め、俺は再び様子を伺う。
「ママを返してようー!!」

「君はそのママに向かって、『ママなんていらない』と言ったではないか！　だから私が、君の代わりにこの人の子になるのだ!!」
　…………………………何だ、あいつは。マジで何者だ。
「私にはこんな嘴くちばしの鋭い子はいませんっ！」
「お母さん、今日、学校で百点取ったんだよ!!」
　ダンディな声で凄せい絶ぜつな嘘うそをつき、エレメリアンは頭を撫なでてほしいかのように女性の前で頭を垂れる。
「助けてー!!」
　いかに世間で見くびられているエレメリアンとはいえ、こんな身近に迫られては平静を保ってはいられないだろう、女性は助けを求めて声を上げる。
　いよいよ俺が飛び出そうとしたその時、女の子がエレメリアンに毅然として言い放った。
「うー……違うもん、私、ママのこと大好きだもん!!」
「っ……この子ったら!!」
　女性はエレメリアンを突き飛ばし、女の子に向かって走る。しっかりと抱き合う親子。
　その光景を見て、エレメリアンは満足げに微笑ほほえんだ。
「フッ……お呼びではないようだな。まったく、私もとんだピエロだ!!」
　そしてあえて悪し様にふるまい、和解した親子に背を向ける。
「本当にそうよアホがあああああああああああああああああ!!」
　耐えきれなくなったブルー怒りの剛脚が、その背に容赦無く浴びせられた。
「どおおっ……き、貴様ら……ツインテイルズとやらか！　いつの間に……！」
　軽くたたらを踏む程度で振り向き、勢揃いしている俺たちを見て驚く

エレメリアン。
「ブルーの全力の蹴りツッコミを背後から食らってビクともしない……幹部級のエレメリアンか!?」
「レッド……最近、あたしの初弾を敵の強さを計るバロメーターにしてない!?」
　一番わかりやすいから、仕方がないよな。
「しかし、この現場に到着する速さ……聞いていた以上に手強(てごわ)い奴(やっ)らと見た!!」
　鳥型のエレメリアンは俺たちを警戒するように構えた。
「そのツインテイルズの強さの見積もり、上限まで上げといた方が身のためよ？」
「平和を乱すエレメリアンがいる限り、わたくしたちは風のように駆けつけますわ」
『どこに現れようとこの私が必ずや見つけ出し、死の蛮族を送り込みます！』
　エレメリアンには聞こえないトゥアールの通信までセットで、三人は息ピッタリに勇ましい口上を並べる。みんな、敵が現れてくれてありがとうと言わんばかりに嬉々(きき)として見えたので不安だったが、どうやら俺の思い過ごしだったようだ。
「それにしても、幼稚園を狙うって……まさかあんた、病気(アレ)な属性じゃないでしょうね」
　目の前のエレメリアンは、ブルーの疑惑に心外だとばかりに名乗りを上げた。
「私の名はプテラギルディ。我が誇り高き母属性(マザー)を病気とは、ずいぶんではないか」
「あ、ご、ごめん……」
　紳士的に返され、ついブルーも謝ってしまっていた。すぐに我に返っ

て頭を振る。
「母属性マザーですって!?　では、あなたの目的は世のお母様がたということですの!?」
　イエローの焦燥は当然だ。
　理事長や俺の母さんだって、今みたいに狙われるかもしれないんだから。
　だが俺は、奇妙な違和感を感じていた。
　母属性マザー……お母さんを好きな属性……？　だけど、それって──
　プテラギルディが勢いよく腕の翼を広げ、俺の思考は中断された。翼長は四メートルはあろうか。まさに太古の昔、地球の空を支配していた翼竜。プテラノドンの化身だ。
「属性を奪う気はない。母属性マザーとは非常に育ちにくい属性……こうして地道に親子の絆きずなを確認してもらうことが、唯一の近道なのだ」
「近道ってお前、結局奪う気なんじゃねえかっ!!」
「さらばだ!!」
「あ、待て!!」
　プテラギルディは何の未練も見せず俺たちに背を向け、空高く飛び去っていった。
　育ちにくい属性……あいつは確かにそう言ったな。俺の疑問は、あながち的外れじゃないかもしれない。
「何だったのよ、あいつ……」
　食えない態度に毒気を抜かれたのか、ブルーも呆ぼう然ぜんと空を見上げていた。
　さっきの女の子が、嬉うれしそうに俺に駆け寄ってきた。
「テイルレッドだ～」
　俺は頭を撫なでてあげた。お母さんのために、勇気を振り絞った強い子だもんな。

「テイルイエローもいますわよ」
　イエローが自分を指で差してアピールするが、女の子はこの年で社交スマイルを披露し、やんわりとそれをかわす。
　退却したとばかり思い緩みきっていた俺は、トゥアールの通信で引き戻される。
『総二様、プテラギルディはそのまま隣町に移動して、また別の母娘を狙っています！』
「退却してないのか!?　みんな、行こう!!」
　ブルーに摑まって空を飛び、隣町にある駅に急行する。

「お前はロック歌手になるため家出するのであろう、母君は私が大切にする!!」
「違ぇーよ、家出はもうやめたよ！　かーちゃんを返せ!!」
「考え直してくれたのね!!」
　パンキッシュなメイクの女の子が、母親の肩を照れくさそうに抱き寄せている。
　……親子の年齢が違うだけで、目にした光景は先ほどの焼き直しだ。
　俺たちに気づくと、プテラギルディは今度は一目散に飛び立っていった。
「ああっ、また逃げてしまいますわ！」
　わかってはいても、見逃すことしかできない。
　超高速で移動しては、お母さんにいいことをして去って行く。
　いわば親孝行離脱戦法……孝行と逃走の二段構え。
　これではいたちごっこだ。
　なんで親子関係の修復の行脚をしているんだ、あいつは。こんな地道な活動で、本当に母属性を拡散できると思っているのだろうか。

「レッド、フォーラーチェインなら追いつけるんじゃないの!?」
「いや、二二秒しか変身していられないんだ。一瞬で追いつきでもしない限り、タイムリミットが来てまた逃げられてしまう……!!」
　ブルーにそう提案される前に、俺も同じことを考えていた。しかし、相手が戦う気がなく易やす々やすと逃げの一手を打つのでは、加速飛行に時間制限のある俺では対抗するのは難しい。
　衛星ですらギリギリ追えるだけの速度だ、見失ったら最後だぞ。

　このやりとりが、最初に訪れた幼稚園から数えて五度目になった時、あちら側も埒らちがあかないと思ったのだろう、ゲートの向こうに消えていった。
　今日のところは退却はしたが、厄介な相手だぞ。

　そしてその厄介なエレメリアンがよりによってイースナの因縁の相手であると、基地に戻った俺たちは知らされるのだった。

　　　◇

「一体全体どういうつもりだ！」
　アルティメギル基地内のビートルギルディの自室で、激情に任せた怒号が飛ぶ。
　頭頂の雄大な一本角による壁ドン――プテラギルディは頬ほおの薄皮一枚を隔へだてて壁に鋭い角を突き立てられ、ビートルギルディの詰問を受けていた。
「この世界、ダークグラスパー様の指揮の下、我ら美の四心ビー・テイフル・ハートが筆頭を任されてるのは知っていよう！　お前たち死の二菱ダー・イノ・ランヴァスが合流するという連絡は受けてはいないが!?」

　合流するどころか、何の連絡もなく勝手に出撃し、ツインテイルズと一戦交えたのだ。
　今、この世界の侵攻指揮を預かる隊長としては、到底見過ごせることではない。
「当然だ。死の二菱ダー・イノ・ランヴァアスの者は誰だれも動いてはおらぬ。この私を除いてはな」
「独断だというのか!?」
　プテラギルディは、その鋭い頭を力無く振った。壁に刺さった角に、嘴くちばしが当たる。
「そのダークグラスパー様が反逆者として任を解かれた。私は首領様より直じき々じきの命を受け、彼女を討つこととなった。先の出撃はその前ぜんしょうだ」
「何と……ダークグラスパー様が反逆!?　それはまことか!?」
　愕がく然ぜんとするビートルギルディ。プテラギルディは沈ちん鬱うつに頷うなずく。
「確かに、我らもダークグラスパー様と距離があったことは認める……だが！　何の理由もなく反逆を企てるような方ではないとも心得ている！　言え、事情を知っているのだろう!!」
「ビートルギルディよ。我ら、知らぬ仲ではない……非礼は詫びる。しかし、首領様の命は絶対。知己との友情よりも優先されるもの。それはわかっていよう」
「むう……」
　おいそれと話せはしない、という拒絶だ。
　それでもこうして、基地に赴おもむいてビートルギルディに一言伝えようとはしたのだ、決して誠意がないとは言えない。
　ビートルギルディの頭に浮かんでは消える、ダークグラスパーの笑顔。

アドレスを教えられながらも、自分からは一度も送ったことがない。おそらく大なり小なり差はあれ、それは美の四心(ビー・ティフル・ハート)の兵たち皆が同じであったことだろう。

それゆえ、積もり積もった鬱(うっ)憤(ぷん)が、爆発したとでもいうのか――!?

「貴様は……自身の属性と向き合えているか？　ビートルギルディよ」

不意に場違いな問いを投げかけられ、ビートルギルディは壁から角を離した。

「我が属性は母属性(マザー)――エレメリアンにはあってはならぬ属性だ」

「突然何を言うか」

見果てぬ思いに縋(すが)るように、そっと天を仰ぐプテラギルディ。

「母君にエロ本を発見していただき、机の上にそっと置いてもらう……それは一人前の男として認められた証(あかし)！　育ててもらった感謝(あふ)れる瞬間！　雛(ひな)鳥が巣立つ時!!」

どんなに激情をぶつけられても泰(たい)然(ぜん)自(じ)若(じゃく)としていたプテラギルディが初めて、そのしゃがれ声に感情を乗せた。

「私のエロ本は、いつまでベッドの下にある!?　いつ机の上に置いてもらえるというのだ!?」

「プテラギルディよ……」

ひとしきり思いを吐き連ね、プテラギルディは再び寧(ねい)静(せい)たる居住まいを直した。

そして、そんな悲痛な訴えなどなかったかのように、穏やかな声で独りごちる。

「それにしても、あのダークグラスパーという少女、思えば不幸なものだ。いったい何を思って、我らアルティメギルに肩入れなどしたのやら」

その言葉から憐(れん)憫(びん)でも嫌悪でもなく、何か別の……胸が締め付け

られるような感情を、ビートルギルディは感じていた。
「彼女にテイルレッドのような友達の一人でもいれば、また違った青春を送れていたであろうにな……」
　巣立てぬ雛鳥。雄々しき翼竜は自らをそう卑下した。
　その悲哀の奥にある感情を何というか、ビートルギルディは知っている。
「貴様、まさか」
「ビートルギルディよ。私のことを信じてくれるのならば――どうか、この一件、目を瞑つぶってくれ。悪いようにはせぬ。しばらくの間、部隊の出撃を控えてはくれぬか」
　修行を終えて部隊の士気が高まっている中、それは決して簡単な申し出ではないが……。
「……よかろう。だが、ダークグラスパー様の謀む反ほんの件も、部下たちには伏せる。構わぬな」
「うむ。私とて、貴様の部隊の士気を下げることは本意ではない」
　友が入り口まで去って行く数歩。その間に、ビートルギルディはどれだけ永くの逡しゅん巡じゅんを重ねたであろう。
「プテラギルディ!!」
　背の翼に声をかけ呼び止められ、プテラギルディは足を止めた。
「私も、己の属性を形にしたいと創作を極めた。それでも、エロ漫画は描けぬ。描いても、裸を羅列しただけの贋がん作さくになろう」
　仕分けが終わり片付けを待つだけのコミケの段ボール箱の山を背に、巨大な角が震ふるえる。
「わかるか……貴様だけではない。エレメリアンとはそういう存在だ。人の本質にどれだけ迫ろうと、人にはなれぬ。人の営いとなみ、人の心……求めても望んでも、思いを馳せるしかできぬ」
　ただ一体、その理を超越した存在を知らず、ビートルギルディは悲壮

な思いを吐露する。
「だが私は、そんな自分を憐あわれだとは思わぬ！　それでも私たちは、生きてゆくのだ!!」
「……わかっているさ」
　旧知の友の激励に寂しげな笑いを返し、プテラギルディは部屋を後にした──。

◇

　帰還して自室に戻った俺は、イースナに今日遭遇したエレメリアンについて話した。
　程なく、彼女の口から驚くべき情報がもたらされた。
「プテラギルディ……あいつが、首領から直じき々じきに命令されて来たエレメリアンだって!?」
「はい……。アルティメギル四頂軍の中でも、属性力エレメーラの奪取より、直接戦闘に特化した、死の二菱ダー・イノ・ランヴアスという部隊の、幹部です」
　口調はたどたどしいが、イースナの説明は的確だ。
　首領の次は、新たな四頂軍の名前まで出てくるとはな……。トゥアールは安心させるためか持っている情報は知れている、などとあえて素っ気なく言っていたが、実際イースナの知るアルティメギルの内部情報は、かなり重要で……だからこそ、今後の彼女の身が心配だ。
「でもあいつ、全然そんな風には見えなかったな。緊張感がないっていうか、初めから属性力エレメーラを奪う気なんてないっていうか」
「も、目的は……この世界に逃げた私を捜すこと、だと思います……。正規の増援者ではないのですから、属性力エレメーラの奪取に、精力的でないのは、むしろ当然です……」

「そういうことか……」
　一応筋の通った話に聞こえるが、ダークグラスパーをあぶり出すにしても行動が中途半端だ。他に目的がある可能性も考えておかないとな。

　テーブルの上のＰＣの画面には、俺が出撃する直前まで進めていた場面でメッセージが止まっている。可愛かわいいツインテールのヒロインを見るのを目的にプレイしてはいたが、この雰囲気ではとても続きはできない。
「……私、どこで間違っちゃったんでしょう……」
「え？」
　イースナはマウスの上にそっと手を重ね、撫なでるように指を彷徨さまよわせた。
「本当は私もこのエロゲーみたいに、普通の女の子の恋をしたかった……」
「転んで全裸になったり文化祭の看板を作ってるうちに全裸になったり宇宙ステーションから地球に落下して都合よく宇宙服だけが燃え尽きて全裸で登校中の男に激突したりするのが普通の女の子か⁉」
「すみません……わ、私、恋を、知らないんです……」
　まさかのマジレスに、俺も冷静さを取り戻した。
「あ、いや……ごめん。言いすぎたよ。別に、俺だって普通の恋がどういうものかって、胸を張って言えるほど知らないし……」
　ツッコミが空振りするというか、打っても響かないというか、これがきっと普通の反応なんだよな。俺も、この子と話す時には言葉に気をつけないと。
「私の、世界は……大人になるのが早いから、焦るんです……。だから私は、エロゲーで色々なことを、勉強して、いるんです……」
　釈明というほどのものでもないだろうが、イースナは自分がエロゲー

にはまっている背景を俺に説明し始めた。
「成人は一五歳、ですし……結婚も、男性は一四歳、女性は一二歳からできます。大半の女性が、一〇代のうちに結婚を、するから……恋人がいないまま二〇歳を迎えたら、死ぬほど、焦ると思います……。自ら進んで、痴ち女じょになるほどに……」
「へえ、そういう制度も世界によって違うのか。トゥアールは俺たちと同い年だって言ってたから、もう成人していることになるんだな」
　考えてみれば俺たちの住むこの地球せかいですら、国ごとに婚こん姻いんや成人の制度なんていくらでも差があるしな。
　そして俺は、今も着々と誕生日へのカウントダウンを刻んでいるであろうメイドさんの顔を思い浮かべた。そんな世界の存在を知った時、あの人はどんな反応をするだろうか……。
「――え、と……同い、年……」
　イースナはきょとんとして俺に向き直り、ずり落ちた眼め鏡がねのブリッジを指で上げた。
「総そう二じさん、一五歳、ですよね……」
「そうだけど、どうした？」
「あ、いえ、何でもありません……。たぶん、言ったら怒られるから……」
　やけに奥歯に物が挟まったような言い方をするが、追及するべきではないだろう。
　気を取り直し、イースナは続ける。
「ですから、私たちの世界では、ツインテールなんて本当に、誰だれもしていなかったんです……。わかりますよね」
「ああ。早く大人になることを切望される世界じゃ、よほどの覚悟がないとできないってことだもんな」
　ただでさえ子供っぽい髪型という認識の強いツインテールが、そんな

世界にとってどんな位置づけだったか、想像に難くない。
「そんな世界で、ツインテールを愛し、ツインテールの戦士となってアルティメギルと戦い続けたトゥアールさんを、私は、心から尊敬していました……」
　こんな話を聞いた後だと、トゥアールの凄さが際立つ。
　俺たちの世界だってツインテールはそれほど浸透していたものではなかったが、トゥアールの故郷では国どころか世界そのものがツインテールを子供っぽい髪型として快ここころよく思っていなかった。針の筵むしろの状態でトゥアールは決してくじけずツインテールへの愛を貫き通し、そして戦った。彼女の姿に心打たれ、ツインテールが広まっていったんだろう。

『きっと……止める術すべはあったはずなんです。何でもいい、私が世界の人たちがツインテールへの興味を失うように振る舞えばよかった』

　かつてのトゥアールの言葉を思い出す。
　できるはずがない。たとえそれが敵の作戦だったと、途中で気づいたとしても……そんな世界で芽吹いたツインテールを、自分の手で消し去るなど。
「前にも同じようなことを聞いたけど……どうして君は、そこまでトゥアールを好きだったのに、トゥアールがしてきたことと真逆のことをしようと思ったんだ？　眼め鏡がねだけが助かっても、ツインテール属性はアルティメギルに奪われてしまうんだぞ」
「……私はツインテールが、好きです……。でも、眼鏡はもっと好きです……。あれもこれも、なんて、無理です。一人の人間が一生をかけて、それでもやっと、たった一つの何かを守るのが、精一杯、なんです……」

「イースナ……」
　初めから自分の力の限界を悟った上で、それでも最善の、できることを精一杯やり遂げる。
　その思いは、異世界の双子姫の純粋な願いと重なった。
　いや、あるいは全異世界のツインテールの戦士たちも、きっとそれは同じなんだろう。
　仲間のいる俺たちだから、ほんの少しの我(わ)が儘(まま)が許されているだけなんだ。
　けど、イースナはその子たちと決定的に違う。
「……長話が過ぎましたね。エロゲーの、続きをしましょう……」
　この雰囲気でエロゲーをやりましょうと言えるこの子は、何て強いんだろう。態度のか細さとは裏腹に、芯(しん)の通った子だ。
　確かにこの子はこの子なりの信念を持って戦ってきた。それを否定するのは、俺自身にも勇気と責任が伴うことだ。でも……言わなくちゃいけない。
「現実を見るんだ、イースナ。大好きな眼鏡を、ただ逃げるための道具にしちゃいけない！」
「わ、私は逃げてなんて……」
　マウスを握る彼女の手の上から、俺は自分の手を重ねる。
「っ……!!」
　手を振り解(ほど)いて離れようとするイースナの肩を、俺はもう一方の手で力任せに押さえた。
「君は異世界の眼鏡を守ってきたんじゃない。眼鏡をフィルターにして、見たくない世界(げんじつ)を見ないようにしてきただけなんだ!!」
「じゃあ、どうすれば、いいんですか……！　あなたたちツインテイルズが、他の世界を守ってくれるんですか……!?　失われていく眼鏡を、助けてくれるん、ですか……!?　自分の世界で、手一杯じゃないです

か……!!」

　その通りだ。それに関しては、無力な俺では反論は許されないのかもしれない。だけど。

「わ、私は、アルティメギルに属していたから、多くの世界の、眼鏡(めがね)だけを、眼鏡だけでも、救うことができたんです……!!」

「……確かに事実だけを見れば、君は本来他の全てと共に失われるはずだった眼鏡を救った。けどその一方で、全てが失われた世界に、眼鏡だけを置き去りにしたとも言える」

　心の輝きを失った人々は、灰色の世界で茫洋(ぼうよう)と輝く眼鏡を、果たしてどのように見ていたのだろう。

「あ、あなたに、何がわかるんですか……！」

「わかるさ！　ツインテールをフィルターにして世界を見たって、世界は何も変わらない!!」

「いやそれはそうでしょう」

　たどたどしいしゃべり方の彼女にしては珍しく、鋭い反論が返ってきた。俺はイースナの手に重ねた自分の手に力を込める。

「けど！　ツインテールそのものを見つめれば、世界はこんなにも素晴らしく、美しいんだ」

「ツインテール、そのものを……」

「別に、眼鏡だけでも救おうとすることは間違っちゃいない。誰(だれ)しも、自分が一番好きなもののためだからこそ頑張れるんだ。お前が間違っていたのは──それを、侵略者の側から行ったことだ。それは救いじゃない」



　とうとう年下のこの子にも、お前、と距離を縮めてしまった。
　イースナは伏し目になりながら、俺の話に耳を傾けている。
「トゥアールは守れなかった世界のために、他の世界を守ろうとしてくれた。イースナ、お前はそんなトゥアールに憧あこがれてずっと見ていたのに……トゥアールの心を深く傷付けた相手に荷担し、他の全てを犠牲にしてでも眼め鏡がねを守るという自分に酔った。前に進むトゥアールと、立ち止まったお前じゃ、出発点が同じでも今はもう遠く離れてしまっているんだ」
　この子にだって、痛いほどわかっていたはずだ。俺は結局、この子が目を背そむけていた事実を、無理矢理に眼鏡を外して裸眼越しに突きつけただけなんだ。
「……そう、ですね……。トゥアールさんはとっくに、手を伸ばしても届かない存在になってた……。ずっとあの人に追いつきたいと思っていたのに、私は……あの人が愛していたツインテールを奪う組織に、荷担した……。私に、ツインテールでいる資格はありません……!!」
　自責の念からか、ツインテールを結ぶリボンを外そうとしたイースナの手を──俺はそっと握り締めた。
「え、な、何を……」
「お前がここでツインテールを解ほどいて、何になる!?　アルティメギルに奪われたツインテールが救われるのか!?」
　慧え理り那なもそうだった。何な故ぜ女の子は……ツインテールを解ほどくことに断罪を求めるのか。
　俺は何度でも、それを止めてみせる!!
「資格がないだけなんです、ツインテールを見捨てた私は、トゥアールさんと同じようにツインテールでなくなるべきなんです!!」
　俺の身体からだが紅あかい閃せん光こうに包まれる。イースナは呆ぼう然ぜんと、姿が変わっていく俺を見つめていた。

　テイルレッドに変身した俺は、自分のツインテールをイースナに握らせる。

「……トゥアールのツインテールは、ここにある。俺が受け継いだ。どこにもなくなっちゃいない」

「テイル、レッド……」

「イースナ……お前のそのツインテールだって、トゥアールが守ったものじゃないか。言ってしまえば、お前のツインテールは、トゥアールの世界で最後まで守り抜けたツインテールなんだ。トゥアールのことを思うなら尚更、軽々しくやめるなんて言っちゃいけない」

「ひゃっ……」

　俺がイースナのツインテールを指で掬すくうと、彼女は小さく声を上げた。

「……こんな、きれいなツインテールなんだから」

「わ、わたしのツインテール、きれい……？」

　ぎこちない笑顔で、イースナがそう尋ねる。

「きれいだよ」

　俺は脊せき髄ずい反射でそう即答していた。

　そういえばイースナのツインテール、出会った頃より、少し伸びてるな……。ただ、普段から髪のケアをちゃんとしていないようなのが心配だ。

　トゥアールは、自分の世界の属性が━━ツインテールが、全て奪われたと言った。

　でも、考えてみれば、トゥアール以外にもツインテールは残っていたんじゃないか。

「……もちろん、単に別の髪型にしたくなった、っていうならそれは本人の自由だ。ただ、ツインテールを免罪符にするな。ツインテールをやめても、誰だれもお前を慰めちゃくれない。お前自身も含めてな」

しゅんとしてしまったイースナ。熱くなりすぎた自分に反省し、俺は努めて優しく声をかけた。
「……ごめんな。偉そうに説教なんかして。ただ、これからは自分で考えて欲しい。メガ・ネが直った後、この世界でどうするのか。もちろん、アルティメギルに戻るなんて言わないとは思うけど……俺は、もうお前は戦わない方がいいと思う」
「はい、そのつもりです……。私、仇あだ討うち、するつもりも、そんな気力も、もうありませんから……」
「そうか……安心したよ。そういうことなら、追っ手が来ても君は俺が守るから」
「あ、あなたが……」
少し、ほっとした。これからの道を示してくれたのだから、どう罪を償っていくかはこの子がすること。これでようやく、俺はこの子を守るために戦える。
「あの」
変身を解除して男の姿に戻ると、イースナが上目遣いで質問をしてきた。
「名前、教えて下さい。テイルレッドではなく、あなたの……」
そうか。名前を名乗るっていう、一番初めにすべきことをできていなかったんだ。
「総そう二じ。観み束つか総二だ。母さんの言う通り、行く当てが決まるまでここにいていいから、しばらく休んだ方がいいよ」
いつからか、イースナはやけに小刻みに、俺の方をちらちらと見てくるようになった。
しばらく黙ってその視線を受け止めていると、イースナは急にこくん、と頷うなずいた。
「……うん、いいかも……」

「ど、どうした？」
「顔はまあまあ、だし……背は……もう少し欲しいけど、まだ伸びると思う、し……」
　イースナの眼鏡が光り、値踏みするような視線が、俺の身体を丹念に走査してゆく。
　さすがに意図を尋ねようとしたところで、

「そ、総二さん……私のこと、好き、なんでしょ……」
「…………………………………………………………………………え!?」
　イースナの発言の意図をたっぷり熟考したが、それでもそんな間の抜けた声しか俺は出せなかった。
　好きって……あれだよな。そういう意味の好き、だよな。
「君は……テイルレッドのことが好きなんだよな？」
「でも、私もそろそろ、彼氏とかいてもいいと思うし、あなたあたりなら、ちょうど、いいかなって……」
　えへへ、という可愛い笑顔というよりは、ぐふふ、という含みのある笑いを浮かべるイースナ。
「あ、あなたを、彼氏にしてあげます……」
　成層圏レベルの上から目線で、ドヤ顔のイースナがそう提案してきた。
　恋を知らないと言っていたが、この距離感のすっ飛ばしぶりはそれ以上ではないか。
　桜川先生といい、ロエルといい、イースナといい、何で「ちょうど良さそう」みたいな曖昧な理由で女の人に告白や求婚をされるんだ、俺は……。
　簡潔に、かつ柔らかく断る言葉を探す。この子自身が俺を好きって言ったわけじゃないんだ、その場のノリでこんなこと決めても後悔する

だけだと思うし。
「そうだ、アイドル！　善いい沙すな闇あん子こっていうアイドル活動があるんだから、そういうスキャンダルになりそうなことは控えた方が……」
「ほんの少し、男性の影をちらつかせるのも、テクニックですし……」
「……君より小さいとあるお姫様も、同じこと言ってたよ……」
　全異世界の女性の共通認識なのか、このテクニックとやらは。
「こ、この前もらったアドレス、あれ、総そう二じさんのでいいんですよね……」
「そりゃ、テイルレッドと俺で使い分けてなんて――うおっ⁉」
　喋しゃべっている途中でトゥアルフォンが震ふるえたのでポケットから出すと、メールアイコンには「30」という一週間丸々放置したかのような数字が未読数として刻まれていた。
　恐る恐る確認すると、全て送信元は、見慣れないアドレス。
「わ、私のアドレスです……。初めてもらったメールに返信できてなかった、から……」
「一通でいいだろ一通で⁉」
「たくさん届いた方が、嬉うれしい……」
　イースナは気にした風もなく、半笑いで俺を見つめてきた。背中を冷たいものが伝う。
　そのままイースナは俺から一瞬も目を離さずに、手元の携帯を何か操作している。
　まだ二九通が未読であるにもかかわらず再びメールが着信し、俺は一番上のメールを開いた。
　本文にＵＲＬが貼はってあり、下にＩＤとパスワードが記載されている。
　少文字数でゆるく近況などを呟つぶやく例のツールのＵＲＬであることは分かったが、

「……ＳＯＪＩ-ＡＣＥＮＡ……って、何、これ……」

「総そう二じさんの、アカウント……私のは、ＡＣＥＮＡ-ＳＯＪＩ……」

　恐る恐るアクセスする。アイコンが俺の顔写真で……背景は、ここだ！　俺の部屋だ!!

　携帯で写真を撮って、それをアイコンにして、アカウントまで取得してきたんだ！　俺と話している、ほんの僅わずかの時間で!!

「か、鍵付きだから……私の、呟つぶやきは、総二さんしか見れないし……総二さんの、呟きも、私しか見れない……」

「それ、何が面白いんだ!?」

　もはやこのツールを使ってする意味が何も見いだせない。俺はやんわりと次善策を提案する。

「愛あい香かとか、みんなもこっちからフォローして、複数人と会話できるようにすれば……」

「……………………駄目。総二さんの、パスワードは、私が管理しているから……誰だれかをフォローしたら、私がブロックする……」

　運営理念に反する閉じた世界に絶望しながら、俺はそっとトゥアルフォンを仕舞った。

「ちょ、ちょーっと待っててくれないか!?」

「…………トゥアールさん、たちのところに行く、んですか……」

　ぎょろっと目を見開いて、テーブルに手をつき身を乗り出すイースナ。

「私を、置い……て……」

　イースナの瞳ひとみの深さに、ぞくっとする。

　まるで真上から見た、渦うず潮しおのようだ。無数の円が瞳どう孔こうという中心に向かって集束していくような底知れなさが、網もう膜まくを通して脳のう髄ずいに染み入る。

　彼女の瞳を見つめているだけで、奈落の底に落ちていく感覚が足元に

広がるようだ。
「す、少し呟き合うか……せっかくアカウント作ってもらったんだしな……」
「はい……」
　機嫌は直ったが……部屋を出るタイミングも、出すタイミングも逸いっしてしまった……。

◇

　地下基地で様子を窺うかがっている少女たちは、総二とは違った意味で焦りまくっていた。
「えええええええええええええええええええさんざんストーキングしてた私の次はテイルレッドで、そっからさらに流れるように総二様に移行ですか!?　何なんですかあの前代未聞のビッチは！」
　日頃暴力には訴えないトゥアールですら、モニター越しに見る総二の部屋の光景に歯がゆさを隠せず、操作パネルをべしべしと叩たたいている。
「せっかく総二様がまた私の喜ぶことを言ってくださって、胸も下腹部もきゅんきゅんしてたというのに……あの小娘!!」
　託したツインテールのことを語られ、トゥアールが幸せを感じたのはほんの束の間だった。
「依存症でストーカー気質で嫉しっ妬と深くてメンヘラの処女ってもう、めんどくさい女のロイヤルストレートフラッシュじゃないですか!!」
「案の定やりたい放題じゃないあいつ！　あんたの元カノでしょ、何とかしなさいよ!!」
　遣やり場のない感情を持て余し、愛あい香かが手近なラックを圧壊させている。

「意地でも私とイースナとの過去を捏ねっ造ぞうしたいんですね愛香さんは！　残念ながら私の身体からだは清いままです!!」

　愛香はうーん、と考え込み、

「でもさすがにあそこまで変な子だったらそーじもドン引きするだろうし……ほっといても大丈夫かな。エッチなゲームが趣味って、さすがにね……」

「愛香さんみたいな超絶めんどくさい女と十年以上正気を保ったまま友達でいられた総二様が、今さらエロゲー好き程度でドン引きすると思いますか！　そのうち順応されるに決まっています！　むしろ総二様は、めんどくさい女ほど助けようとしてしまうんです!!」

　超絶めんどくさい女から放たれたシンプルな打撃を浴び、トゥアールが宙を舞う。

「そ、それにしても、イースナさん、どうしてあんなに急激に観み束つか君に……」

　画面を見て激しく狼ろう狽ばいしながら、慧え理り那なが呟つぶやく。

「慧理那さんにも覚えがあるでしょう。熱く詰め寄られるとキュンってしちゃうんですよ！」

「ふえぇっ……！　わ、わたくしも、めんどうな女の子だったのでしょうか……!!」

　自分が総そう二じにツインテール部部室で情熱的に説得された時のことを思い出したのか、慧理那は真まっ赤かになった頬ほおを手で押さえる。

「加えて、今まで母親代わりだったメガ・ネプチューンに依存していた分、彼女がいなくなったことで一気に男に依存するようになってしまったんですよ!!」

　トゥアールは白衣を翻ひるがえし、拳こぶしを握り締める。

「何としてもメガ・ネを修理してあの小娘を総二様から引き剝はがさなければ!!」

　画面を見ると、総二が部屋からイースナを連れ出そうとしているところだった。
　そろそろいい時間だ、空き部屋に案内して今日はもう寝ようとしているのだろう。
　かなり苦戦しているようだったが。
「愛香さん、私は今晩徹夜でメガ・ネを修理します。イースナが何をしでかすかわかりません。総二様の部屋の監視、頼みましたよ」
「わかったわ、任せて。毎晩いつもやっていることじゃない」
　愛香とトゥアールは不敵に微笑ほほえみ合い、ガッチリと握手を交わす。
　それを見て、二人に交ざりたそうにおろおろする慧理那。
　しかし、修羅の仲間入りを果たすには、彼女は今一つ、倫理に縛られている感がある。
　結局、保護者に陳情するという常識的な手段に出た。
「未み春はるさん、観み束つか君が危ないですわ、あのままでいいんですの!?」
　モニターの映像と合わせてこの場の三人のやりとりを楽しんでいた未春だったが、慧え理り那なの焦燥あふれる問いには落ちついて返した。
「ええ、いいと思うわ。少なくともイースナちゃんは、取り繕つくろわない本当の自分を総ちゃんに見せるようになったじゃない。たった少しの時間で、すごい前進だわ」
　愛あい香かとトゥアール、慧理那は、揃って未春を見つめた。
「ここにいる女の子、みんながそうだったでしょう？　総ちゃんが心を開いてくれたおかげで、飾らない生き方ができるようになった。多分、私もね」
　総そう二じが初めてテイルレッドに変身した日、母として自分の内に秘めた思いを吐露した未春。

　息子への思いあふれる優しい笑顔を、未春はモニター越しに送った。
「その通りですわ。わたくしも、観束君のおかげで本当の自分をさらけ出すことができました」
　慧理那が未春の演技……もとい語りかけに絆ほだされ、感慨深げに頷うなずく。
　内面だけでなく外面までさらけ出したせいで、総二が引き続き日々苦労しているのだが。
「あたしは子供の頃ころからこんな感じだけど……でも、元々そーじのおかげだったのかな……」
　愛香も続くが、やはりそれにはトゥアールが茶々を入れた。
「おっ、雑ざ魚こヒロイン筆頭の幼おさな馴な染じみも、昔と今を対比し始めたらいよいよ殿方争奪戦脱落のプレリュードですね。まあ、愛香さんもよくもった方じゃないですか？」
「メガ・ネプチューンの修理が終わったら、まとめてやるわね」
　ここでトゥアールが重傷を負ってしまったらメガ・ネを修理する者がいなくなるという配慮だろう、愛香は今の怒りを必殺技ゲージに溜ためておくに留とどめたようだった。
「何でトゥアールちゃんには気配りしてくれないんですか愛香さんは!?」

　こうして、イースナがやって来た最初の夜は更けていった……。

◇

　エレメリアンは基本的に、迷惑をかける存在だ。
　直接人に危害を加えることはないし、家屋や物の破壊に及ぶことすら、俺たちが迅速に現場に駆けつけられる体制が整っている今となって

は稀まれだ。それでも世界に向けて侵略を宣言したのだから、どんなに危機感が欠如しているとはいっても、一般人が奴やつらを「人間の敵」として認識していることに変わりはない。それでは──

「……例えば、奴らが慈善行為に及んだりしたら印象はどうなるか、ってことだな……」

　俺なりにまとめたその考えを、朝早く基地に集まったみんなに説明した。俺と愛香、トゥアール、慧理那に加えて、朝早くからの集まりだからか母さんも最初から席に着いている。

　メインモニターの画面を分割して表示されている、各社の朝のニュースに目を移していく。

　ニュースの内容は、風のように現れて親孝行を説いては風のように去って行く謎なぞのエレメリアン……プテラギルディについてだ。

　奴やつを追い切れないツインテイルズのことを何か言っているのかとも思ったがそんなことはなく、むしろ親子関係を修復して去って行く行動の是非について議論されていた。

　言ってみれば奴のしていることは、慈善行為だ。害どころか、ささやかな益をもたらしているとさえ取れる。

　……珍しくエレメリアンについて真ま面じ目めに議論していると思えば、一〇分もしないうちに先日のコスプレテイルレッドの録画映像が流れ始めた。各局打ち合わせ済みなのかというぐらい、似通ったタイミングで……。

　これだけお気楽な世間でも無視できないほど、プテラギルディは異質な存在ということだ。

「ああしてニュースに映ることも作戦なのでしょうか。『お母さんっていいな』……不特定多数の人がそう思えば、それが母属性マザーの促進に繋つながるのでしょうし」

　慧え理り那なの言う通りだ。そう考えれば、むしろあいつの行動は周到

だともいえる。自分をあぶり出そうとしているだけで侵略行動をしているわけではないというイースナの予想も、ちょっと怪しくなってきたな。
「俺、あいつ自身が属性を口にした時に疑問に思ったんだけど……一番最初にトゥアールから教えてもらった属性力エレメーラの原則。本能的な感情や愛と、属性力エレメーラは別だって話だったろ？」
「そうですわ……母属性マザー！　ご両親を愛するのは当然ですもの、嗜し好こうとは違うはずですわ」
　慧理那の言うとおり──もっとも親子にも色々な関係がある、「当然」と断言はできないにしても──母親への愛は、属性力エレメーラとは違って人間本来の愛なんじゃないのか？
「その通りです」
　トゥアールは眼め鏡がねをかけ、指示棒を持って恒例の説明スタイルになる。
「母属性マザー──これは、属性力エレメーラとしては極めてレアな存在です。仰るとおり、お母さんを愛するというのは、ある意味当然のことですからね。家族愛とは少し違うんです」
　母さんは鼻息も荒く目を星のように輝かせてテーブルを叩たたき、
「例えば総そうちゃんが、一人の男として私を好きになるとか、そういうことなのかしらっ!?」
　これまでの暴言珍言で装甲が限界になった息子の心に、さらにまたダメージを与える追加攻撃をしてきた。
「惜しいですね！」
　そしてトゥアールが母さんの破滅意見に肯定的だ。
「惜しいのかよ!?」
　愛あい香かも呆あきれつつ意見を出す。
「つまり、実の母じゃなくて、義母好きとか人妻好きとかに行っちゃう

属性ってこと？」
「あらあらさすが愛あい香かさん、すぐエッチな方に持っていきたがりますねえ！」
　トゥアールに肩をツンツンと叩たたかれ、拳こぶしを繰り出す愛香。トゥアールは見事なバク宙でそれを躱かわした。科学者さんが、日を追うごとにアクロバティックになっていく……。
「あたしはそういう例があるんじゃないかって言っただけでしょ！」
　トゥアールはさまざまな親子関係の例を、わかりやすく解説したあと、結論として、
「お母さんを大切に思うことを家族愛とは別のベクトルで嗜し好こうとするわけですから、これは一朝一夕に芽生えるものではないですよ」
「そうだな」
　俺も賛同する。あいつ自身が〝育ちにくい属性〟と言っていたのが、よくわかった。
　母という存在は全世界共通、絶対のものだ。しかしこと属性の話となると、先の戦いで知った閉所属性リミットスペースという不思議なものよりも、よほどマイノリティにさえ感じる。
「そういえば……エレメリアンって、お母様が、いないのですよね……」
　ほんの些さ細さいな独り言のようだったが、俺は妙に慧え理り那なのその呟つぶやきが印象に残った。
　その後も会議が進み、神出鬼没のプテラギルディに対しては、いつかのように挟み撃ちで追い込もう、という作戦で落ち着き始めた頃ころ。
　コンソールルームのドアが開き、小柄な少女がおずおずと中に入ってきた。
「あの……」
「イースナ⁉」

愛香が慌てて席を立つ。イースナはビクリと震ふるえて手を振り、
「ご、ごめんなさい、会議の邪魔は、しません……ただ……」
どちらかというと、俺たちの座っているテーブルやモニターよりも、反対側の壁にあるドア……トゥアールの研究室へと繋つながっている通路の方が気になるようだった。
「メガ・ネプチューンですか？　昨夜バッチリ直しましたよ」
「本当ですか……!?　トゥアールさん……!!」
ほっと胸を撫なで下ろすイースナ。
ちょっとくまが目立つと思っていたら、トゥアール、徹夜で作業してくれたのか……。
「頭部のツインテールのパーツが無傷だったのは幸いでしたね、ツインテール属性のない今の私では、それを新造することはできませんから……」
トゥアールが出ていってしばらく待っていると、キャリー付きの固定台ハンガーに乗せられ、メガ・ネプチューンが運ばれてきた。愛香や慧理那も一緒に近寄り、確認する。
「おお、ホントに元通りだ！　傷一つない!!」
おろし立ての自動車のように真新しい光沢を放ち、バラバラだった身体からだも完かん璧ぺきに修復されている。さすがはトゥアールだ。
「よかったな、イースナ」
俺が声をかけても反応せず、イースナはその姿を前に逆に不安になっているように見える。
「今、再起動スイッチを入れますからね」
背中についているらしいパネルをトゥアールが操作し、一歩下がる。
メガ・ネは目に薄く光を灯し、ギッ、ギッ、と音を立てて慣らすように頭を動かした。
やがて愛あい香かに視線を定め、真まっ直すぐ歩いて行く。

　コンソールルームに、緊張が走る。
　静寂が支配する中、愛香の胸元に視線を落とし、痛烈な一言。
「ナンデヤネン　ナンデソンナヒンニュウヤネン」
　現代のロボット工学ではとうてい追いつけない、超科学の粋（すい）を結集した流麗なバックハンドスナップで、愛香の胸元にツッコミを入れる。
「えええええベタなツッコミマシーンになってるじゃないですか――――っ!!」
　修復したトゥアールが真っ先に驚いている。この反応を見るに、みんなの前で初めて再起動するつもりで、昨日はまだ試していなかったんだろう。
「ベタなって何よ！　すごい無理のあるツッコミじゃない!!」
「えっ」
　俺でさえ言葉を呑（の）み込んだのに、よりによって慧（え）理（り）那（な）がリアクションしてしまった。
　ぬーん、と顔を寄せ、畏（おそ）れ多くも生徒会長にねちねちとガンつける女生徒Ａ。



「…………………………もしかして会長、トゥアールに感化されてあたしの胸小さいっていう固定観念に囚とらわれてきてない？」
「そそそそんなことありませんわ！　決して!!」
　固定観念とは、動かしがたい真実には適応されないと思うのだが……。
　そうこうしている間に、メガ・ネのツッコミは修復の恩人にも及んでいた。
「ツカイミチノナイオッパイ　ゴクロウサマデス」
「何ほざいてんですか挟んだり擦こすったり埋うずめたり攻守優れたＭＶＰおっぱいですよ!!」
　メガ・ネはもちろんそんな反論は意に介さず、じーっと母さんの方を見つめる。
「ナンヤソノカッコウ　トシカンガエンカイ」
　マントを翻ひるがえし、母さんは胸を張って言い返した。
「考えて、そして着ているわよ？　総そうちゃんさえよければ、この格好のまま授業参観に行ってもいいくらい」
「残念ながらよくないからなそれ!!」
　高等部に授業参観はないが、今後保護者来場行事はまだあるため、釘を刺しておく。
「スンマセン」
　ツッコミマシーンが謝っている……。母は強し、俺はあと何度そう痛感すればいいのか。
　気を取り直し、メガ・ネはじーっと慧え理り那なを見つめる。
　特にいじりどころもなかったのか、ふいっと顔を背そむけてしまった。
「会長にも何でそんな貧乳やねんってつっこみなさいよ汎はん用よう性ないわね!!」
　クラーケギルディが命を懸けて説いた貧乳論が、全く愛あい香かの心に

活いきていない……。
「な、何かそれはそれで寂しいですわ、わたくしにもツッコんでほしいですわっ」
　慧理那がそう口にした瞬間、母さんからトゥアールへ鋭い指示が飛ぶ。
「トゥアールちゃん」
「もちろん録音しています、未み春はる将軍」
「フフフ……〝約束の刻とき〟は近いわね……」
　不気味に笑い合う二人。ただの盗み録どりをなぜそんな大おお仰ぎょうに言う……。
「しかし何な故ぜこんなことに……神ゴッド眼め鏡がねの中に入っていた設計図通りに完かん璧ぺきに修復しましたよ」
　おとなしくなったメガ・ネをぺたぺたと触りながら、トゥアールが怪け訝げんそうにする。
「いえ……これが、メガ・ネの本来の姿、なんです……私は元々、こういうツッコミマシーンとして……話し相手として、メガ・ネを作りました、から……」
　イースナの告白に全員が驚いた。慧理那がイースナとメガ・ネを見比べながら聞き返す。
「でもメガ・ネさんは、人間と見間違うほど自然に喋しゃべられていましたわ」
「初めて起動した時、〝心〟を持って、普通に喋ったんです……。私も予想できない、奇跡のような出来事でした……」
　偶発的に〝心〟が生まれていたなんて。まさに奇跡そのものだ。
「メガ・ネを作ったのはイースナなんだ。神ゴッド眼め鏡がねを返して、トゥアールと二人で協力して作業をすれば……」
　俺の提案を、イースナが即座に否定する。

「いえ、メガ・ネを私が作れたのは、アルティメギルでも、最高峰のラボを使わせてもらえたから、です……私や、神ゴッド眼め鏡がねの力があったからでは、ありません……。私の科学力は、トゥアールさんには、遠く及びません……」
「トゥアール、この基地とアルティメギルの設備だと、そんなに差があるの？」
　愛あい香かに聞かれ、トゥアールは無念そうに頷うなずいた。
「残念ながら……私の科学力自体、大半がアルティメギルの技術の流用ですからね。アルティメギル最高の設備ともなれば、この基地よりも数段テクノロジーは上でしょう」
　だいぶ、雲行きが怪しくなってきたぞ。
「ウチ、ドナイスンネン」
　陽気なメガ・ネの声が場違いに響き渡る。
「ありがとうございます、トゥアールさん……これで充分、です……」
「……イースナ……」
　いたたまれなくなったのか、トゥアールはメガ・ネを再び休止状態スリープモードにした。
　それきり、本当にただの置物のように、メガ・ネは黙り込んでしまった。
　この子は一度喪失の痛みを味わっているんだ、今さらぬか喜びだったなんて思いはさせられない。俺が何か励ましの言葉を言うよりも先に、トゥアールが物言わぬメガ・ネの前に立ちはだかった。
「私は直すと言ったんですよ、今まで見てきた〝あのメガ・ネ〟に戻らなければ、意味が無いんです！　もう少し我慢してくださいイースナ」
　発奮したトゥアールにつられるように、愛香も別ベクトルからの提案をする。
「……目的のためにエレメリアンを倒すってのもいい気はしないけ

ど……あのプテラギルディって奴やつの母属性マザー、例の属性力エレメーラの核コアのハイブリッド技術で役に立たないかな？　メガ・ネプチューンって、結構お母さん気質だったじゃない」

　巨乳になるという欲望のために何体ものエレメリアンを血祭りに上げてきたブラッディーソルジャーが今さら倫理的なことを口にしているが、さすがにそれは否認された。

「偶発的に生まれた〝心〟はそれでは再現できませんね……。私にできるのは、その奇跡にも等しい偶然を、一つ一つ数値として羅列し、再現していくことだけです」

　奇跡の数値化……。途方も無い終わりなき作業に思える。

「ありがとうございます、皆さん……。わ、私たちに、こんなに優しくしてくれて……」

　気を遣わせまいと、彼女なりの精一杯の笑顔を俺たちに向けたんだろう。

　不器用な笑顔しかできない彼女が、自然な笑顔になったからこそ逆に、精巧なイミテーションのようで……俺たちは、コンソールルームを出て行く彼女の小さな背中を無言で見送るしかできなかった。

◇

　疲れが身体からだ中じゅうに泥のように溜たまり、俺は早めに床に就いた。今日も進展なしだ。

　朝の会議のあと、早速出現したプテラギルディと終わらない追いかけっこを続けた。速すぎて、単純な挟み撃ち程度では追い込むことさえできない。

　俺たちの徒労をあざ笑うかのように奴やつは飛び去り、そして徐々に世間での知名度も広まっていく。その善行もさることながら、幼いテイル

レッドと追いかけっこをしているという絵面が微笑ほほえましいらしく、一般人はいつも以上に危機感を持ってくれない。
　そうして人々の意識の外で密かに母属性マザーを深め、最後には奪う気か……。
　貴の三葉ノー・ブル・クラブとの戦いで手に入れた属性玉エレメーラオーブは、数が多すぎて愛あい香かたちも試しきれてないらしい。
　その中に、何か有効な能力なものがないか、探してみるということになった。
　トゥアールも作戦を練ってくれているし、明日からが勝負だ。
「明日、例のヒーリングマシーンを借りようかな……」
　呟つぶやき、電気を消す。すぐにでも眠りに落ちていける気がした。

　微かすかにドアが軋きしむ音が聞こえた。俺は浅い眠りから覚め、瞼まぶたを開ける。
　小さな枕を手にしたパジャマ姿のイースナが、部屋の中程に入ってきていた。
「……どうした？」
「あの、そのまま……総そう二じさんは、寝ていて、いいですから……」
　さすがに横になったまま話を聞くわけにもいかず、俺は上体を起こした。
　電気を点つけようとすると、イースナは力無く首を振った。
「メガ・ネ……なんですけど……」
　すぐに彼女の不安を察した。メガ・ネのあんな姿を見たのは、今朝のことだ。
「ああ。トゥアールも言ってただろ、不安なのもわかるけど、もう少し待っててあげてくれ」
　眠る時に、日中押し込めていた不安が一気に押し寄せてくる経験は、

俺にもある。
　どうしても眠れなくて、誰だれかに話を聞いてもらいたくなったんだろうな。つき合おう。
「……多分、あのままです……。私が、悪いんです……」
「心当たりがあるのか」
　こうしてやってきたのも不安を吐露するためとばかり思っていたので、少し意外に感じた。
「私、メガ・ネにずっとひどいことばかり、言ってきました……。メガ・ネはいつも、私のためを思って、言ってくれてた、のに……」
　常夜灯の薄明かりに照らされた彼女の小さな身体からだは、微かすかに震ふるえていた。
「だからメガ・ネはもう、私のことは見捨てて、本来のツッコミマシーンに戻った、んじゃないか、って……私……」
　まるで、本当に母と子だ。いつかこうして、その愛情に気づいて、後悔することまで。
　でも、この〝子〟は、まだまだそんな悔恨に身を窶やつすには早すぎる。
「……それに気づいたお前なら、きっとメガ・ネを助けてやれる」
「だけど、トゥアールさんでも無理、だったのに、私じゃ……」
「トゥアールは本当にすごい。俺たちはいつも助けられているし、頼りにしている。でも、メガ・ネと長い間心を通わせてきたのは、他ならないお前だろう」
　トゥアールの心が技術と、科学となって、俺たちに力をくれる。それを自分たちの心をもって揮ふるうのは、俺たちの仕事だ。
「トゥアールはメガ・ネの身体を治してくれた。心を取り戻すのはお前だ。イースナ」
　だから、この先は、この子が頑張らなくちゃいけないことなんだと思

う。
「……はい」
　そして、そのために俺たちが手伝えることがあったら、何でも協力しよう。プテラギルディー体にきりきり舞いになっている場合じゃないよな。
「…………あの、私……」
　イースナは持ってきた枕を胸に抱き、もじもじとしながらこちらを見てきた。
　気絶しそうなほどねちっこくメールを送ってくる女の子も、イースナ。そして今、折れてしまいそうなほどか弱く、儚(はかな)い不安げな顔を見せているのも紛れもなく、イースナなんだ。
　無性に放っておけなくて、俺は胸が温かくなった。
「……おいで」
　イースナは俺の言葉にこくりと小さく頷(うなず)き、持ち上げたシーツの中に身を滑り込ませてきた。

◇

「……聞きました、愛(あい)香(か)さん、慧(え)理(り)那(な)さん」
「聞いた……」
「聞きましたわ……」
「「「おいで、って……」」」
　盗撮も二日目。愛香と慧理那にとっては外泊も二日目。二人とも、保護者や家族の理解があるのが幸いだが。
　ここに来て、モニターには予想だにしなかった驚(きょう)愕(がく)の光景が映し出されていた。
　まさかの、総(そう)二(じ)からの誘い。躊躇(ためら)わずベッドの中に入るイース

ナ。
　それをガン見していたトゥアールは、よだれを垂らしながら拳こぶしを握り締める。
「ガチで殿方が女をベッドに誘ういやらしさのない……まるで、お兄ちゃんが小さな妹を慰めるような優しい口ぶりだからこそ──イイ！　しばらく使えそうですね永久保存版です!!」
　よだれを白衣の袖そでで拭ぬぐうトゥアールに、愛あい香かが詰め寄る。
「そんな場合じゃないでしょ！　思い出しなさい、あいつは……イースナは、テイルレッドに変身している時とはいえ、そーじとキスした女なのよ!!」
　愛香は頬ほおを紅潮させ、もごもごと口くち籠ごもりながら、
「ふ、普通にこの先に行く気なんじゃ……!!」
「まあいやらしい、愛香さんの桃色脳内で総二様はどんな行為をさせられているのやら!!」
　まるで図星を突かれたように愛香は顔を真まっ赤かにし、必死に話題をそらそうとした。
「さっき保存した音声没収するわ、あたしに寄越しなさい!!」
「そう言ってこっそり寝ながら再生する気でしょう！　何で愛香さんのベッドのシーツに染み作るお手伝いしなきゃならないんですか、私の独り占めです!!」
「じゃあここのコンピュータ全部引っぺがして持ってくわよ!!」
「ひいいいいいいいデスクトップパソコンを旅先に携帯するレベルの原始蛮族!!」
　慧え理り那なは手をぱたぱたと忙せわしなく振りながら訴えた。
「そんな場合じゃありませんわ、観み束つか君たちが……!!　あの、未み春はるさん！　男女七歳にして同どう衾きんせずと言いますわ、これは保護者が注意すべきでは……」

　その注意すべき保護者は、時代がかった少女漫画のように煌(きら)びやかな瞳(ひとみ)になって涙を浮かべ、何度も何度も頷(うなず)いていた。
「女幹部を籠(ろう)絡(らく)し、自らベッドにやってくるまでに仕込む！　完(かん)璧(ぺき)だわ総(そう)ちゃん、その手腕、あなたは私と父さんの夢をもとうに超えてしまったのよ!!」
「うわぁん未春さんも頼りにできませんわ!!」
　慧理那の取り乱し具合を見て冷静にならねばと思ったのか、愛香は深呼吸し、
「会長、あたしだってあんまいい気はしないけど、よく考えたらどうせそーじはあそっから何かするようなやつじゃないわよ」
　自分に言い聞かせるように慧理那を慰める愛香に、トゥアールは興奮しながら詰め寄った。
「総二様はそうでも女の方はどうなります!?　私がイースナだったらあそこまで密着したら総二様のパンツの中に手入れますよ!!」
「同郷の女が言うと説得力あるわねえ!!」
「のおおおおおやめてください何(な)故(ぜ)私を捻(ねじ)るんですか！　愛香さんはイースナのことを羨(うらや)ましくないっていうんですか!!」
「あたしだってそーじと寝たいわよ!!」
　トゥアールは捻(ねじ)られながらもほほう、といやらしい笑みを愛(あい)香(か)に送り、未(み)春(はる)もそれに同調。
　慧(え)理(り)那(な)は頬(ほお)を膨(ふく)らませていた。
「………………いや、違うの！　そういう意味じゃなくて!!」
「どういう意味ですか!?　具体的な名称をしっかり元気よく口におごおおおおおお!!」
　トゥアールは命からがら、再開された愛香の死の捻体(ツイスト)から脱する。
「まさか、イースナに教えられるなんて……お義(か)母(あ)様。私、大切なこ

とを忘れていました」

　そして、凜り々りしい表情で未春に宣言した。

「蛮族たちと戯たわむれるうちに見失いかけましたが……この家にやってきて初めてお義母様に語った夢を、今あらためて感じました。総そう二じ様の童貞を奪いたい。初めての女になりたいという、私の夢を……」

　未春は手を差し出し、トゥアールの手を力強く握る。

「……ようやくわかってくれたのね、トゥアールちゃん」

　女幹部、将軍としてではなく。息子の童貞を託す母の顔で、未春はトゥアールを頼もしげに見つめた。

「そんな汚けがらわしい夢があってたまるか痴ち女じょがあああああああああああああ!!」

　当然そんな宣言など見過ごすまいと、床を蹴り砕く勢いで突進する愛香。

「愛香さん!!」

　しかし今の確かく変へんしたトゥアールは、それすらも易やす々やすと制し、一喝する。

「夢とは、人それぞれのもの。他人から見たらちっぽけでも、その人にとっては大切な思いです。総二様はそんな人々の小さな幸せを守るために戦い続けてくださっているんですよ」

　トゥアールの迫力に気け圧おされ、振り上げた拳こぶしを下ろす愛香。

「人の夢を汚らわしいと笑うあなたに、総二様の童貞を奪う資格はありません」

「ま、待ってよ、あたしは別にあんたの夢を否定したわけじゃ……！」

　一いっ蹴しゅうするかのような圧倒的な説得力に負け、愛香は気弱に反論しようとするが──

「…………」

　スペック限界のＯＳを搭載したパソコンのように鈍い反応速度で、な

んとか正気に戻った。
「いややっぱ否定していいでしょうが危なく騙(だま)されるとこだったわ──────ッ!!」
「ぎゃあああああああ蛮族の知能指数ならこの程度のシリアスで騙(だま)せると思ったら若干の誤算があああああああああああああああ!!」

◇

　また、この不思議な空間だ。薄暗くて何もない場所に、いつの間にか俺は立っていた。

「姉様！　総二(そうじ)のやつ、知らない女の子と寝てるぞ!!」
　二度目なので、もしかして、とは思った。ここに俺を連れてきた子が誰(だれ)なのか、心当たりはあった。しかし、にわかにはそれを信じられなかった。
「お兄ちゃ～ん!!」
　大きく手を振りながら駆けてくる、桃色のフリフリのドレスを身にまとった女の子。
「……ふんっ」
　その後ろからむくれ顔で後をついてくる、全く同じ顔の女の子。
　彼女たちの違いは、ドレスの基調色であるピンクにあしらわれている装飾が、黒か白か。
　そして、柔らかそうで可愛(かわい)いサイドポニーを束ねているのが左か右か、というだけ。
「……ロエル、リルナ!?」
　異世界の双子姫──ロエルとリルナが、再び俺の夢に現れたのだ。
　駆けてきたロエルがジャンプし、俺にぎゅっと抱きつく。バランスを

崩して落ちないように抱きしめ返し、俺は遅れてついてきたリルナに理由を尋ねた。
「どうして……ロエルはともかく、リルナまで？」
「な、何だよ、ボクで来ちゃ悪かったのか。どうせ、合体してツインテールになっている方がいいんだろ！」
「そんなわけないだろ。嬉うれしいよ」
　合体していると、ロエルとしか喋しゃべれないもんな。
「ふん、殊勝な態度だ。まあ、ボクの夫なんだ、当然だな」
　姉妹別々に〝夢通信〟を行えているその理由は、姉のロエルの口から語られた。
「えへへ。リルナちゃんがね、総二お兄ちゃんと会いたい会いたいって毎晩泣くから、一緒に特訓したんだ！　ロエルたちが合体しないでそれぞれ、お兄ちゃんに会いにいけるように!!」
「泣いてないよう!!」
　俺の視線に気付き、そっぽを向きながらも、リルナは片目を小さく開けて俺を見てきた。
「ボクはポニーテールの方が好きだからこうしているが……キミがちゃんとボクと結婚したら、ツインテールになってやらんこともないぞっ」
　相変わらずの負けん気に、思わず笑みがこぼれる。
　二人と出会い、そしてまた逢う約束をして別れたのは、ほんの数週間前なのに。このあどけないむくれ顔も、ずいぶんと久しぶりに見るような気がしてしまう。
「夢でしか逢えないのは味気ないけど……その代わり、夢ここにいるのは、ロエルと、リルナちゃんと、総二お兄ちゃんだけ。三人だけの世界なんだよ！」
　ロエルが首に腕を回し、さらに密着。俺の頬ほおに自分の頬を擦すり寄せてくる。

「こうして、お兄ちゃんにぎゅーってしても、誰にも怒られないもーん」
　リルナは俺とロエルを見て、不機嫌そうに爪先でタンタンと地面を叩きながら言った。
「っ……そ、それよりだな！　今キミの隣にいる女は、何だ！」
　二人には、イースナのことが見えているのだろうか。
「一応あの子も、リルナの世界の平和を守るために貢献してくれたんだけど……」
「あのお姉ちゃんが？」
「じゃあ、そのコもツインテイルズなのか？」
「……いや、違う」
　そう思うのが当然だ。でも、この子たちは違った。
「どうしてだ？　キミの仲間なんだろ。ツインテイルズになるには、何か特別な条件でも必要なのか？」
「まさか。そんな気取った集まりじゃあないよ」
「なんだ。やっぱり、ツインテイルズなんだろ？」
　リルナの純粋な問いかけに、俺ははっとさせられた。
　俺はイースナに対して、心のどこかで線を引いてはいなかったか。保護した、敵の幹部と。
　リルナにしてみれば、俺たちと一緒に自分の世界を救ってくれたイースナは、立派に俺たちの仲間──ツインテイルズなんだ。
　テイルギアをまとうから、エレメリアンと戦うからツインテイルズの名を冠するわけじゃない。縁の下で支えてくれるトゥアールもまた、正真正銘のツインテイルズであるように。
「……ねえ、お兄ちゃん。お兄ちゃんの世界は今、大丈夫？」
「え？」
　ロエルが、耳元で囁くように心配してきた。

　あどけなさの抜けない子供に見えて、この子は王女らしく人の不安や悲しみを敏感に察知してしまう。今も、俺の表情や言葉の端はしから何か悩み事があると感じ取ったのかもしれない。
「戦いはまだ終わっていないけど、全然大丈夫だよ。いつか戦いが終わったら、今度は俺たちの世界で遊ぼうな、二人とも」
「うん！」
　ダークグラスパーを追って新たな四頂軍まで現れ、俺たちの世界はいよいよ激戦区の様相を呈してきた。俺がほんの少しでも不安を口にして、この子たちが「今度は私たちが助ける」と思ってしまわないようにしないとな……。
「総そう二じ」
　拗すねたように口を尖とがらせながら、リルナは地面と俺の顔とで視線を交互に移ろわせる。
「その……何だ。こうして世界を分かっていても、ボクとキミは夫婦なわけだ」
「……あっ」
　リルナの言葉に何かを察したのか、ロエルはしがみついていた俺から飛び降りた。
「な、な……」
　やけに口くち籠ごもっていたが、ロエルに頬ほおを指でつつかれ、観念したようにリルナは叫んだ。
「撫なでろ！　ボクの髪の毛を!!」
　本当にこの子たちは、俺の妹みたいだ。お姉ちゃんが甘えて下の子が拗すねるのは、きっと本当の家族、兄妹でもそうなんだろうな。
「ボ、ボクは本当は嫌なんだが夫婦……」
　それでもリルナは素直になれないようなので、俺は黙ってリルナの髪を撫でた。

「……相変わらずツインテールじゃないと撫で方が下手（へた）だな、キミは」
「悪かったな」
　首から耳まで真っ赤（まっか）にするほどだ、リルナはだいぶ呆（あき）れているのか。俺は、本当に髪の扱いが下手なんだろうな……。
「よかったね、リルナちゃん。これでまたしばらくは泣かないよね！」
「だから泣いてないよう!!」
　じゃれ合う姉妹を見て、俺は胸が温かくなった。
　そして、今俺の隣で寝ている少女のことを思う。
　彼女は、この姉妹と違って本当に孤独だった。だから、自分の手で相棒を作り上げた。それを……信用していた奴（やつ）に壊されてしまった……。
　不審者を極めたような態度だとは思ったがそれも、寂しさの裏返しなんだろうな……。
「まだかな、まだかな」
　気がつくと、ロエルがしゃがんで俺を見上げてきていた。
「どうした？」
「えへへ、この時間なら一番見やすいと思って、早起きしてきたんだ」
「見やすい？　何が？」
「お兄ちゃんはこの夢（せかい）では、寝ている時の姿がそのまま反映（シミュレート）されるんだよ」
　さすがにそれは俺でもわかる。今もこうして、Ｔシャツとジャージの寝間着だし。
「男の人って、寝ている時に不思議なことが起きるんだって！　特にレム睡眠の時になりやすいんだよね、リルナちゃん？」
「さ、さあ、何のことか。ボクにはわからないよ」
　俺が首を傾げたからか、ロエルがさらに詳しく説明をしてくれたが、

レム睡眠などの専門用語が出たせいで、余計にわかりづらくなった。
「不思議なこと？」
　なぞかけにギブアップして答えを聞こうとした瞬間、俺の身体からだが光に包まれ始めた。
「あっ……お兄ちゃんが起きちゃうよう！　まだ見てないのに～!!」
　そうだ。この感覚は……夢の終わりだ。
「またね！　次は見せてねっ!!」
　ロエルはあっさりと終わりを受け入れ、光の中で手を振った。この調子なら、またきっとすぐに会えそうだしな。
「あの、総そう二じっ……ボ、ボクも、姉様みたいに……」
　リルナはひどく名な残ごり惜しそうに、姉の後を追わずに俺の元へと駆け戻ってきた。
　両腕を躊躇ためらいがちに広げて震ふるえるリルナが何を望んでいるか、何となくわかった。
「……特訓してまで来てくれてありがとう、リルナ。二人にまた会えて、俺も元気が出たよ」
「うん、ボクも……」
　ロエルにそうしたようにリルナを抱き締める。
　彼女らしく、最後の一言だけ子供相応の甘えを垣かい間ま見せ……そして、消えていった。

◇

　そして意識は現実に引き戻される。
「ん……」
　薄ぼんやりとした明け方の自室、シーツの肌触り。
　そして……柔らかく、温かな感触が全身に広がっている。



「────はあはあはあはあはあはあはあはあはあはあはあはあ」

　はっと目を見開くと、血走った双眸が俺を凝視していた。
「うおああああああああああああああああああああ!?」
　隣で寝ているイースナを抱き締めてしまっていたようだ。
　フルマラソン直後のような荒い呼吸のイースナから手を離し、俺は跳ね起きた。
「はあ、はあはあ、な、何で叫ぶ、んですか、総二さんが、抱き締めて、きた、総二さんから抱き締め、て、」
「ごめん、寝ぼけたみたいだ！」
　その通りだ、当人からすれば叫びたいのは自分の方だろう。俺のことを信用して一緒に寝ると言ったイースナを、怖がらせてしまった！
　夢の中で最後にリルナにしたことがそのまま……現実の行動にまで反映されたのか！
「今さら、やめ、私、どのシーン回想モードと、同じにしようかって、考え、」
　後れ毛たっぷりに小首を傾げ、未だ荒い息と血走った目を向けてくるイースナ。
「俺、水飲んでくるから！」
　その迫力に耐えられず、俺は慌ただしく部屋を出た。
　そこには──

「おはようそーじ」
「おはようございます総二様」
「おはようございますわ観束君……」

　──笠地蔵のように、真顔で両目を剥いた三人が廊下に揃って立って

いた。

「――――――――――――――――――――――ッ!!」

　立て続けに来襲する時期相応のホラー演出に、俺はとうとう腰を抜かしてしまう。

　全員目に大きなくまをこさえ、愛あい香かと慧え理り那なのツインテールも寝不足を隠しきれない。

「部屋に入っちゃいけないって……こんなにつらいことだったのね……。でも、もう大丈夫、だって出てきたもんね……」

「お水ですね総二様、トゥアール水すいをたっぷり差し上げますので……」

「とりあえず一階にまいりましょう観束君……この手錠でわたくしと握手ですわ……」

　動き出した笠地蔵たちに俺は一切の為す術すべを持たず。愛香とトゥアールに両りょう脇わきを抱えられ、さらに手錠で慧理那と腕を繋つながれ、階段を引きずられるように降りていった。

　何な故ぜこのお地蔵様たちは、微笑ほほえみをどこかへ置き忘れてきてしまったのか。

「……まって……ずるい、私が……」

　掠かすれた声に呼び止められ、後ろを振り向く。

　開きっぱなしのドアの奥に見えるのは、ベッドからはい降り、そのまま四つんばいで廊下へと出て来ようとするイースナ。

　乱れ垂れた黒髪の奥から覗のぞく血走った目が、俺を捉えて離さない。

　夢か。俺はまだ、夢を見ているのか。

　夢の姉妹は、あんなにも笑顔だったのに……現実には、どこにも笑顔はない――。

◇

　フェニックスギルディが訪れたのは、寂しい荒れ果てた工房だった。いささか古さを感じさせないが、訪ね人を呑(の)み込む迷宮のような広大さは、遺跡と評するに正しいかもしれない。
　様々な器具が散乱し、壊れている。何者かの家(や)捜(さが)しを受けたのを最後に、そのまま何年も放置されたかのようだ。
　モニターのスイッチを入れ、コンピュータを操作。指一本でおそるおそるキータッチをしていくのを見れば、フェニックスギルディが機械に弱いのがわかる。
「……テイルレッドが男だって喋(しゃべ)ったこと、いい方に働いてくれてるといいけどな」
　打鍵の片(かた)暇(ひま)に、好敵手と認めた黒の少女を思い、独りごちる。
　操作は拙(つたな)くも、目的のものへのアクセスそのものに迷いはなく。秘密のデータを探し当てると、パスワードを入力し閲覧の権限を難なく獲得した。
「……やっぱりな！」
　画面を流れていくデータを双(そう)眸(ぼう)に映しながら、フェニックスギルディは昂(こう)揚(よう)する気持ちを抑えきれないようにそう零(こぼ)した。
「お前があの鎧(よろい)のお母さんだったってわけか、ペガサスギルディ——」
　データを全て閲覧し終わると、それに連動するように床の一部が開閉した。
　隠し小部屋となっていたその場所に置かれていた、両手で抱えるほどの大きさのケース。
　埃(ほこり)をかぶったそのケースを解錠すると、中からは色(いろ)褪(あ)せぬ真紅の輝きが噴き出した。
「俺様が見極めてやるぜ。あいつらが——ツインテイルズが、本当にお前

の意思を託されるにふさわしい奴(やつ)らなのかをな!!」
　自(おの)ずから光を放つ中身を取り出し、眼前にかざすフェニックスギルディ。
　それは、真紅のレリーフだった。
　何かとの合体を前提としたような、背面に小さな留め金(ロックアーム)のついたそのレリーフの中央には、ポニーテール属性のエンブレムが刻印されている。

　その神々しく淡い輝きは、テイルブレスと酷似していた――。

キャラクター名鑑
026

プテラギルディ



DATA

身長：209㎝
体重：149㎏
属性力：母属性（マザー）

幹部エレメリアン。死の二菱（ダー・イノ・ランヴァス）の副将格の一体で、あまり争いを好まない温和な性格。しかし戦闘力は高く、超音速の飛行能力に加え、全身が斬撃武器そのもの。さらに光線攻撃も得意とする、遠近攻防問わずの強戦士である。希有な属性を持った故の苦悩を抱えており、母性を求め暴走することがある。親孝行をしたいと思いながらも親孝行のできない、エレメリアンだからこその哀しみを背負った彼は、任務の遂行に自身の価値を見出だそうとしているが……。

第五章　超音速の眼鏡。

　とある県の市営体育館に、プテラギルディが出現したとトゥアールが探知した。
『予定を検索すると、今日はママさんバレーの会場ですね……』
　トゥアールのナビゲートを聞きながら現場の体育館に一人到着した俺の姿を見るや、すぐさま逃げの一手を打ったプテラギルディ。
　もちろん、俺たちもこれ以上千せん日にち手てにつき合うつもりはない。今日こそは何が何でも追い詰めるつもりでいた。
「プログレスバレッター!!」
　プログレスバレッターをフォースリヴォンに装着し、高速形態・フォーラーチェインへとチェンジする。
「いくぞおおおおおおおおおおっ!!」
「……むおっ!?　私の飛ひ翔しょうに並ぶとは……やるな、テイルレッド!!」
　単独飛行能力を持つフォーラーチェインなら、プテラギルディの逃走には充分肉薄できる。
　これまでは変身限界時間が二二秒しかないことを理由に追跡を諦あきらめていたが、トゥアールの立てた作戦でその懸念も対策済みだ。
「……子と一緒に空を飛ぶ──私がお前の母であったなら、この状況がどれだけ感慨深いものであったか……」
「初めて自転車に乗った子供を見守るような目で俺を見るなっ!!」
　唯一の不安はこいつが遮しゃ二に無む二に振り切ろうとし、俺の誘いに乗らないことだったが、こんな軽口を叩たたいている以上、問題ないだろう。
　空気を灼やき焦がす空の追跡劇は、ついに終わりを迎えた。
　追いつき、追い越されをわざと繰り返して微妙に進路を調整し、あら

かじめ決めておいた目的地にプテラギルディを誘い込んだのだ。
　もちろん、そんな繊せん細さいな駆け引きは俺にはできない。これまでの移動パターンからデータを算出し、トゥアールが導き出したシミュレートによるナビ通り動いただけだ。
「行ったぞ！　ブルー！　イエロー!!」
　ゲートを駆使して先回りしていたブルーとイエローに呼びかける。
　所要時間は一七秒。間に合った。
　フォーラーチェインの加速力と限界時間を加味し、どこに現れても追い込みを駆けられるよう何か所か保険で目的地を選んでいた。今向かっている場所は、その一つだ。
「「リフレクション・バースト!!」」
　ブルーとイエローが発動した光膜が、プテラギルディの眼前に突如として出現する。
「ぬおうっ!?」
　虚を突かれたプテラギルディは最高速のまま光膜に衝突し、反動で地面に射出され、減速できないまま墜落した。
「くっ、馬ば鹿かな、激突する瞬間まで何も感知できなかっただと……!?」
「属性玉多重変換機構エレメアディッションでわたくしとブルーがそれぞれ、巨乳属性ラージバストと貧乳属性スモールバストの他に、物質を感じとれなくなる邪険属性クルールを同時発動させる！　不可視の罠の完成というわけですわ!!」
　まるで存在を無視するかのように、物質を「感知させなくする」……それが、邪険属性の属性玉エレメーラオーブの効力だ。イエローが、自分が発見した新しい能力の有効活用を説明する。
　そして光膜の反射角度を調整し、空から地面に落とす。これもトゥアールのアイディアだ。
「さあ、もう逃がさないぞプテラギルディ！」

　山奥にある廃工場。鉄骨剝(む)き出しの建物が一棟ある以外は、周囲は山林だ。こいつのような幹部級とも思う存分戦える。

　俺とブルー、イエローで三角を描くようにプテラギルディを包囲する。

「どうしても、私を見逃すつもりはないというわけか」

　観念したように立ち上がるプテラギルディ。

「お前は随分楽しんでたみたいだけど、俺たちはいつまでも追いかけっこをするつもりはないんだ。今日こそ目的を言ってもらうぞ」

　プテラギルディは苦笑し、

「ならば私も聞きたいことがある。ダークグラスパー様が、お前たちを頼って来てはいないだろうか」

「何のことよ。知らないけど、もし訪ねてきたって追い返すけどね」

「…………なるほど」

　俺たちと違って、ブルーのポーカーフェイスは完(かん)璧(ぺき)だった。贔(ひ)屓(いき)目(め)に見ても、そこから何かを感じ取るなど読心でもしない限り不可能なはずだ。しかし、プテラギルディは意味深な笑みを浮かべ、両腕を構えた。

「私も、潮時だと思っていたところだ。これ以上長引けば、ビートルギルディといえども血気に逸(はや)る部下たちを抑えきれぬだろうからな」

　……やっぱり、最近エレメリアンがおとなしかったのは、こいつが裏で何かをしていたからなのか。それと、コミケでシケーダギルディも様付けで呼んでいたが、そのビートルギルディというやつが美の四心(ビー・ティフル・ハート)の隊長なのは間違いなさそうだ。

「何より、取らず攻めずを繰り返し隙(すき)を見せれば、私を討とうとダークグラスパー様も戦場へ現れると企(くわだ)てたが……その思惑も外れた。やはり、相当ショックを受けておられる様子」

　胸の前で両腕を交差させて構え、気合い一(いっ)閃(せん)。両手の甲に短剣の

ように鋭い三本の爪つめを装着すると、プテラギルディは空に向け声を張り上げた。
「ダークグラスパー様！　もしこの戦いをご覧になっておられるならお聞きを！　貴女あなたが姿をお見せにならなければ、私は与えられた任務を逸脱し、この三人のツインテイルズのツインテール属性を奪取いたします!!」
　……大丈夫だよなトゥアール、そこに今、イースナはいないな!?
　通信機越しの問いかけさえ、今のこいつの前では躊躇ためらわれる。それだけの凄すごみがある。
　俺たちはブレイザーブレイド、ウェイブランス、ヴォルティックブラスター……それぞれの武器を手にし、陣形を崩さずにプテラギルディを取り囲む。逃走の意思は放棄したとはいえ、こいつがやけに落ち着いているのが気になる。
　プテラギルディはブルーに向き直り、視線を落とすと、憤然とした表情で叫んだ。
「聞きしに勝る貧乳よな、テイルブルー！　まったくもって、母性のかけらもない!!　地面と間違えてその胸に着陸するところであったぞ!!」
　何て命知らずの挑発を……！
　俺とイエローが真まっ青さおになる中、ブルー自身は真顔だった。
「私はこの属性故ゆえ、多くの女性を目に焼き付けてきたが、それにつけてもこれ程の貧乳は見たことがない！　むしろ、母に甘える幼な子の胸と比してようやく同等ではないのか!?」
　ブルーの目が、紅あかく染まっていく。敵の安否を気遣うのはおかしいが、それでも俺はプテラギルディに口を閉じろ、と言ってやりたくて仕方がなかった。奴やつ自身のために。
「とにかく母属性マザーを持つ私にとってお前の貧乳は目の毒だ！　すまぬ、家に帰ってくれ!!」

致死量の暴言を吐き散らし、礼儀正しくお辞儀をするプテラギルディ。

「何だとゴラアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

戦場の大気を震ふるわせる、もはや恒例になったブルーの雄お叫たけび。プテラギルディが大お鋸がくずになるまでブルーにタコ殴りにされるのを想像し、俺は思わず目を背そむける。

しかしその死の突進を、プテラギルディは空に向かってロケットのように急上昇することで回避した。

悲しきは獣、髪紐属性リボンで空を飛ぶという思考には至らず、ブルーは空に向かって雄叫びを上げる。

「フッ……乳が憎いか！　それ、目の前に巨乳がいるではないか!!」

「…………ウウ……!?」

獣のような唸うなり声を上げるブルー。意識はないはずだが、本能に突き動かされるようにギギギ……と首を動かすと、その先にはテイルイエローが。

魔獣の双そう眸ぼうが、ギアで覆われた豊満な胸に注がれる。

「しまった！　奴の狙ねらいは……よせ、ブルー!!」

俺の制止などもちろん聞かず、ブルーはもはや四足歩行でも始めそうな雄叫びを上げてイエローに突進した。

「嘘うそ、やですわ、キャ――――――――っ怖いですわ――――――――っ!!」

夥おびただしい獣性を目の当たりにした恐怖で我を忘れたイエローは完全脱衣形態フルブラストモードになり、あろうことか飛びかかってくるブルー目掛けて一斉発射した!!

瞬間、轟ごう音おんが廃工場もろとも周囲を揺るがす。

爆撃の大半は直撃せずに空中で接触爆発を起こしていたが、その着弾

点があまりに至近距離だったため、ブルーもイエローも爆圧をモロに浴び、吹き飛ぶ。
　地面に倒れた二人は、俯うつぶせのまま顔を上げ、互いに向かって手を伸ばした。
「ああ、仲間同士の戦いが……ヒーローの熱いお約束が、こんな形で……」
　イエローは、どこか嬉うれしそうに目を輝かせて。
「きょ、にゅ……」
　ブルーは、倒れてなお諦あきらめず巨乳を滅ぼそうと、最後の最後まで前へと腕を伸ばし続けて。
　明暗の分かれる形となったが、二人は揃ってがくりと崩れ落ち、気を失ってしまった。
「あ、あ…………ブルー、イエロー……」
　この惨劇を目の当たりにしていたであろうトゥアールが、冷静に分析する。
『貧乳と連呼した敵が目の前から離脱した結果、遣やり場のない怒りの矛ほこ先さきが近くにいる巨乳、つまりイエローに向くのは必至！　私も仮面ツインテールとして現場に行く時は注意が必要ですね……完全無欠かと思われていたブルーの貧乳凶獣化形態バーサーカーモードの、思わぬ弱点です！』
　とうとうそんな名称までつけられていたのか、ブルー。意思のない暴走を戦力と考えることのリスクが浮き彫りになった。
　明日……いや、この戦いが終わったあと愛あい香かと慧え理り那なががどんな空気になるのか、今から頭が痛い。
　目を回している二人を何とか木陰に引っ張り、寝そべらせて休ませる。気を失っているだけだ。身体からだにも、ツインテールにも外傷は無い。

　脱ぎ散らかしたパーツを手早く拾い集め、イエローの太股の上にまとめて置いておいた。
「……聞くだけ聞いていたテイルブルーのデータ、咄(とっ)嗟(さ)に役に立ったようだな」
　俺が二人を介抱するまで待っていたプテラギルディが、そんなことを口にする。
「お前、アドリブでこんな作戦を⁉」
　突出した速度だけに目がいっていたが──こいつ、侮れない知能派だ‼
「よくもブルーとイエローを……‼」
　九割ブルーが悪いのは俺も承知だ。イエローが巻き込まれ事故だったのもわかっている。
　しかし、傷つき倒れた仲間を見て、正論だけで納得できるほど、俺は物わかりがよくない。
「演技とはいえ、望まぬ罵(ば)声(せい)は心が痛むものよ。真なる母性に、胸の大きさなど何の因果関係もない。できるだけ傷付けぬ決着のためとはいえ、ブルーには悪いことをした」
　激情のまま、プログレスバレッターを取り出した。
「今さら紳士ぶるな……！　チェンジ、フォーラー‼」
　再びフォーラーチェインに形態変化(チェインカスタム)し、プテラギルディに斬(き)りかかる。
　両手の爪(つめ)で軽々と弾かれ、俺は反転ざま、さらに刃(やいば)を撃ちつけた。交差した爪と剣とで、鍔(つば)迫(ぜ)り合いが始まる。
　プテラギルディが、じっと俺を見つめる。
「……何(な)故(ぜ)、すぐに逃げるのか。お前はそう聞いたな、テイルレッドよ……」
　今度は互いに得物を弾き合い、数歩距離を取った。
「その理由は、この母属性(マザー)の闇(やみ)にこそある‼」

爪の陰に隠れた拳こぶしを握り、胸を叩たたくプテラギルディ。
「我ら死の二菱ダー・イノ・ランヴァス、侵攻ではなく敵性戦力の討伐を主な任務としてきた……その理由は、お前たちが倒したという貴の三葉ノー・ブル・クラブと同じ！　問題を抱える戦士ばかりだからだ!!」
「何!?」
「死の二菱ダー・イノ・ランヴァスは、希け有うな属性力エレメーラを核に生まれたゆえ、その力を制御しきれなかった……裡うちに潜む悪魔に魅入られた者たちの集まりなのだ!!」
貴の三葉ノー・ブル・クラブは、アルティメギルのアウトロー……問題児ばかりの集まりだった。同じ四頂軍に、まだ問題集団がいたのか!?
「今も……私は、お前から感じる母性にもはや抗あらがいきれぬのだ、テイルレッドよ!!」
「母ぼせ──!?」
瞬きの間に距離を詰められ、意識が硬化した一瞬。プテラギルディは俺の身体からだをひょいと抱え上げ、なぜかおんぶをしてきた。
「お母さん、随分軽くなったね……」
細身の身体から想像もできない腕力で、背中で暴れる俺を押さえつける。
「苦労かけてごめん。これからは楽させてあげるからね、お母さん」
「のあああああああ離せええええええええ俺はお前の母さんじゃね──────ッ!!」
大学を卒業し就職が決まった日、女手一つで育ててくれた母親に精一杯の感謝を伝える息子のような涙誘う一幕。
情感のこもった熱演は力となり、プテラギルディを強烈なオーラが包む。翼を畳んだ背に激しい力場が発生して俺を取り巻き、魔のおんぶから脱出できない！
このままじゃ───!!

◇

　作戦が上手く（うま）ハマったのは最初だけ、あとは完全に相手のペースになり戦局はガタガタだ。
　トゥアールはモニターを見つめ歯噛み（はが）する。
「これは久々の大型ド変態さんです、ブルー、イエロー！　早く起きてください！　このままではレッドが保育を強要されます――――――――――っ!!」
　真っ向勝負のパワーファイターではなく搦（からめ）手で来る相手は、レッドの苦手とする相手。変態には戦闘巧者であるブルーがいつも対応していたが、そのブルーが半ば自滅でリタイアしてしまった。
　トゥアールは通信を通して必死に呼びかけるが、直撃はせず爆圧を浴びただけとはいえ、イエローの全武装の威力を共に受けた二人は、全く起き上がる気配がない。
　壁際のラックに置いた仮面ツインテールのマスクに視線を移す。せめて、自分が囮（おとり）にでもなれれば――。
　その時、背後から控え目な声がかけられた。
「トゥアール、さん……」
「イースナ!?　ここへは来ちゃ駄目ってあれほど言ったじゃないですか！」
　振りかえると、イースナと、その横に未（み）春（はる）が立っている。
「入り口の前にずっと立っていたから、私が中に入れたの。ごめんね。トゥアールちゃん」
「未春将軍……」
　気持ちはわかるが、プテラギルディはダークグラスパーの追撃を任されやって来たエレメリアンだ。自分のせいでツインテイルズが傷つく姿

を直視させるのは、イースナにとっても酷なことだろう。
「でも、あのプテラギルディってやつ、やっぱり今までのエレメリアンと違う気がするわ」
　未春は、我が子が母性を強要されるという希有な光景にも動揺せず、画面を凝視した。
「今までも、総ちゃんは色んな目に遭わされてきたけど、今回の敵は何か、必死さが違う気がする。まるで、捨てられた子犬みたい。母性を求めて、健気に泣いているように見えるわ」
　センチメンタルにすらすらと独りごちる未春。
「自分の属性に、振り回されて、いるんです……。母属性……稀少すぎて、報われない、属性力に……」
　首領直属戦士であったダークグラスパー……−イースナは、もちろん、死の二菱の構成員がどんなエレメリアンかは知っていた。それが、悲しき宿命を背負った者たちであることも。
「仕方ないわ。母性って、報われないものですもの。男女の愛なら互いに慮ることはできても、親と子じゃ、一方通行になってしまうことも多いでしょう？　あのエレメリアンは、一方的に母性を求めているのね」
『お母さん、すごく肩凝ってるね……ごめんね、無理させちゃって……』
『肩なんて凝ってねーよぷにぷにだろ揉むな――――っ!!』
　今も、母性を過剰に欲する怪物に、我が子が肩揉みをされている。
　母性を求め暴れるプテラギルディには、未春も一児の母として思うところ多いだろう。
　真剣にモニターを見つめる未春を見て、イースナの瞳は逡巡に揺れる。
「…………私、ずっと、お母さんに、甘えてました……」

「イースナちゃん？」

　未春の呼びかけにも応こたえず、イースナは決意を湛たたえた眼まな差ざしでトゥアールの胸を見つめた。

「トゥアールさん……。最後に、おっぱいに触らせてください」

「は？」

　イースナは、トゥアールのふくよかな胸に触れた。

　ストーキングの日々で何度も夢想した、この感触。万感の思いに包まれる。

「……これで、思い残すことはありません」

　イースナは寂しげな微笑ほほえみを残して踵きびすを返すと、出口へと駆けていく。基地の奥に位置する、出撃ゲートに向かっているのは明白だった。

「何『最後にキスしてくれますか』みたいなノリで人の乳揉んでくんですか、戻ってきなさいイースナーッ!!」

　トゥアールが追いかけるよりも先に、硬質な足音が甲高く響く。

「ナンデヤネン　ナンデヤネン」

　いつから部屋にいたのか。メガ・ネが、壊れたオルゴールのようにツッコミを繰り返しながら、イースナの後を追った。

「……あの……未み春はる将軍、メガ・ネのスイッチ入れました？」

「私、何もいじっていないけど……」

　トゥアールははっと何かに気づいたようにモニターに向き直ると、一心不乱に手元のキーボードを叩たたき始めた。

「未春将軍、私のラボから二番の端末を持ってきていただけますか!!」

「盗撮音声の編集用じゃない方ね！　わかったわ!!」

　もはや悪巧みを共有しすぎて備品の配置までツーカーになってしまった未春は、言われるがまま急いでラボへと向かうのだった。

◇

「くうう、これだけ親孝行をしても母性に目覚めぬか!?　何たる精神力!?」

男の俺は、どんなに求められても母性に目覚めることはない。こいつの誤算はそこにある。

「悪いな……今のところ、ツインテールへの思いだけで精一杯でよ……！」

たじろぐプテラギルディの隙すきを突き、俺は繰り出される親孝行から脱出した。しかし、全身を強烈なけん怠たい感が襲っている。強制的な安らぎに陥れ戦意を喪失させるとは、恐ろしい敵だ。

どうする、ここはブルーたちを抱えて一旦撤退するか……？

いや、こいつ自身が言ってたじゃないか、もう逃げはしないと。俺たちが撤退したら、すかさず本格的な侵攻を開始するはずだ。今ここでこいつを引き付けておかなくては……次に狙ねらわれた母子は、母属性マザーを芽吹かされ、奪われてしまうかもしれない。

ツインテール属性を奪われた人がツインテールにできなくなるように……母属性マザーが消えた人がどうなってしまうのか、想像もしたくない。

ブレイザーブレイドを杖つえのように地面に突き立て、俺は必死に怠感に耐えた。

「ま、待って！」

ブルーたちを横たえた方向の木々の奥からか細い声が聞こえ、俺とプテラギルディは同時に振り向いた。

「イースナッ！」

思わず叫ぶ。馬ば鹿かな、もう戦わないって言ったのに、何で戦場に来

た⁉

「……テイルレッドには、手を、出さないで……。私はもう、逃げません……」

「駄目だ、来るなイースナ！　基地に帰るんだ‼」

　思わず言ってしまってから、俺はぅ闊かっさを悔やんだ。プテラギルディが溜ため息いきをつく。

「やはり、ツインテイルズに匿かくまわれていたのですね、ダークグラスパー様」

　先ほどのブルーの言葉を完全に信用はしていなかっただろうが、決定的な言げん質ちを取られてしまった。

「……これでもう、私は、基地に帰れません。私が戻れば、こいつらは、基地を突き止めようとして、あなたたちに迷惑がかかります……」

　何てことだ、俺がイースナを追い詰めたようなものじゃないか‼

　イースナは変身していないが、プテラギルディは彼女をダークグラスパーと認識している。

　考えてみればダークグラスパーの認識攪乱装置イマジンチャフは善沙闇子アイドルの正体の秘匿に特化しているんだ、変身前も後も関係がない。彼女を無関係の別人だと言い張ることもできない。

「テイルレッド……お前はもう戦える状態ではない。おとなしくダークグラスパー様を引き渡してもらう。そうすれば、彼女の願い通り、お前たちの属性力エレメーラを奪おうとはしない。それは、私の任務ではないからな」

「……てめえが聞きかじったのは戦闘データだけか……！　俺が、テイルレッドが敵にそう言われて、はいそうですかって言うような馬ば鹿かだって、バンクに登録されてんのかよ⁉」

　イースナに視線を向けると、完全に観念したように俯うつむき、立ち尽くしている。

不意に硬質な駆動音が聞こえてイースナの後方を注視すると、メガ・ネがやって来ているのを目にした。俺は、メガ・ネに一いち縷るの望みを託そうと叫ぶ。

「メガ・ネ！　イースナを連れ帰ってくれ！　こいつは俺が倒すから!!」

「ナンデヤネン」

くっ……この状況でも、見えない何かにツッコみ続けるのか、メガ・ネ！　お前の一番大切な人が危ないんだぞ!!

「何を、言ってる……んですか、メガネにはもう、そんな言葉は、届きません……!!」

「お前言ってたじゃないか。引きこもりだった自分を明るくしてくれたのは、メガ・ネだって！　お返しに、同じことをしてやれよ!!」

「同じこと……？」

「あいつは……メガ・ネは今、心の中に引ときじこもってるだけだ！　呼びかけてやれ！」

心を取り戻してくれ、メガ・ネ！　イースナを守るために!!

「……テイルレッドよ……。そなたの気持ちはわかるが、メガ・ネプチューン様の心は完全に消え去ってしまっている。諦あきらめるのだ」

感謝するぜ。次から次にくだらないことを言いやがるから、頭にきてけん怠たい感も吹っ飛んだ。

「そう思いたいなら、勝手にそう思ってろよ！　……イースナ！　聞け!!」

プテラギルディに斬きりかかりながら、俺は虚うつろな表情のイースナに叫びかけた。

「メガ・ネを造ったのはお前なんだろ……だったらイースナだって、メガ・ネのお母さんじゃないか……!!」

ブレイドと二に爪そうが交錯し迸ほとばしる火花の鳴動で、声がかき消え

る。俺は喉のどから声を絞り出した。
「生みの親と育ての親……その二人が、相棒同士でもあるってことだろ？　こんなすごい関係があるかよ!?　なあイースナ！　諦あきらめないで呼びかけろ!!」
「――むう！　母同士……!!」
　プテラギルディが、動揺からか押し返す力を弱めた。
「オーラピラー!!」
　俺はオーラピラーで自分もろともプテラギルディを包み、ブレイザーブレイドを完全解放ブレイクレリーズした。
「グランド……ブレイザ―――――ッ!!」
　イースナから引き離そうと自分ごと展開したせいで、オーラピラーの捕縛が甘かった。
　プテラギルディは二爪の先端を合わせて頭上で構え、身体からだそのものを削さく岩がん機きのように高速回転させ、円柱の結界の天井を突き破って脱出した。
「くっ……！」
　そのまま空中で反転し、一気に俺へと向かってくる。真後ろにイースナたちがいる―回避はできない!!
「チェンジ―ライザー!!」
　プログレスバレッターを合体し、ライザーチェインへと変身。すかさずブレイザーブレイドツインを抜き放ち、連撃となる二度目の完全解放ブレイクレリーズを敢行した。
「ライジングブレイザ―――――ッ!!」
　フォーラーチェインによる飛翔加速を威力に乗せられず、不完全な状態で技を放つことになったが、ライザーチェインのバックパックの噴射力だけを頼りに、プテラギルディの渾こん身しんの一撃を受け止めた。
　二刀と二爪がぶつかり合い、行き場を失った炎が荒れ狂う。

　押されているのは、俺の方だ。踵かかとが地面にめり込み、そのままじわじわと後退させられていく。通信機が音割れを起こすほどの声量でトゥアールが訴えかけてきた。

『総そう二じ様、時間が……！　限界です！　ライザーチェインを解除してください!!』

　駄目だ、今形態変化チエインカスタムを解除したら、プテラギルディの攻撃を食い止めきれない！

「テイル、レッド……！　私のことなんて、気にしないで、逃げて……!!」

　イースナのそんな悲痛な訴えを聞いても、メガ・ネは何も動こうとしない。

　二爪と双剣の鍔つば迫ぜり合いはどちらも一歩も譲らず。カウントダウンと鼓動とが重なり、焦燥のままに俺は力任せに剣を押し出す。

「うおおおおおおおおおお！」

　ついにプテラギルディを弾き飛ばし、ブレイドを放り投げてプログレスバレッターに両手を伸ばした瞬間。二二秒――形態変化チエインカスタムの限界時間を超えてしまった。

「ぐっ……うわあああああああああああああああああああっ!!」

　全身を稲妻のような激痛が駆け巡る。痛みの連鎖爆発がツインテールの先にまで余さず奔はしり、ライザーチェインは強制解除されてしまった。

『総そう二じ様あっ!!』

「うっ、ぐ……！」

　限界暴走オーバーロードのダメージが、これほど苛か烈れつなものだったとは。頬ほおを滴したたり落ちるものが汗なのか血なのかさえ判別ができない。

「はあっ……はあっ……」

「馬ば鹿かな、制限時間付きの強化だったというのか!?　何な故ぜ、そこま

でしてダークグラスパー様を守ろうとする！　立ち上がることもできぬほど、ボロボロではないか!!」
　憐あわれむように言ってくるプテラギルディ。
「今さらそんなつまんねえこと聞いてんじゃねえぞ」
　男の意地ってやつか。立ち上がれないと言われた直後だが、俺はそのボロボロの姿で立ち上がって見せた。
「つまらなくなどない！　お前に、ダークグラスパー様の人生を背負う覚悟があるかと問うているのだ!!」
　さすがに、それがおちゃらけた問いでないことぐらいはわかる。
「俺は全てのツインテールを守る。たとえこの子が、眼め鏡がねを好きでも、元は敵でも……今ここにあるこのツインテールと、この子の心が！　俺が命を懸けて守るには十分な理由だ!!」
　だから俺は、あらん限りの信念を込めて返した。
「俺のツインテールは、覚悟だ！　このツインテールがある限り、俺に後悔はない!!」
　人生を……一生を背負えるかどうかは、わからない。けど、ツインテールなら背負ってみせるさ……!!
「……悔しいぞ、テイルレッド……。任務さえなければ……。背に枷かせを背負っていないお前と、万全の状態で戦ってみたかった……!!」
　プテラギルディは爪つめを構え、
「すまぬ！」
　ぽん、と肩を押す程度の力でブレイザーブレイドを弾いた。その勢いにすら耐えられず、俺は尻しりもちをついてしまう。
「え……」
　そして、身体からだ中じゅうが震ふるえ、意識が薄れていく。嘘うそだろ、俺、こんなにも弱って……!?
「ふざけるな……プテラギルディ！　まだ俺は戦える！　俺と戦

えっ!!」
　プテラギルディは、例の属性力エレメーラを奪うリングを手にし━━縁ふちを手で摑つかんだ。
　イースナを見つめる目は、冷徹な追撃者のそれではなく……何か、特別な思いを感じる。
「眼鏡属性グラスとツインテール属性。あなたの属性力エレメーラを奪わせていただきます。異存はないですな」
　イースナは答えない。代わりに、目線だけを動かすような儚はかなさで、メガ・ネを見つめる。
「……それで今度こそ、貴女あなたは全てを失う。何も残らぬのです。よろしいですなっ!!」
　あいつ、まさか……ああやって挑発すれば、ダークグラスパーに変身するとでも思ってるのか!?　無理だ、今のイースナには戦うことなんてできないんだ！
「一つだけ、約束して。私だけにして。もうメガ・ネからは、属性力エレメーラを、奪わないで……」
　それだけは絶対に譲らないと、イースナはプテラギルディを毅然と睨にらみつける。
「……いいでしょう。メガ・ネプチューン様の属性力エレメーラの核コアは、先の首領様の一撃で完全に破壊されていた━━そうお伝えいたします」
　最期の別れを惜しむように、メガ・ネを見つめるイースナの瞳ひとみが眼め鏡がねの奥で揺れる。
「ごめんね。いつも、文句ばかり言って……。怒ってたよね？」
「ナンデヤネン」
　ただのツッコミが、ほんの少し心が通ったかのように切なくかみ合う。
　その無機質な声にはっとなり、イースナはジャージの裾すそを握りしめ

て肩を震(ふる)わせた。
「やっ、ぱり……」
　そしてその弱々しい震えは、彼女の小さな独白にまで伝わっていく。
「……やっぱり、やだ……。一回だけで、いいから、また、声を聞かせて……」
　物言わぬメガ・ネに、イースナは叱(しか)られた子供のような無(む)垢(く)さで呼びかける。
「言うこと、聞く……。エロゲーの箱、ちゃんと、片付けるから……。脱いだパンツ、メガ・ネの箱(なか)にしまうの、やめるから……。もう、お股(また)にシール、貼(は)らないから……!!」
　プテラギルディはそんなイースナを見て後ろ髪を引かれるように歯(は)嚙(が)みすると、リングを手にしたまま空高く飛び立った。リングを投げつけるのではなく、最後の瞬間まで自分の手で握ったまま、属性力(エレメーラ)を奪う。それが、せめてもの餞(はなむけ)だと言わんばかりに。
「御免ッ!!」
　イースナは、自分の心を諦(あきら)めてしまっている……メガ・ネを助けるために……!!
「もう一度だけで、いいの……、最期に、私と、お話しして……」
　泡(ほう)沫(まつ)の願いが耳(じ)朶(だ)を叩(たた)き、俺は身体(からだ)を起こす。テイルギアは、ダメージで放電していた。無理をさせてすまない……俺の脚が砕けるくらいで済むならいい、立ち上がらせてくれ！
「っ……ああああああああああああああ！」
　根限りの力を振り絞り立ち上がった俺は、金縛りに遭ったように動けなくなってしまった。
　やめろ、駄目だ、限界なんかじゃないだろ――イースナを、守らなきゃ……。
「メガ、ネ……」

運命を受け入れていたはずの少女は、終末を、本当の闇やみを前に、心の鎧よろいを捨て去った。
　そして、あらん限りの声で叫ぶ。

「メガ・ネ―――――――――――――――――――――――っ!!」

　最後の最後――。全てを失った支配者グラスパーが裸の心で縋すがり、叫んだのは――彼女が、一番愛する相は棒はの名前だった。
　瞬間。俺の眼前を、轟ごう音おんが駆け抜けてゆく。
「ぐああああああああああああああっ!?」
　今まさにイースナを捉えんとしていたプテラギルディの横腹に、巨大な着弾の爆ばっ華かが咲く。
　意識の慮りょ外がいからの攻撃に、プテラギルディはたまらず声を上げて墜落し、大地に膝ひざをついた。
「むうう……!?」
　濛もう々もうと立ち込める煙の中佇たたずむメガ・ネ。
　俺たちだけではなく、攻撃を受けたプテラギルディまでもが呆ぼう然ぜんと顔を上げ、仁王立ちするメガ・ネの指から立ち昇る硝しょう煙えんの先を見守っていた。
「――ウチの……」
　煙が吹き晴れ。
　刹せっ那なの静寂を斬きり裂き。
「ウチのイースナちゃんをいじめるやつは誰だれやあああああああああああああああああ!!」
　メガ・ネプチューンの双そう眸ぼうが――烈と輝きを宿した。
「馬ば鹿かな!?」
　驚きょう愕がくするプテラギルディを悠々と飛び越え、メガ・ネはイース

ナの前に着地した。

「心が……戻った……!!」

　息も絶え絶えにそう絞り出す俺に向かい、メガ・ネが一礼をした。

「……ホンマにありがとな、テイルレッドちゃん。イースナちゃんを守ってくれて……」

　そして、未(いま)だ事実を受け止めきれずにいる小さな少女へと、その甲高い声で発破をかける。

「ふう、よく寝たで。何や、耳元でがなり立てられて、飛び起きたったわ」

　イースナは唇(くちびる)を噛(か)みしめ、メガ・ネの軽口に反論した。

「勝手に喧(けん)嘩(か)に首、突っ込んで、きおって、おかんか、貴様ッッ!!」

　変身しなければ出せないはずの、大(おお)仰(ぎょう)な口調の自分をさらけ出して。

「ああそうや。首突っ込んだるでー。ウチの悪ガキちゃんが喧嘩に腰引いとるんや、尻引っぱたいてしゃきっとさせたらんとな！」

　まさに母の余裕。子の癇(かん)癪(しゃく)をなだめすかすかのように、メガ・ネは優しく返す。

「……おかん、のくせに……!!」

　ずっと、耐えてきた。

「……メガ、ネ……」

　張り詰めていたものが切れ。押さえていたものがこみ上げ。

「うう、うわあああああああああああああん、メガ・ネえええええええええええ!!」

　俺たちにも、憧(あこが)れていたトゥアールにも、決して見せなかったその涙を、とめどなく頬(ほお)に零(こぼ)し――イースナは、メガ・ネに抱きついた。

「あっ……ああ、わああああああああああああああああああああ

あ!!」
　機甲の母は、その大きな手で力強く抱き返し、少女の涙を指でそっと拭ぬぐう。
「大丈夫やでイースナちゃん。ウチはもう二度と、いなくなったりせえへんからな!!」
　少女の嗚ぉ咽ぇっが、いつ終わるともなく戦場に響く。
「……お母さん……!!」
　不意にこぼれた、プテラギルディの呟つぶやき。
　血を分けただけが親ではない。生んでもらっただけが母ではない。
　願いによって心の再来という奇跡を成就させ、再び絆きずなで結ばれたあの二人は……プテラギルディにとって、求めていた母と子、そのもののはずだ。
　固く深く抱きしめ合う二人を見て、俺は鼻の奥がつんと痛む。
「……よかっ、た……」
　ふっと、全身から力が抜け失せた。身体からだを支えていた糸が切れたように、俺は崩れ落ちる。
　しかし、いつまで経たっても硬い地面の感触がやってこない。



　精根尽き果てた身体からだを優しい温ぬくもりが包み、顔を上げる。
　俺を抱き留めていたのは――イースナだった。
「ベッドの上とは、逆になりました……」
「イ、イースナ……」
「テイルレッド、ありがとう……私を……私たちを、守って、くれて……」
　今まで自分がメガ・ネにされていたように、俺を固く抱き締めるイースナ。
「奪われる痛みを、知って……心が壊れそうなほどの悲しさを、胸に受けて、ようやくわかりました……」
　イースナは俺をそっと地面にしゃがませると、眼め鏡がねを指で触れ、叫んだ。

「グラス―オン!!」

　彼女の日常の象徴であった群ぐん青じょう色のジャージが消え、黒色の粒子に包まれていく。
　二度と戦うまいとの決意を、禁を破り、宿敵プテラギルディの前で変身するイースナ。
「なぜわらわは、この力を奪うためだけに使っていたのじゃ……」
　エレメリアンに恐れられた闇やみの処刑人は黒き衣をまとい、今、戦場に再誕する。
「わらわは戦う！　こやつらとなら―ツインテイルズとならできる！　かつて憧あこがれたあの背中に！　遥はるか遠くにいるあの人に、今から一歩ずつ、追いついてみせようぞ!!」
　それは、諦てい観かんで得た偽りの希望をかなぐり捨て、再び理想の頂きに向かって一歩を踏み出した瞬間でもあった。

「……トゥアール……神ゴッド眼め鏡がねを返していたのか……」
　トゥアールから返答は無く、通信機越しに忙せわしないキータッチの音が微かすかに聞こえる。

　ダークグラスパーはマントを翻ひるがえし、堂々と天に携帯電話をかざす。
「プテラギルディよ！　任務完かん遂すい大義であった！　褒ほう美びに、アドレスをくれてやる!!」
　プテラギルディが、吃きっ驚きょうのうちに自身の携帯電話を取り出す。
「む、は、速い……!!」
　そこにはすでに、彼女のメールが送信されているのだろう。完全復活を象徴するかのような神速のアドレス交換に、プテラギルディは戦せん慄りつする。
「貴様が受け取りしは、このダークグラスパー最後のアドレス、最後のメールという栄誉じゃ！　今をもって、ダークグラスパーは確かに死んだ!!」
　携帯電話を仕舞うと、未いまだ立ち尽くすプテラギルディに指を突きつけ、ダークグラスパーは高らかに宣言した。

「これより先は──このテイルブラックが相手をしよう!!」

　プテラギルディは、その赫かっ々かくたる決別の言葉を、笑顔で受け止めた。まるで、憑つき物が落ちたかのような晴れやかな表情で。
　そして勇も猛たけく、我負けじとばかり堂々と返言してみせた。
「お言葉ながら……ダークグラスパーなる者、腑ふ抜ぬけでまるで手て応ごたえなき小物でありました。兎うさぎ狩りにも劣る些さ末まつな戦いにてそのような栄誉、賜たまわるには能あたいませぬ!!」

「何じゃとお!?」
「――しかし！」
　前言を強く否し、未いまだ握り締めている自身の携帯電話をイースナに差し出した。
「たった今、我らアルティメギルの恐るべき強敵として現れた新戦士――テイルブラックのアドレスをいの一番にいただけるとあらば、身に余る光栄！　このプテラギルディ、身命をとして戦いましょうぞ!!」
　その爽快なまでの宣戦布告を受け、イースナが初めて、アドレスの交換を拒んだ。
「それはできぬな。わらわのこれからの初めては全て、ただ一人に捧げると決めた！」
「残念至極。一体どこの誰だれでしょうかな、その果報者は！」
　プテラギルディは俺を一いち瞥べつし、ニヤリと笑う。
「プテラギルディよ。いらぬと申すなら是非もない！　あとは無銘のまま朽ちるだけぞ!!」
　身体からだが動かないことがもどかしい。
　せっかく決意したイースナの、手助けをしてやることもできないなんて……。
「イースナ……」
「……おっと……ことここにきてその呼び名は、少し寂しいぞ。テイルレッドよ」
　何もするなとばかりに、イースナは俺の肩を押して深く座り直させた。
「お前たちは戦いの折には、パーソナルカラーで互いを呼び合うのであろう？　仲間の証として」
　熱く、強く、決意に濡れた瞳ひとみが眼め鏡がねの奥から俺を射抜く。
「わらわもそのように呼んでくれぬか。レッド」

手助けなんて、今の彼女には出過ぎた真似だったんだ。

「──わかった……頼むぞ、ブラック！」

「うむ!!」

イースナは……テイルブラックは、この戦いで過去と決別しようとしているのだから。

プテラギルディは巨大な二に爪そうを構え。

迎え撃つブラックも、闇やみの大おお鎌がま・ダークネスグレイブを手にする。

「死の二菱ダー・イノ・ランヴァアス──右牙の副将ライトファング・プテラギルディ！　推して参りまするぞ、テイルブラック!!」

「よかろう！　存分に来い!!」

同時に地面が砕け、互い目掛け一直線に突進した両者の刃やいばが火花を散らす。

硬質の金属音は飛び散る火花より遅れて空に響き、さらにその火花は消えるより先に次が生まれ、宙を埋めてゆく。いつしか荷重された火花は稲妻のように巨大化し、周囲に轟とどろいていた。

俺は、本気で戦うダークグラスパーの姿を、初めて目の当たりにした。

正直に言って、彼女は裸にシールを貼はっている変な子、というイメージが先行し、その力の全貌を摑つかみ損ねていた。

しかし迷いを捨て去って直ひた向むきに戦う彼女が、これ程の強さだったとは。

プテラギルディは間かん隙げきを縫ぬって鎌かまを爪つめで突き弾くと、一気に高空へと上昇した。

「イースナちゃん！　乗りぃや！」

すかさず戦闘機形態メガネウインガーに変形したメガ・ネに騎乗し、ブラックは天空の翼竜へと迫撃する。

地上の攻防をさらに上回る機動で、二本の閃せん光こうが青空に斑まだらの爪つめ痕あとを描いていく。

空では、地上の戦いとは様を異にする。飛翔速度は圧倒的にプテラギルディの方が速い。

いかに人馬一体のコンビネーションを見せるダークグラスパーとメガ・ネでも、単騎で互角以上の速度を持つ相手には、次第に防戦を強しいられていった。

「うあっ……!!」

渾身の一打を防御した衝撃で搭乗席から跳ね飛ばされ、眼下の廃工場へと落下していくブラック。

急旋せん回かいしたメガ・ネはすんでの所で追いついて宙空で爆走機形態メガネストライカーに変形し、イースナを確保。その雄大なタイヤのグリップをもってして、突き出ていたさびた鉄骨に着地した。

重力に逆らって垂直の鉄骨をフルスロットルで爆走し、ブラックは追撃してくるプテラギルディとデッドヒートを繰り広げる。

激突の余波か、弾いた互いの刃が擦さっ過かしているのか、剝むき出しの鉄骨が次々に寸断され、地面に落下する。剝はげ残ったコンクリートが、粉こな微み塵じんに砕けて噴き上がる。もはや廃工場どころではなく、部品単位のスクラップにまで分解されてゆく。

傾斜のついた終端の鉄骨をジャンプ台にブラックはバイクを宙に舞わせ、振り向きざま背後のプテラギルディに強烈な一いち斬ざんを見舞った。

「むうっ……！」

しかし、その一撃を受け止めるだけではなく勢いを利用して二人の前方へと旋回し、プテラギルディは左右それぞれの爪でブラックとメガ・ネにカウンターを食らわせた。

「ぐっ……！」

今度ばかりは回避も叶かなわず、二人は地面に強したたかに打ちつけられ

た。メガ・ネは変形を解除され、人型のまま地面を転がる。
　ブラックの方は、双角を思わせるヘッドパーツが中心から割れて落ちてしまっていた。
「ブラック!!」
　気丈に鎌かまを握り締めて立ち上がるブラック。
「そんなに心配そうな声を出すな、わらわたちが負けるものか……！」
　空中戦ではプテラギルディの圧倒的優位は揺るがない。
　戦うブラックと見守る俺の焦あせりが同調し始めたその時、トゥアールから通信が入った。
『イースナ！　私の声が聞こえますか!!』
　ブラックは、嬉うれしそうに何度も頷うなずいた。
「聞こえるぞ。わらわにも、トゥアールの通信が聞こえる！」
『……神ゴッド眼め鏡がねを解析した時、総そう二じ様たちのテイルギアと同じように通信機能をつけておいたんです。まあ、使うことになるとは思いませんでしたが！』
　イースナ相手にはどうしても素直になれないようだが……逆だろう。信じていたからこそ、トゥアールは通信機能をつけたんだ。
『そして、取り付けたのは通信機能だけではありません。あなたが解析できずに放り投げたと思おぼしきグラスギアのブラックボックスに、あるシステムを仕込んでおきました。今、その起動プログラムを入力し終えたところです』
「何じゃと!?」
『その名もインフィニットシステム。あなたとメガ・ネプチューンの力を合わせ、グラスギア最強の切り札となり得るはずです!!』
　メガ・ネの修復と神ゴッド眼め鏡がねの解析に合わせて、強化機能を追加していただって!?
『ただし──これは私にとっても未知数。システムの解放にはリスクが伴

います。もし失敗すれば、先ほどのレッドよりさらに巨大なオーバーロードがあなたたち二人を襲い、二人の眼鏡属性グラスは消えてなくなってしまうでしょう』

「何だって!?　失敗って、いったいどのくらいでそうなるんだ!?」

　俺の問いに、トゥアールは冷静に答える。

『０．０００１％です』

　……よかった、ほとんど無視していいくらいの数字だ……。

「それは……成功確率じゃな？　トゥアール」

　落ち着き払った声で、ブラックは聞き返した。

『その通りです』

「成功の確率だって!?　不可能だって言ってるようなものじゃないか!?」

　一〇〇万分の一……それはもう、確率とさえ言えない数字の暴力だ。

　はっとして空を見上げる。プテラギルディには通信は聞こえていないはずだが、俺たちのやりとりから奥の手があることを悟ったのだろう。翼を広げ、腕組みをしたまま俺たちを見下ろしていた。

「テイルブラック！　私は逃げも隠れもしませぬ。貴女あなたに秘めたる力があるというのなら、是非遠慮無くぶつけていただきたい!!」

　ブラックは鼻を鳴らし、

「ふん、ああして高みから見下ろされっぱなしは癪しゃくに障るのう！」

「よし、いっちょやったろか、イースナちゃん」

「うむ！」

　こうして狼狽うろたえる俺が滑こっ稽けいなほど、ブラックとメガ・ネ、二人の肚はらは据わっていた。

　捨て鉢ではない、確かな信頼を寄せ合った相棒だからこその決意。なら俺も、みっともなくオタオタしないで二人を信じるだけだ。

「インフィニットシステム──なるほどこれか!!」

　ブラックはグラスギアを通してシステムの特性を把握したのか、二本指を揃えて神(ゴッド)眼(め)鏡(がね)の左右のアンダーリムをなぞり、叫んだ。

「ゆくぞ！　インフィニットコンバイン!!」

　瞬間──メガ・ネの身体(からだ)の継ぎ目や駆動部、関節から次々に光条が噴き出し、頭から足の先まで、幾十ものパーツに分離した。

　まるで彼女のトラウマを揺さぶるかのような光景。しかし、ブラックは二度と揺るがない。両腕を突き出して宙に浮遊する彼女を守るかのように、バラバラになったメガ・ネのパーツが周囲を猛然と旋(せん)回(かい)し始めた。

　テイルブラックの放つ黒いオーラを銀の閃(せん)光(こう)が照らす様は、彼女を中心に大銀河が顕現したと錯覚させるほどの神秘。

　拳(こぶし)や爪(つま)先(さき)が収納され、ある箇所は伸び、ある箇所は縮み、旋回するパーツは、見る間にその形を変化させていった。ブラックを守る──母のように抱き包む、強化パーツになろうとしているのだ。

　腕に、脚に、胸に、腰に。銀のパーツが次々とグラスギアに重なり合わさっていく。

　壊れたヘッドパーツは天を衝(つ)く悪魔の角からツインテールを象徴する二房となって新生し、そこへさらにメガ・ネのツインテールのパーツもドッキングした。

　そして黒と銀それぞれの片翼が合わさり、比翼の鳥を思わせる左右異色の翼が光を吹き散らして空へと広がった。

「おお……!!」

　天から見下ろすに畏(おそ)れ多い眩(まばゆ)いばかりの光景に、いつしかプテラギルディは大地に二の足をついていた。

　合体は完了した。光に包まれ、ゆっくりとブラックが地面に着地する。

　しかし、その目は虚(うつ)ろで──俺は、最悪の事態を想像してしま

う。
「……ブラック！　眼鏡属性グラスは無事か!?」
　虚うつろな目のまま俺を見返り、一層不安が増した直後――ブラックは、不敵に微笑ほほえんだ。
「お前の可愛かわいいツインテールはしっかりと見えておるぞ。むろん、わらわの愛いとしき眼め鏡がねを十全に通してな!!」
〈ウチも大丈夫や！　さすがにまたすぐお寝んねはごめんやからな!!〉
　さらに、くぐもったメガ・ネの声も、グラスギアから聞こえる。
「やった！　成功したんだな！　トゥアール……発はっ破ぱをかけたのか!?」
　やたら大おお袈げ裟さな数値だったが、そのくらいの覚悟でやれ、という激励だったのか。
『――いいえ、確率は正式な計算結果です。もしイースナが、自分の一番愛するものを捧げるほどの強い覚悟を持たなければ、インフィニットコンバインは失敗、二人とも眼鏡属性グラスは消し飛んでいたでしょう』
　さらりと恐ろしいことを言うトゥアールだが、
「トゥアールからその成功確率を聞いた時、わらわは逆にチャンスじゃと思った。……運命を感じたのじゃ」
　ブラックもそれを受け止めるだけの精神の成長はとうに遂げていた。
「トゥアール。わらわたちは、科学者でありすぎたようじゃな。たまには頭を空っぽにして、馬ば鹿かをやってみるのもよい」
　立ち尽くすプテラギルディを見て、ブラックは手甲のパーツが積載されさらに重装甲になった右拳こぶしを握り締める。



「成功確率……０．０００１％と申したの？　わらわには……わらわたちにはその数値、二つの眼鏡（めがね）が力を合わせ、一つの力になるという象徴に思えたのじゃがな？」

　二つの00と、一つの１……。言われてみれば、確かにそうだ。言葉遊びだが……不思議と説得力がある。

『……イースナ。私は、私たちの世界で、ツインテールも眼鏡も守ってあげられませんでした。だからあなたはせめて――自分の大切なものだけは、守ってください』

「トゥアール……ありがとう!!」

　万感の思いをこめたトゥアールの言葉を胸に、テイルブラックはプテラギルディへと向き直った。

「そのように急仕込みの合体などをしたところで、この私は倒せませぬぞ!!」

　威嚇（いかく）するように爪（つめ）を擦（こす）り合わせるプテラギルディ。

「なるほど……。アルティメギルという組織。やはり見切りをつけて正解だったようじゃな」

「む!?」

「ツインテールを何よりも求めていながら、その実、本質が全くわかっておらぬ……。心と心を通わせる力……ツインテールの本当の力を、わらわはツインテイルズから学んだ!!」

　もはや偽りの強がりではない、真の心の強さが紡（つむ）ぐ、勇壮な言葉。

「たった二体ではない……何百何千にも勝る二がある！　わらわとメガ・ネの二つの心が合体したからこそ、最強なのじゃ!!」

　ブラックの背の翼が、それぞれ半円を描いていた翼が光をまとい、二つの完全な円となる。

「二つの眼鏡が――二つの∞（むげん）が一つに重なり、真なる無限をここに紡ぐ!!」

それは、眼鏡を……守るべきものを背負った、彼女の最強の姿だった。

「見せてくれるぞ、テイルブラック・インフィニティチェインの力を!!」

気け圧おされるように空へと飛び立ったプテラギルディを、ブラックが猛追する。

形態変化チエインカスタム……いや、最強変身チエインエヴォルブとでもいうべきか。

元より輝く純黒という異彩な眩まぶしさを宿していたグラスギアは、メガ・ネプチューンの機甲銀シルバーと溶け合い。黒ブラックでありながら闇やみを捨てた、壮麗な輝きを漲みなぎらせている。

「馬ば鹿かの一つ覚えで速さ勝負か！　よかろう。わらわも、闇を支配するのはいささか飽あいておった」

黒と銀の両翼で空を斬きり裂き、ブラックは軽々とプテラギルディに肉薄した。

「初戦の景気づけに、大そ空らを支配してみるとするか――!!」

プテラギルディは爪の先に光を灯ともすと、光線にして撃ち放った。

そして回り込むように高速移動し、光線の着弾を待たずに攻撃を重ねる。

射線を集束させ、十字砲火どころか三六〇度全方位から網目状に放たれる光線。

驟しゅう雨うのごとくその身に迫る光線を前に、ブラックは不敵に笑った。

躱かわす。踊るように躱す。

折り畳まれて面積が縮小されているとはいえ、あのメガ・ネの巨体と合体した今のブラックはかなりの強装甲。その重量を全く感じさせない超絶の飛翔で、迫り来る光線のことごとくを回避していく。

「言っておらんかったか、プテラギルディよ!!」

　空戦機動の弱点である「制動」をも容易たやすく無視し、ブラックは大空を踊るように急転する。
「わらわの眼め鏡がねは、全てを見通すとな！」
「ぐうっ……！」
　予知にも似た先読みと超音速の機動を合わせ、無敵の回避力を見せつける。
「ならば、見通されるより速く動くまで！」
　放った光線網の間かん隙げきを縫ぬうように、プテラギルディは肩から隆起した刃状のパーツを摑つかみ取り、ブーメランのように投げつける。先読みした思考のさらに先を狙ねらうように意識の隙すき間まを縫った投とう擲てきに、ブラックは反応できない。
　無防備な背中を直撃しようとしたその瞬間――飛来した∞型のパーツが、間一髪でブーメランを弾き返した。あれは、メガ・ネの脚部に収納されていたタイヤのパーツだ。
〈油断大敵やでイースナちゃん！　まだまだ、うちがフォローしたらんとな！〉
　タイヤパーツは合体後は∞型に連なって飛翔し、メガ・ネの意志でブラックの防御をサポートする、独立飛行防御盾シールドフライヤーの役割を果たすのか……！
「合体するのも考えものじゃな。こうおかんの小言が内から響いては、煩うるさくてかなわん！」
　二人のやりとりも、信頼が嚙かみ合った余裕、生命のリズムを感じる。
　ツーカーの母子は心と身体からだ、そして眼鏡が一つとなり、今や微み塵じんの死角もない。
　逆にプテラギルディは超絶回避の前に光線を撃ち尽くし、一瞬の隙を見せた。

「合わせよ、メガ・ネ！　メビウスクラッシャーじゃ!!」
　ブラックはすかさずかつて尾のように腰から垂らしていた刃(じん)鞭(べん)武器・ダークネスウィップを抜き放ち、先ほどのタイヤパーツを今度は重ね合わせて連結。星球武器(モーニングスター)に変形させた。
　それを頭上で豪快に振り回すと、プテラギルディ目掛け円を描くように投擲。回避に先んじて刃鞭がプテラギルディの身体に巻き付き、そこへ周囲を十二分に旋(せん)回(かい)し重さと威力を乗せた先端の硬輪による打突。強烈な一撃が、ついにプテラギルディの身体を直撃した。
　苦悶の声をも飲み込み、かつての上官へと潔(いさぎよ)く賞賛の言葉を贈るプテラギルディ。
「お、お見事です……しかし、私も命を懸けるという言葉、偽りではありませぬぞ！」
　プテラギルディは天を仰ぎ、雄叫びを上げて力を漲らせ始めた。背の翼が巨大化し、プテラノドンそのものの飛翔特化の異様な身体へと変貌する。
「あれがプテラギルディの最終闘体……!!」
　そして、再び頭上で両(りょう)爪(そう)を合わせ、猛回転のまま飛翔してゆく。さっき俺に使った技だ！
　上昇を続け、雲を突き抜け、豆粒の大きさほどにも見えなくなってしまっている。あの超高空から放たれる一撃……間違いなく、最後の攻防となるだろう。
〈やれるか、イースナちゃん!?〉
　メガ・ネの声に、ブラックは勇ましく応(こた)えた。
「やれるとも。わらわの眼(め)鏡(がね)は――無限じゃ!!」
「あっ、お前……！」
　その言葉は、記録だけでしか知らないだろうが……偶然の一致ではなく、確かに俺を真似るように、ブラックは言った。

「レッドよ、人の心に限界はない。ならば、わらわたち属性力エレメーラの装ギ甲アをまとう者が、無限の力を持つのは当然のこと」

「ブラック……」

「無限の冠は、わらわに寄越しておけ」

　こんな時に不謹慎かもしれないが──出会った頃よりも伸びたブラックの、イースナのツインテールを見て、俺は感じた。

　変身したからではない。時の流れで自然のままに伸びたツインテールは、この世界に来てからの、彼女の成長の足跡なのだと。

「そしてお前は──無限で収まるな。さらなる高みへとゆけ、レッド!!」

　そのツインテールをたなびかせ、ブラックはダークネスグレイブを手にした。

「完全解放ブレイクレリーズ!!」

　ダークネスグレイブが展開し、巨大な弓に。そこへさらに、背の両翼が分離して合体し、壮麗な剛弓へと進化した。

「母属性マザーを持つ戦士、プテラギルディよ！　しかと受け止めよ、母子の愛！」

「受け止めてみせましょうぞ、母上エエエエエエエエエエエエエエ!!」

　頭を守るツインテールのパーツと神ゴッド眼め鏡がねから光の線が伸び、ブラックの手に、一本の矢が握られる。

「そして、わらわたちの、無限の思いを!!」

　隕いん石せきの如く轟ごう然ぜんと落下してくるプテラギルディを、番つがえられた矢が捉えた。

「インフィニットバニッシャ─────────────ッ!!」

　放たれた矢は∞インフィニティの紋様を螺ら旋せんの飛行機雲と描き飛び立ち、針をも通す正確さでプテラギルディの爪つめを射抜く。

　瞬間、巨大な∞が空に広がり、プテラギルディを包み込んだ。

「うぐああああああああああああああああああああっ!!」
　見上げた空に背を向け、インフィニティチェインが解除される。
　テイルブラックとメガ・ネに分離した瞬間、空で大爆発が巻き起こった。
　猛烈な爆風にツインテールを揺らしながら、ブラックはそっと眼鏡（めがね）のブリッジを持ち上げた。

　　　◇

　力無く落下し、地面に激突したプテラギルディ。何とか歩けるまでに回復した俺は、ブラックに肩を貸してもらい歩み寄る。
　プテラギルディは、息も絶え絶えに口を開いた。
「テイルレッドよ……一つ頼みがある」
　俺が頷（うなず）くと、プテラギルディは遺言のように重々しく言葉を紡（つむ）いでゆく。
「ダークグラスパー様は、首領直属戦士──総てのエレメリアンを統（す）べる存在。しかしその実……見ていればわかるだろうが、かの少女には指揮官の才能など塵（ちり）ほどもない……」
　一瞬眉（まゆ）を顰めたブラックだが、黙って続きを聞いていた。
「───ダークグラスパー様が不幸にした人間は一人もいない……。ただ、処刑人として上（う）手（ま）く担ぎ上げられ、反逆者のエレメリアンを処罰していただけだ……。それなら、結果的にはお前たちと変わりなかろう」
　今（いま）際（わ）の際の言葉の意図を悟り、俺はプテラギルディの前に片膝（ひざ）をつく。不器用なまでにひたむきなその言葉を受け止めた。
「安心して迎えてやって欲しい……。新しいツインテイルズ、テイルブラックをな」

　俺は深く頷き、偽りのない言葉を返す。

「たとえイースナが罪を犯していたとしても、その罪を償ってもらいながら、迎え入れるさ。この子が、ツインテールを愛する限り──大切な仲間なんだからな」

　プテラギルディは満足げに笑い、身体からだから放電し始めた。

「頼もしいやつ。お前のような気骨あふれる幼子がリーダーならば、何の問題もあるまい!!」

　思えばこいつの行動には、どこか一貫性がなく、不確かだった。

　最初から……ダークグラスパー追撃の任を受けた時からこいつは、この結末を望んでいたのではないか。

「お前、結構お節介なヤツだな」

　苦笑して立ち上がると、プテラギルディは呵かか々と大笑した。

「当然だ！　私は母属性マザー……母と認めた方に孝行するが息子の本懐よ！　せめて、最期だけでもな!!」

「──たわけが、何が孝行か……。子が母より先に逝ゆく以上の親不孝があるものか」

　ブラックは、一冊の本を右手に掲げた。

　この場にそぐわぬ肌色面積の表紙だが、プテラギルディははっとしてその本を見つめた。

「そ、それは……！」

「これが貴様のエロ本か。わらわが確かに見つけた!!」

「あ、ああ……私のエロ本が……やっと、ベッドの下から──」

　ブラックのその行動が、一体何を意味していたのか、俺にはわからない。

　ただはっきりと言えるのは、最期の瞬間──プテラギルディは、子供のように無邪気な笑顔に戻っていたことだ。きっと奴やつにとって、全ての憂いが報われたのだろう。

　俺たちがその場を離れたのを見届け、プテラギルディは爆散した。
　愛を求め彷(ほう)徨(こう)した母属性(マザー)の戦士は、最後は正しく母を愛する子として、願いを全うしたのだ。
「イースナちゃん、そんな本、どこで見つけたんや？」
　不思議がるメガ・ネの質問にブラックは溜(ため)息(いき)をつき、
「部屋のエロ本の隠し場所を知る者など限られていよう。母親か、あるいは、親友かじゃ」
　ブラックによると、エロ本は俺たちの誰(だれ)も気づかないまま、この戦場に置かれていたらしい。
　最期に願いを叶(かな)えるためブラックは話を合わせたのだろうが、激闘の最中、人知れずエロ本を置いて去った何者かに心当たりがあるのだろう。厳しい瞳(ひとみ)で虚空を見上げた。

　その置き去られたエロ本こそが、美の四心(ビー・テイフル・ハート)との最終決戦の狼煙(のろし)だったのだ――。

エピローグ　異世界の痴女プラス。

　振り返ってみれば戦いばかりだったが、この夏休みは俺たちツインテイルズにとってかけがえのない出会い、そして仲間を得た、素晴らしい日々だった。
　朝の日差しも心なしか優しくなったように感じる、新学期初日。
　愛あい香か、トゥアールと共に通学路を歩きながら、俺はイースナのことについて話していた。
「じゃあ、そーじの家に住み着くってことはないわけね」
　何な故ぜかほっとしたように聞いてくる愛香。
「マンションを借りて、防犯……っていうか防護体制だけは造るってさ。ただそれも念のためで、ツインテイルズになったって宣戦布告したんだから、アルティメギルの奴らも反逆者としてじゃなく敵として対応するだろうから、そんなに心配はいらないだろうとは言ってた」
　アルティメギルのやつらは、ツインテイルズに変身する人間の正体を遮しゃ二に無む二にに突き止めようとし、その家や家族を狙ねらうといった戦略を採ろうとはしない。今のイースナも俺たちと同じ立場になったというわけだ。
　イースナなら、家うちの地下の規模ほどは必要なくても、前線基地としての体ていはすぐに整えられるだろう。
「……メールで知ったの？」
「ああ」
　それらは、イースナから送られてきたメールで知った近況だ。
　いつからか、メール着信のバイブレーションで俺自身もビクリと震ふるえるのが条件反射になってしまった。
　しかし、人間は適応する生き物。俺も、台風のように襲ってくるメールの山を速読し、返信を当たり障さわり無い一通に集約する術すべを身につ

けた。攻防共に進化したといえるだろう。
「それにしてもトゥアールも素直じゃないわよね、何も言わずにグラスギアをパワーアップしておくなんて、いいとこあるじゃない」
　トゥアールの脇わき腹ばらを肘ひじで小突く愛あい香か。いつものように肝臓に肘の一点打を放つというわけではなく、普通の女子っぽいやりとりだ。
「愛香さんはイースナ絡がらみだと何な故ぜそんなに私を優しい目で見るんです!?　脳内で百合妄想が捗はかどってるんですか!?」
　トゥアールは愛香を連れて早歩きになり、電柱の陰に隠れた。
「……守られる立場だと、ますます総そう二じ様に依存します。あのメンヘラは自分で身を守れる力を持っていた方がいいんです」
「なるほどね。ま、そっちを半分って思っておくわ」
「何でいちいち含みを持たせるんですか!!」
　二人が何かひそひそ話をしているうちに、曲がり角で慧え理り那なと合流する。
「おはようございます観み束つか君、今日から新学期ですわね！」
「ああ。おはよう慧理那。嬉うれしそうだね」
「ええ。だって新しい仲間が増えたんですもの。しかも、かつて敵だった少女とわかり合って！　本当に嬉しいですわ！」
　この真しん摯しで無邪気な笑顔……テイルブルーが仲間に加わったのを喜んでくれた時と同じだ。
　慧理那がいれば、イースナもすぐにツインテイルズに打ち解けられるだろうな。
「会長、ホントにごめんね、あの時は……」
　戦いで自爆し合った同士、帰還した直後に土下座をつき合わせる勢いで謝り合った愛香と慧理那だったが、未いまだに愛香はこうしてことあるごとに謝罪の言葉をかけている。

「気にしないでください津っ辺べさん、仲間じゃありませんの。その代わり、いつかわたくしが暴走してしまった時は――あなたが止めてくださいね」
　慧理那は少し演技がかった口調で、愛香にそう言った。ヒーローのお約束っぽい展開を願っても、愛香はホントに容赦も倫理も無く力尽くで止めるだけだろうから、ぅ闊かっに誓いを交わさない方がいいと思うけど……。
　横を歩く桜さくら川がわ先生は、やけに顔に疲れを滲にじませている。
「誤解するなよ観み束つか。私が疲れて見えるのは加齢で体力が落ちているからじゃないからな」
　相変わらず鋭い洞察で先手を打つと、桜川先生は溜ため息いきをついた。
「……夏休みの終盤、お嬢さまがお前の家に何泊かしていたな。私も護衛で一緒に泊まるって言ったのに、奥様に駄目って言われたんだ……。絶対誤解されているぞ……」
　そうか、数日とはいえ本業の護衛を外された形になるのだから、悲しむのは当然か。それにしても、俺を見る目が恨めしすぎる気はするが……。
　愛あい香かは太陽を振り仰ぐと、大きく伸びをした。
「イースナの件も落着したことだし、心置きなく新学期を迎えられるわね！」
「伸びなんかしたらぺったんこが強調されるだけな伸びゃ――――――――っ!!」
　口を滑らせて愛香に製麺のように伸ばされているトゥアールに気を取られていると、横から俺の手元にチラシが差し出された。
「ヨロシクオネガイシマース」
　どこかで聞いたような、甲高い声で呼びかけられ、俺は反射的に振り向く。

「あ、はい……？」
　そこには鮫さめの着ぐるみ……善いい沙すな闇あん子ことコンビのマスコットゆるキャラ、メガネドンが立っていた。そして、半開きの口はそのままに、深々と俺に礼をする。
「あっ……!?」
　俺の声に反応してトゥアールと愛香、二人を見ていた慧え理り那なが振り向く前に、素早く曲がり角の奥に隠れてしまうメガネドン。通学路で生徒にチラシを配っていたのではなく、俺にだけ渡そうと待っていたのかもしれない。
「……何だ、あのゆるキャラ、できる……!!」
　唯一それを目撃していたのは、桜川先生だった。紙捌さばきの達人として、メガネドンのチラシ配りに光るものを見たようだ。
　愛香もトゥアールもダークグラスパーの認識攪乱装置イマジンチャフのせいでイースナ＝善沙闇子という図式を知らないままだし、メガネドンもそうなのだが……もしかして、メガネドンの正体に一番最初に行き着くのは、桜川先生なんだろうか。
「そーじ、何？　そのチラシ」
　俺がチラシを持っているのに気づいて、愛香たちが近付いてくる。
「……さっき渡されたんだ。善沙闇子のニューシングルの号外らしい」
　イースナは善沙闇子としてのアイドル活動は続けるという。作戦行動としてではなく、自分のやりたいこととしてだ。それなら、俺も応援しない理由はない。
　もちろん、そうなるとツインテイルズになっても会える機会は限られてくるだろうが。
　善いい沙すな闇あん子こ・８ｔｈシングル。一貫して眼め鏡がねへの愛を歌ってきた彼女の新境地と題され、今回のテーマがチラシには描かれていた。
〝ツインテールが大好きな男の子のことを綴つづったナンバー〟

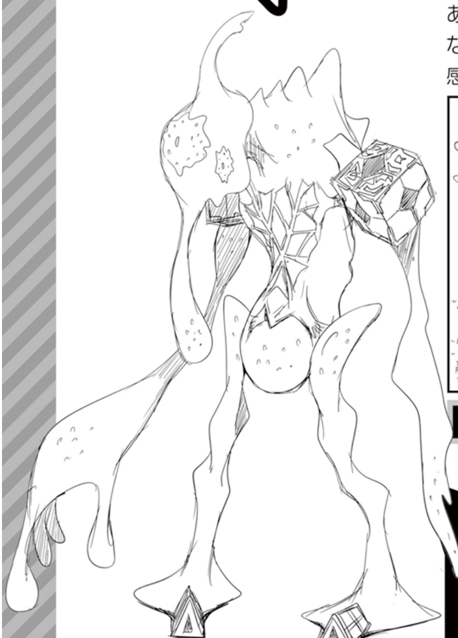
「……ん……？」
　他人事とは思えずビラの記事を読み進める。
　そのシングルのタイトルが、最後にデカデカと記載されていた。
『もう　逃がさない』
　俺の手の平から、ビラが滑り落ちた。
「………………」
　夏の終わり。
　新たな仲間と、新たなお茶目を抱え、俺たちツインテイルズの戦いは、続く。
　強引にそう自己完結しようとした俺は、トゥアルフォンが震ふるえたのを感じ、ギクリとする。
　恐る恐る取り出し、本文を確認すると──

　────────ずっと、見てますよ

　新学期を迎える陽よう月げつ学園へ向かう前に、俺は意識が遠のいていくのを感じた。

ぼくのかんがえたエレメリアンのコーナー

No.005
アメーバギルディ



水沢夢の選んだポイント

本編で愛香も唸っていましたが、僕もこの変化球な属性に思わず目を引かれました。弱点ありきの能力設定も非常に魅力的です。屈強な戦士が多いので、たまにこういう不思議な感じの見た目もいいですね。また、応募時からモチーフは変わっていますが腰属性のエレメリアンも、応募作からです。（応募時：細腰属性、ガルーダギルディ PN：ペコさん）こちらも能力の面白さに注目しての採用です。



埼玉県・てんたーくさん（24歳）の作品

応募のポイント

今回は恐竜モチーフのエレメリアンも多く寄せられていました。6巻では物語上どうしても登場させられませんでしたが、次回からは……!? 出オチ、一発勝負、ニッチな属性の応募大歓迎ですので、どしどしご応募ください！（ただ、他作品のパロディだけはすみませんがNGで……）

応募方法

ハガキの表に住所・氏名・ペンネーム・年齢・電話番号を、裏にエレメリアンの名前とデザイン、属性力を書き、下記のあて先までお送りください。また、デザインのみ、属性力のみでの応募も可能です。

▶▶▶ 〒101-8001 東京都千代田区一ツ橋2-3-1 小学館
ガガガ文庫編集部「ぼくのかんがえたエレメリアン」係

メールでのご応募の場合は、データファイルを添付してこちらのアドレスまで。

▶▶▶ sukisukitwintail@gmail.com

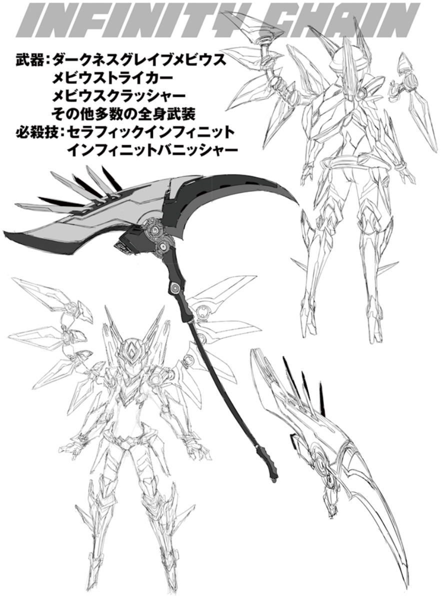
なお、採用したエレメリアンの著作権は著者およびイラストレーターに帰属されます。また、応募していただいたハガキ、ファイルの返却は行っておりません。

グラスギア設定資料 03

テイルブラック インフィニティチェイン

TAILBLACK INFINITY CHAIN

武器：ダークネスグレイブメビウス
メビウストライカー
メビウスクラッシャー
その他多数の全身武装
必殺技：セラフィックインフィニット
インフィニットバニッシャー





テイルブラックとメガ・ネプチューンMk.Ⅱが眼鏡（インフィニット）合体（コンバイン）した姿。トゥアールはグラスギアの改修時に、これまで蓄積した属性力ハイブリッドのノウハウを活かし、本来危険である同属性同時使用の負担を軽減するため、合体という形で強化システムを構築した。それでも多大なリスクを伴うことに変わりはなく、成功したのは二人の強い絆あってのことである。神眼鏡（ゴッドめがね）の特性を最大限に活かし、メガ・ネの思考と連動した予知レベルの先読み能力を備え、機動力、攻撃防御と全てが飛躍的に向上している、テイルブラックの最強形態である。

あとツインテールがき

前巻でアニメ化企画進行中の発表をしてから今日まで、息つく間もない日々でした。

微力ながら僕も原作者として、素晴らしいアニメスタッフの皆様に協力させていただきたいと思い、ボイトレに励み、「モケー」と叫ぶ練習にも力が入ってきました。

準備は万端なのですが、なかなか戦闘員(アルテイロイド)のオーディションに呼ばれません。もう少し先なのかな？　スケジュールは空けているんですが……。

最近は東京に遠征する機会も増えた地方住みの僕ですが、宿泊先のホテルにこもって原稿を書く機会も増え、こういうちょっとしたことでも作家っぽいなあと実感しています。

ビジネスホテルって、午前十時以降は四方八方の壁と廊下を貫通して掃除機の音が大音量で聞こえてくるんですけどね……。ガンガン原稿書きますよ！

新たな仲間を得て加速するツインテール、次巻もお楽しみに！

謝辞です。イラストの春日(かすが)さん。今回も最高なイラストありがとうございます！　ついにツインテールが動く時がやってきましたね！　目指せ、メガネドン着ぐるみ実物化!!

担当の濱田(はまだ)さん、もう一度戦闘員(アルテイロイド)役のオーディションの件ご確認お願いします！

今回も、完成と出版に携(たずさ)わってくださった全ての皆様に、感謝とツインテールを!!

フフフ……。約束の刻(アニメ)は近いわね……。

水沢　夢

Yume Mizusaw

北国在住のツインテール作家──ですが、今年は関東半在住になりかけつつも楽しく日々執筆しております。ただただ、作品に携わる全ての方に感謝です。
今後も『俺、ツインテールになります。』からは目が離せませんよ！

小学館ｅＢｏｏｋｓ

俺、ツインテールになります。 6

２０１４年６月27日　電子書籍版発行

者　水沢　夢

人　佐上靖之

人　野村敦司

集　濱田廣幸

所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋２-３-１

s-ebook@shogakukan.co.jp

本　２０１４年６月23日　初版第１刷発行

　ISBN978-4-09-451491-9